

第6章：メコン・ドンナイ川平原域とその周辺における紀元前2000年～1000年紀の土器編年

A 遺跡研究前史

I はじめに

ヴェトナム南部における先史考古学の研究は1976年の南北ヴェトナム再統一以前に、フランス入学者を中心に分布調査、簡単な発掘調査が進められており、Mission Pavieなどの考古資料報告から数えれば約100年ほどの研究史を有していることになる。それらは各種の考古学情報として公表され、サーフィン文化系の甕棺墓遺跡、新石器時代の大型居住遺跡、環状土塁遺跡などの重要な遺跡の発見をもたらしている。しかし、遺物の組成や型式学的研究にもとづく編年の枠組みの提示には至っていなかった。南北統一後（1976年）、北部ヴェトナムの考古学者が南部に入り、考古学調査を再開する。Đồng Nai（ドンナイ）川、Vàm Cỏ（ヴァムコー）川流域の遺跡が主な発掘調査対象であった。以後約30年間に調査された遺跡は、以下のような遺跡に上る（Fig.60）。

なお、遺物については、後述の編年議論に必要な石斧、青銅器、鉄器の有無のみを注記した。また、C14年代については、新石器時代相当の遺跡は筆者のアンソン遺跡調査例（Table 5）以外はわずかなので、本文中に列記してある。また、青銅器時代以降の遺跡に関しては、Fig.114にまとめてある。

II Vàm Cỏ Đông（ヴァムコードン）川流域

An Sơn（アンソン）は、大型の重層マウンド遺跡で、ヴァムコードン川左岸（ロンアン省ドゥックホア県）1978年に最初の発掘が行われ（Le X.D. 1979）、1997年に筆者らの発掘を行った。最大4.5mの文化層が確認されている。1978年の発掘では、下層部の採取炭化物より、 $2755 \pm 50\text{BP}$ と $2855 \pm 60\text{BP}$ が測定されている。1997年調査のC14年代はTable 5参照。

Lộc Giang（ロックザン）も、文化層の厚さはアンソンには及ばないが、2m以上の文化層をもつ大型重層マウンド遺跡で、アンソンからわずか500mの所に位置している。1988年と1993年に発掘が行われ、93年次には最下層からの炭化物が $3950 \pm 75\text{BP}$ のC14年代が測定されている（Vương T.H. 1996）。石斧が多く出土している。

Dinh Ông（ジンオン）は、ヴァムコー川中流域に位置する大型重層マウンド遺跡で、1990年に調査されている（Bùi C.H. 1991）。各種型式の石斧が出土している。

Giồng Cây Trôm（ゾンカイチョム）は、わずか3-40cm程度の文化層をもつ遺跡である（Pham Q.S.&Pham H. 1980）。1996年に筆者らもサーベイを行った。方角斧が採集されている。

Gò Cao Su（ゴーカオスー）は文化層厚が2m近くあった重層マウンド遺跡だが、中上層部は完全に削平されてしまった。土製鋳型、鉄片などが出土している（Trần A.D. et al. 1996）。

Rạch Heo（ザックヘオ）は、ヴァムコードン川中流域右岸に位置する低湿地遺跡である。1996年に

筆者らが表採調査した。

Gò Xoài (ゴソアイ) は、ヴァムコードン川中流域左岸に位置する小型マウンド遺跡である。1995年の試掘で75cm程度の文化層が確認されている (Bùi V.L. et al.1996)。

III Vàm Cỏ Tây (ヴァムコータイ) 川流域

Rạch Rừng (ザックズン) : 杭上住居址と思われる木杭類と石環をした伸展葬が確認された遺跡。1991年に緊急調査で人骨や遺物が収集されている (Vương T.H.1992)。C14年代はFig.114参照。

Cổ Sơn Tự (コーソントゥ) : ヴァムコータイ川上流域右岸に位置する直径100m近い円形重層マウンド遺跡。最大3m強の文化層が、試掘で確認されている (Nishimura et al. 1997, Nishimura 2003a)。

Gò Ô Chùa (ゴオーチュア) : 最上流域に位置する3つのマウンドが連結した大型遺跡。1997年に中央マウンドで2カ所の発掘が行われている (Ngô T.P.&Bùi P.D. 2000,2001)。C14年代はFig.114参照。

Lò Gạch (ローガック) : ヴァムコータイ川上流域に位置する小型のマウンドが2つ連結する遺跡。2003年に試掘が行われ、2005年に発掘が行われている。

IV Đồng Nai (ドンナイ) 川流域

Bến Đò (ベンドー) : ドンナイ (サイゴン) 川右岸に位置した大型居住遺跡。1975年以前に発見調査され (Fontaine 1971)、1977年に調査され、60-80cmの文化層が確認されている (Vũ Q.H.1991a)。75年以前の調査で、 $3000 \pm 110\text{BP}$ 、 $3040 \pm 140\text{BP}$ のC14年代が測定されているが (Fontaine&Delibrias 1973)、採取コンテクストが明らかでない。各種型式の石斧が出土している。

Bình Đa (ビンダー) : ドンナイ川中流域の左岸 (ビエンホア市郊外) に位置する重層マウンド遺跡。1979年と1993年に発掘が行われ、2.8-2.9m程の文化層が確認されている。(Nguyễn V.L. 1981, Phạm D.M. et al. 1997)。石琴がまとまって出土した遺跡として有名である (Le X.D.&Nguyễn V.L. 1983)。1979年調査時に表土から190cm深度で採取した炭化物が、C14年代で $3180 \pm 50\text{BP}$ と測定されているが、採取深度に疑問がある (Phạm D. M.私信)。

Suối Linh (スオイリン) : ドンナイ川中流域右岸に位置した石斧、石環、石刀などの石器製作址であるが、土器製作のためのアンヴィルも出土している (Bui C.H. et al. 1997)。

Đa Kai (ダカイ) : ドンナイ川上流の支流、ラーガー川流域の舌状台地に位置した環状集落遺跡。石琴が発見されて有名な遺跡である。1998年に筆者らが、3カ所の発掘調査を行った。発掘や遺物の報告は別途行っており (Nishimura 2002a, Nishimura ed.in press)、そちらを参照して頂きたい。C14年代は、第1坑の第2レベルグリッドA3採集炭化物が $3090 \pm 70\text{BP}$ 、第3レベルのグリッドC3採取炭化物が $3160 \pm 70\text{BP}$ である。各種型式の石斧が出土している。第2発掘坑ではサーフィン系の球形甕棺葬から鉄器が共伴して出土している。

Dốc Chùa (ゾックチュア) : ドンナイ川中流域に位置した大型居住遺跡。各種青銅器、石製鋳型、石製鋳型の未成品、ガラスなどが出土している。また多くの墓葬が確認されている (Đào L.C.&Nguyễn D.T. 1993)。C14年代はFig.114参照。各種型式の石斧が出土している。

Phú Mỹ（フーミー）：ドンナイ川上流域に位置した大型居住遺跡。1998年に発掘され、薄い文化層ながらも、石製鋳型、青銅斧などが共伴している（Trịnh S. 2001）。

Long Bàu（ロンビュー）は、ドンナイ川（サイゴン川）の中流域右岸のBen Do遺跡近くに位置している。土器製作のためのアンヴィルや青銅や鉄のスラッグ状破片のものが出土している（Đặng V.T. et al. 1998）。

Cầu Sắt（カウサット）は、ドンナイ省のスアンロック県の丘陵地上に位置する大型居住遺跡において、1977年の調査で、南部先史編年最古段階に位置づけられていた（Hoang X.C.&Nguyễn K.S.1977）。

Suối Chồn（スオイチョン）：ドンナイ省のスアンロック県の丘陵地に位置した遺跡。1978、1979年に発掘が行われ、1m程度の文化層とサーフィン系の球形甕棺葬が出土している（Nguyễn M.L. et al. 1978, Vũ Q.H.1991c）。各種型式の石斧が出土しているし、石製鋳型も出土している。甕棺葬からは半貴石ビーズや鉄器も出土している。

Bưng Sinh（ブンシン：Phú Chánh:フーチャイン遺跡群）：Cai(カイ)川（Suối Cái）に沿って形成された居住兼墓葬遺跡で、3kmの広範囲にわたり、フーチャイン遺跡群と呼ばれる（Phạm D.H.1998, Bùi C.H.2004）。既に、4個の銅鼓が出土しているが、2000年のブンシン地点での発掘（Bùi C.H.2004）で明らかになったように、いずれも木製甕棺を下に置き、銅鼓を正置状態でかぶせた合わせ口甕棺葬スタイルの墓葬であったと考えられている。Phú Chánh II 号鼓出土の木甕から2100±150BPのC14年代が測定されている。

V Mekong（メコン）河本流域

Gò Cây Tùng（ゴークイトゥン）：メコン河本流以西で唯一調査された先史時代の遺跡である（Tống T.T.&Bùi M.T. 1994, 1997）。重層マウンド遺跡と考えられ、若干数の石斧、金属溶解のためのるつぼが発見されているが、先史時代土器のみならず、後のオケオ文化の土器も多く発見されており、その所属関係が明瞭でない。C14年代はFig.114参照。

VI ホーチミン市周辺海岸部

Gò Cá Sỏi（ゴーカーソイ）：Vũng Tàu(ブントウ)市北方、Thị Vải(ティヴァイ)川下流左岸域に位置する重層マウンド遺跡（Bùi C.H. 2000）。各種型式の石斧が出土している。

Rạch Núi（ザックヌイ）：ヴァムコードン川の河口近くの汽水域に位置する重層マウンド遺跡。1978年に調査され、5m以上の文化層が確認されている（Phạm Q.S. 1978）。1975年の調査で、採取された炭化物でC14年代（2400±100BP）が測定されているが、その採取コンテキストは全く不明である。各種型式の石斧が出土している。

Giồng Am(ゾンアム)：ホーチミン市カンゾー県のマングローブ林域に位置する遺跡。砲弾型の筒型土器や棒状土製品が多く出土した遺跡。時期的には先史時代ではなく、オケオ文化期と判断される。

Giồng Cá Vồ（ゾンカーヴォ）：ホーチミン市カンゾー県のマングローブ林域に位置するマウンド遺跡。居住や生産に伴う廃棄物の文化層といサーフィン系の球形甕棺葬が多く出土している。鉄器、青銅器、ガラス、軟玉などの利器、装飾品もい多く出土している（Đặng V.T. et al. 1998）。C14年代

はFig.114参照。

Giồng Phết(ゾンフェット)：ホーチミン市カンゾー県のマングローブ林域に位置するマウンド遺跡。居住や生産に伴う廃棄物の文化層といサーフィン系の球形甕棺葬が多く出土している。鉄器、ガラス、軟玉などの利器、装飾品もい多く出土している（Đặng V.T. et al. 1998）。C14年代はFig.114参照。

Cái Vạn (カイヴァン)：低湿地での杭上住居による居住域と陸地部での遺跡が複合した遺跡。各種型式の石斧とわずかであるが青銅器も確認されている（Vũ Q.H.1991b, Trần Q.V. et al.1997）。

ND11：杭上住居址と考えられる木杭などとともに遺物が収集されている低湿地居住遺跡。

Bưng Bạc (ブンバック)：**Bà Rịa(バージア)**市東郊外の低湿地居住遺跡。石製鋳型、青銅器などが多く出土し、石環の製作も多く確認されている。C14年代はFig.114参照。

Bưng Thom (ブントム)：ブンバック遺跡のさらに東に位置した低湿地居住遺跡。石製鋳型が多く出土している。

VII 鉄器・青銅器出土の遺跡

以上の遺跡で、青銅器や青銅器鋳造のための鋳型の出土が確認されているのが、カイヴァン、ゴーオーチュア、ゾックチュア、コーソントウ、フーミー、ブントム、ブンバック、ブンシン、ゾンカーヴォの各遺跡で、ロンビュー、ゴーカオスー、ゴーオーチュア、ゾンカーヴォ、ゾンフェット、ダカイで鉄器が確認されている。

以上の調査研究に基づいて、いくつかの編年試案、時代分期の枠組みも提出されているが、何よりも問題なのは、型式学的研究や遺物組成などに基づいて、それらを正面から論じたものが皆無に近いことである。

B 新石器時代編年

I アンソン遺跡の土器分類にあたって

1997年2月から3月に行った発掘で良好な層位的データを抽出することが可能となった（Nishimurea 2002a, Nishimura&Nguyễn K.D. 2002）。遺跡については第11章マウンド遺跡と土器製作に、述べてあるので参照して頂きたい。層位的発掘は、30以上の分層という結果に至ったが、層の性質から判断した層ユニットは3つである

第1層ユニット：L3-5層

第2層ユニット：L3-4層からL3-1層、HDD（黒色土坑）も含まれる。

第3層ユニット：L2-21b層からL2-3層

第4層ユニット：L2-2層からL1-1層まで

ただし、第4層ユニットは、後代の掘り返しによる攪乱がひどい層と考えられ、細分層は、便宜上の発掘深度以外、意味は何もない。第4層ユニットでオケオ文化期の土器や近代の陶磁器類が若干出土した他は、全て新石器時代の遺物と考えてよい。

本論では、1997年発掘の遺物群を紹介し、時期区分やそれに伴う問題を述べる。時期区分については先行研究（Nishimura 2002a）で論じたものと変化はなく、本論はさらに肉付けを行ったものとなっている。

土器は胎土により、大まかに二分してある。口縁資料全体数の80%を占めるのは砂を混和剤として含むもので、質感として相対的に硬質で、器表色も褐色系のものが多い。もう一つは植物などの有機質のものを胎土中に多く含み、相対的に質感が軟質で、やや多孔質である。以下、混砂硬質土器と呼ぶ。器面が土器である。混和剤として、粘土が多く入れられている場合が多い。器表色が全体として、やや黄褐色あるいはピンク色を帯びた白灰色系のものが多い。また、石灰（おそらく貝殻）が、混和剤として使われているものもある。以下、軟質土器と呼ぶ。

また、本論の分類対照としているものは、主に口縁や肩部の文様をもつ資料である。これは資料の大半が破片的で、全体器形を論じることができるものが極めて少ないからである。しかし、これは、通常のヴェトナムの土器研究にありがちな接合をせずに、分類をしているわけではない。常時、3人から4人で5ヶ月間接合を行った結果である。その割には口縁部と肩部以下が接合している例が少なくと思われるかもしれないが、その一つの理由は第11章で述べるように、土器片の再利用である。

分類の基準に当たってはそれぞれの形態的違いに主眼においているが、製作工程上の差、つまり装飾の有無などに規則的に差異が見られる場合は、それらも分類に反映させている。ただし、塗彩や磨きなどは非常に普遍的な製作工程であるため、一定の規則性が見られない場合においては、分類基準に反映させていない。

また、混砂硬質土器と軟質土器といった大別枠より細かい胎質の差異は、ある分類グループが、結果的に特定の胎質にまとまるという場合に、そのことを指摘してはいるが、分類の基準には反映しないよう努めた。

II 混砂硬質土器

以下、分類の記述は、最下層からの出現順に叙述してある。Table 4の分類出現頻度表を参考。

a 球形深鉢 (NC)

当器種は口縁が内湾し、比較的深い胴部を有すものをまとめてある。外面に縄蓆文が施されされていることが多い。

NC1A類は、器体中央から口縁にかけて、わずかにすぼまり、器高に対して器幅が大きい特徴をもつ（L3-5-25:Fig.61-1, L3-5-24+34+36:Fig.61-2）。外面は口縁直下あるいは、少し下がったところから、底部まで縄蓆文が施されている。口縁部外面のところから、内面全面にかけて磨かれている。また縄蓆文の上端に、複数の直線あるいは波状沈線を施すが、線が並行しておらず、後出するような複数の歯を持った工具（例：櫛歯状工具）で施したものでないことがわかる。L3-5層でのみ多く出土している。

NC1B類は、1A類と同様に、口縁近くまで縄蓆文が施されているが、沈線はないようだ（L3-5-41:Fig.61-3）。口縁部の無文部は磨きによる。器体の上半部は不明だが、1A類と3類の中間的な形に

なるのではないだろうか。L3-3層とL3-2層で出土。

NC2類は、口縁が、かなりきつくすぼまるが、口縁直下の部分がやや内湾している。L3-5-41+48+84 (Fig.61-4) の場合、内面が磨かれ、内外面両面に赤彩が施されている。肩部には並行沈線と波状沈線が縄蓆文状に施されている。L3-5層でのみ、若干数出土。

NC3類は、比較的真っ直ぐな口縁部が明瞭に内折しているもので、口縁部は無地である。L3-4-38 (Fig.61-5) の場合、胴部は球状で、比較的粗な縄蓆文が施されている。

NC4類は、器体中央から、口縁が真っ直ぐに内湾した小型品で、器体下半、あるいは底部には縄蓆文が施され、磨きにより外面無地部が作出されている。そして、外面は通常赤彩されている (L3-3-109: Fig.61-6) 。L3-4層とL3-3層のみで出土している。

NC5類は、口縁部が、器体中央より内湾するようにすぼまったもの。L1-2層で1点のみ確認されたが、胎質も均質でキメが細かく、より後代の土器の可能性が高い(L1-2-109:Fig.61-7) 。

b 球形広口壺 (BV)

頸部のくびれによる外反した口縁と球形に近い胴部を持つもの。土器の器種において最も多くを占めるものである。全体器形としては、胴部が弧を描くように丸いものと、胴部上位で内折して、明確に腹部と肩部に分かれるもの2種類に大別可能だが、口縁と胴部の接合例がさほど多くないため、口縁型式により、胴部形態を特定することは現時点では不可能である。

分類は口縁の先端形態を主たる根拠としている。明記しておかなければならないことは、数量的に、当器種の半分以上を占めるBV2A類とBV2B類は、L3-5層を除いて全層で出土している。形態的さらなる細分は決して不可能ではないし、時期的傾向も読みとることはある程度は可能ではあったが、明確な分類基準を設定できるほどの、分類根拠を見いだすには至らなかった。また、胴部と一体化した分類であれば、こうした結果にはならず、一定の時期単位でまとまる分類になることも明記しておきたい。このことは、純粋な口縁形態の属性では、時期差から生じる要因のみならず、他の要因(例: 工人やその集団のくせなど)を強く反映してしまう可能性が高いことを示している。

BV1A類は、口縁が同じ厚さで真っ直ぐに延びているもの。口縁断面で粘土紐の輪積み痕が確認できる (L3-5-18:Fig.61-8, L3-5-16:Fig.61-9) 。全てL3-5層での出土。

BV1C類は、口縁先端部、あるいは口縁中位が、若干膨らみを持つものである (L3-4-61:Fig.61-10) 。L3-4層とHDD (黒色土坑) からの出土。

BV1D類は、口縁中位から口縁先端部にかけて徐々に膨らんでいるもの (L3-3-50:Fig.61-11) 。HDD (黒色土坑) からの出土。

これら、1類は長頸広口壺のBV1B類とともに、砂粒や大粒のラテライト粒を含み、赤褐色を呈した同じ胎質のものである。焼成がややもろいため、粘土紐の輪積み痕が明瞭に確認できる場合が多い。また、赤彩と磨きを口縁の内外面に施している場合が多い。

BV3Aは、口縁外面に横方向の縄蓆文を施したもので、口縁上位部が、外側にやや膨らんでいるもの。口縁内面は丁寧に磨かれている場合が多い。頸部片L3-5-8 (Fig.64-2) から理解できるように、口縁外面の縄蓆文は口縁を成形後の無文面に、改めて施したものである。おそらく口縁折り曲げ時によ

るものであろう。L3-5層のみで出土。

BV2Aは、外反口縁で、特に形態的に特徴のない口縁をまとめてある。先端がわずかに外側に膨らんだものも含めてある。L3-4層より上のどの層位でも出土している。上述したように、先端部形態や口縁全体の湾曲の度合いなどで、細分することは可能だが、有意かつ明瞭な分類を行うには至らなかった。また、時期的な傾向もある程度は指摘できるが、それを明確な分類基準にするまでには至らなかった。例えば、以下のような傾向を指摘する事が可能である。

L2-21層以上では、口縁がやや内湾したもの（L2-17-143:Fig.62-1）や、口縁先端部の外側が若干膨らみ張り出したものが多い。またL2-2層以上の最上層部では、比較的真っ直ぐ延びた口縁で、先端が角張ったもの（L2-1-115:Fig.62-6）が多い。

BV2B類は、口縁先端部の内側が若干の膨らみをもつか、先端内側で明瞭な稜をなしているものである。当類も、L3-4層以上で、L2-10層とL2-5層を除いて、どの層位でも出土している。BV2A類同様にL2-21以上で、口縁全体が内湾する傾向がある（L2-14-74:Fig.62-9例）。また、L2-2層以上では角張って張り出しも強くなる傾向がある（L2-1-127:Fig.62-12例）。

BV2Cは、口縁形態はBV2Aと同じであるが、口縁内外面両面あるいは内面を丁寧に磨き、両面に赤彩を施しているものである（L3-4-67:Fig.62-13, L3-4-64:Fig.62-14）。赤彩は肩部の方にまで及んでいる。L3-4層からL3-1層で出土。

BV2Dは、口縁先端部が、上方あるいはやや内側に向かって内折するように突出したもの。L3-2-123（Fig.62-17）例は肩部や腹部上半と接合した稀少例で、胴部上半に、肩部と腹部を分ける内折部を作り、肩部は文様帯以外、縄蓆文の地文を磨り消している。肩部文様帯は、縄蓆文磨り残しのため少し盛り上がっており、×印のような交叉文を連続して刻文している。L3-1-118（Fig.62-18）例のように、肩部文様帯の磨り残しを幅広く設定し、肩部文様帯と腹部上部に波状沈線を刻み入れている。また口縁部全体に赤彩を施した例もあるが、L3-2-133（Fig.62-16）例のように、口縁先端と頸部外面に赤彩を施している例があり、先端内折部に製作者が意識的に行った作出であることが理解できる。当類はL3-4層からL3-1層にかけて、多く出土しており、L2-21b層に1例のみ確認できる。

BV2Eは、形態的にはBV2A類、あるいはBV2B類に近いが、先端が尖り出すように内面上端が稜をなすように、平坦な面が作出されている。そして、口縁内面は必ず赤彩と磨きが施されている（L3-3-150:Fig.62-19例）。口縁外面の調整はなでのみで、赤彩が内面に連続して施されていることもある。肩部には、必ず並行沈線を数条刻み入れている。L3-4層からL2-20層で出土。ただし、L2-21層とL2-20層例は形態的にやや異なる。

BV2Fは、口縁先端部が、二股に分かれるように、張り出し部が作出されているもの。L3-3-193（Fig.63-2）例が、唯一例である。外側の張り出し上端部に、赤彩が施されている。

BV8A1（L3-3-153:Fig.64-13, L3-2-137:Fig.64-14）は、口縁の外反度合いが強く、先端部のみが、さらに外湾している。口縁両面から肩部外面にかけて、磨きと赤彩が必ず施されている。L3-3層からL2-21層で出土。

BV2Hは、口縁先端部のみが、さらに外方向に張り出しているもの。L3-2層や黒色土坑からL2-21層で出土。L3-1-150（Fig.63-4）例は、肩部も接合した例で、肩部下位に磨り消し残した縄蓆文帯があり、

その上に2本単位の短い沈線文を施している。

BV3B(Fig.64-4~7) は、BV3A同様、口縁外面に縄蓆文を装飾的に施したものであるが、施文方向が縦方向に変化している。また、口縁端部が外側に張り出している。口縁外面上の縄蓆文は、口縁の整形時に磨り消されているところもある。L3-4層からL3-1層にかけて出土。

BV3C1(Fig.64-8) は、BV3B同様、口縁外面に縄蓆文を装飾的に施したもののだが、口縁先上位部が少し外湾し、さらに中位でも再び外湾し、断面が波打つような口縁形態となっている。当類は後述するBV5A類との形態的類似性を有している。

BV3C2は、BV3C1同様に口縁断面がやや波打ち、内側に稜をなすように盛り上がりがある（L3-3-119:Fig.64-9）。口縁先端外面は縄蓆文の磨り消しが観察される。L3-3層で唯一例。

BV3Dは、BV3Bにかなり似るが、BV3C同様、断面が波打つような形態で、口縁先端部が丸められるように外側に張り出している（L2-18-57:Fig.64-10）。L2-18層からL2-13層にかけて出土。

BV5A類は、口縁上位部内面が膨らみ、先端がやや細くなっている。頸部は緩やかに内折している。内面にはジグザグ線と列点文を組み合わせた幾何学文様を施している。L3-3-62（Fig.64-11）例は、口縁内面上部に弧状線と直線の組み合わせ沈線が施文され、口縁内面下端部は並行沈線間にジグザグ沈線を刻み、粗な列点文を充填している。内面と外面上端に赤彩が施されている。当類はL3-3層からL3-1層で出土。

BV6類は、厚みのある口縁上端部しか確認されていない（L3-4-71:Fig.64-21）。先端は外側がやや尖りだしている。L3-4層のみで確認。脚台類の下端部の可能性も否定できない。

BV7類は、口縁形態としてはBV2A類と変わるところがないが、口縁直下まで縄蓆文が施され、その上に帯状と円錐形状の貼り付け文が施されており、独立した分類とした（L3-2-113:Fig.64-20）。口縁内面と外面が赤彩されている。L3-3層で唯一の出土。

BV2I類は、やや内湾する口縁の先端外側に、点状の押圧あるいは刺突文を連続して施文したものである（L2-17-139:Fig.63-7,L2-9-14:Fig.63-8）。点文ではなく、複数の列点状になっている場合もある。多くは口縁内外面が赤彩されている。L3-1層からL2-9層にかけて出土。

BV2J類は、口縁全体が若干内湾し、先端部が内外両方に膨らんだものである。ほぼ全ての場合、内外両面が赤彩されている。L3-1-130（Fig.63-9）例は肩部に沈線区画の文様帯があり、円形鋸歯縁状工具でジグザグ状弧状列点文が施文されている。赤彩も肩部まで及んでいる。当類は、L3-1層からL2-18層にかけて出土。

BV5B類は、L2-13-65（Fig.64-12）例が唯一出土例である。口縁下半が外側に若干張り出すように内湾したもので、外反の度合い形となっている。内面上半には二重沈線による鋸歯文がめぐっている。内外両面が、磨きと赤彩が施されている。

BV1I類は口縁上位端部のみしか遺存していないが、厚めでやや角張った先端部で、下半部がすばまっていると推定される（L1-2-11:Fig.64-22）。L1-2層のみで出土。

BV2K類は、口縁内面上部に浅い凹み線を作出したもので、内面は磨きと赤彩が施されている（L2-17-135:Fig.63-11）。L2-17例で唯一出土。

BV2L類は、BV2B類と同じように口縁先端が内側に張り出したものであるが、その張り出しの度合

いが大きいものである（L2-7-38:Fig.63-12, L2-1-128:Fig.63-14例）。L2-10層で1例出土したのを皮切りにL2-6層より大量に出土しはじめ、L1-1層まで大量に出土。

BV2M類は、口縁先端の内外両側に張り出しているものである（L1-2-115:Fig.63-17例）。L2-1層からL1-1層で出土。L2-1層からL1-1層で出土。

BV2N類は、BV2H類同様、口縁先端部のみがさらに外反して横方向に張り出しているものだが、口縁が全体的に厚手で、断面もやや内湾している（L1-2-112:Fig.63-19例）。L2-2層からL1-1層で出土。

BV2O類は、口縁先端部内側の張り出し幅が広くなり、先端内面に明瞭な段差が生じている（L2-1-112:Fig.63-20, L1-2-125:Fig.63-22例）。また口縁断面、特に外面が波打つように表面調整されている。L2-1層からL1-1層で出土。

BV12類は、先端が若干細くなる厚手の外反口縁で、頸部内側に外折稜線がある（L1-2-110:Fig.65-1）。L1-2層で1例のみ出土。

c 短頸壺

BV1E類は、直立に近い短い口縁で、肩部に太い並行沈線が数条めぐらされている（L3-5-4:Fig.65-6）。L3-5層のみでの出土。

BV13類は、球形深鉢NC4類にかなり近い形態をしたものである。L3-3-111（Fig.65-13）例は、非常に短い、わずかに外反した口縁がついた真球に近い形をしている。底部には整形時の縄蓆文がが残っている。口縁は赤彩されている。L3-4層からL3-1層にかけて出土。

BV10A類は、短い口縁が直立しているが、下部が若干外側に張り出している（L3-1-108:Fig.65-7）。L2-20-49（Fig.65-8）例は、口縁内面から肩部にかけて磨かれ、口縁外面と内面上半が赤彩されている。L3-1層とL2-20層で出土。

BV10B類は、短い口縁が若干内側にすぼまるように肩からのびている。肩部と腹部は緩やかに曲折している。L2-17-159（Fig.65-10）例とL2-18b-100（Fig.65-9）例共に、口縁内面から肩部にかけて赤彩されている。肩部と腹部に接合痕が観察される。また前者の場合、叩き整形時の腹部にあて具痕が観察できる。L2-19層からL2-17層にかけて出土。

d 長頸壺

外反口縁と胴部の間に筒状の頸部があるもの。

BV2G類は、外反口縁部とわずかな頸部しか残存していない（L3-3-115:Fig.63-3）。外反口縁はやや内湾し、内面に中位に、並行沈線と格子状沈線による文様帯がある。L3-3層に1点のみ出土。

BV4A類は、口縁部が外折し、頸部が筒型で、さらに肩部がその下に接続するものである（L3-3-133:Fig.65-3）。L3-4層からL3-1層にかけて出土。

BV4B類は、口縁と頸部を若干残しているのみだが、その形態から長頸壺と判断した。L3-3-92（Fig.65-4）例は当類の唯一例である。口縁内面に2本の並行線に挟まれたジグザグ線の沈線文様が施されている。

BV4C類は、BV4A類に類似するが、口縁内面下部に稜線が入るように、若干膨らんでいる（L2-19-44:Fig.65-5）。L2-19層のみで若干出土。

BV9類は、やや外反気味に延びた背の高い口縁。L3-1からL2-14層で出土している。L2-14-60（Fig.66-11）例は、内外両面が磨かれ赤彩されている。当類は軟質土器の脚台付き桶形土器のような器形の可能性もある。

e 長頸広口壺

非常に背の高い口頸部をもつ、壺か釜である。残念ながら肩部以下との接合例がないため、全体器形を論じることの可能な資料が極めて少ない。口頸部には輪積み痕がしばしば観察される。また、内面あるいは外面が赤彩されていることが多いのもこの器種の特徴である。

BV1B類はL3-5層のみでの出土であるL2-14層で出土している（L3-5-21:Fig.65-12例）。口縁先端部が確認されなかったが、同様な胎土、焼成製作技法を示す1A類から想像して、単純で平坦な口縁端部であったと考えたい。外面頸部に横方向の磨きが入るが、それより上方は縦方向の磨きである。

BV8B類は、口縁先端が若干外折し、先端内面に稜線が走る（L2-14b-98:Fig.66-1）。外面は外折部直下より、縦方向の磨きが入ることが多い。当類はL3-1層からL2-14層にかけて出土している。

BV8A2類は、口縁先端部がわずかに外折し、内面を赤彩し磨いているもの（L2-20-47:Fig.64-15, L2-18b-3:Fig.64-16）。L3-1層からL2-15層出土している。

BV8C類は、外折部がやや膨らみを持つものである（L2-14b-100:Fig.66-2）。当類はL2-19層からL2-4層にかけて出土している。

BV8D類も既出のものとは、系統は異なるかもしれないが、長い口頸部を有しており、外折はしていないが、上半部がやや外湾している。当類はL2-14B層のみで出土している（L2-14b-99:Fig.66-3）。

BV8E類は、口縁先端部がやや膨らみ外折し、端部外縁に沈線をめぐらせている（L2-9-17:Fig.66-4）。当類はL2-13層とL2-9層で若干出土している。

BV8F類は、口縁先端部が内側に膨らんだもので、膨らみの幅が小さいものがBV8F1類（L2-14-68:Fig.64-17）、膨らみの幅の大きいものを8F2類（L1-2-88:Fig.64-18）としている。BV8F1類は、L2-14層のみで、BV8F2類はL2-7層からL1-1層で確認された。

BV8G類も、口縁部先端が外折する長頸壺（釜）と考えられる。形態的に8C類によく似ているが、当類は口縁先端部が内側に伸出し、しばしば外折部内面に沈線区画された文様帯が存在する。文様帯は横走る沈線の間に横圧弧状列点文や横圧沈線をジグザグ状に施すものが多い。先端部が、内側に若干の膨らむものを8G1類（L1-2-67:Fig.66-6, L1-2-68:Fig.66-5例）、膨らみがより明瞭なものをBV8G2類（L1-2-25:Fig.66-8）、内外両側に尖り出さすように膨らんだものを8G3類（L2-1-9:Fig.66-9）とした。BV8G類はL2-2層以上でしか確認されていない。

BV8H類は外折部に厚みの変化もなにもない、形態的に非常に単純なものである（L1-1-6:Fig.66-10）。L1-1層でのみ確認された。

f 浅鉢あるいは脚台付き浅鉢 (BD) :Fig.66-68

当器種は口縁が胴部と同じ程度の大きさか、あるいはさらに大きいもので、胴部は中心に向かって、弧を描くようにすばまるものである。脚台が付くものと付かないものがあるが、接合例が多くないのでまとめて分類した。胴部に縄蓆文が施されたものが多い。

BD1類は、口縁部が下部よりやや厚く、先端がわずかに内湾している。L3-5-82 (Fig.66-13) 例、L3-5-61 (Fig.66-16) 例とL3-5-64 (Fig.66-14) 例は、口縁外面下部に並行沈線が施されており、外面あるいは両面が赤彩されている。L3-5-62例 (Fig.66-15) は口縁内面に波状沈線が施され、両面が赤彩されている。

BD2A類は、外面先端部がわずかに凹んでいる (L3-5-80:Fig.66-18)。

BD3類は、真っ直ぐにのびた口縁である。L3-5-88 (Fig.66-17) 例の場合、一見脚台かと見間違いが、内面に複数の波状線を塗彩で描き、赤彩しているので、浅鉢類の口縁部と判断した。

BD2B類は、口縁先端部がわずかに外折しており、胴部は膨らんだ弧を描く (L3-3-91:Fig.66-20)。

BD4A類は、口縁が直立するか、少し外反する。口縁と胴部は曲折部により明瞭に分かれ、胴部は脚台部に向かって、ゆるい弧を描きながらすばまる。口縁上半部はわずかに膨らみ、口縁下半部は逆にすばまる。胴部接合例によれば、口縁との接合部を除いて、胴部は縄蓆文が施されている。

L3-3-95a (Fig.6-23) 例は口縁外面下半部に並行沈線と弧状列点文を組みあせた文様帯がある。L3-4層からL3-1層にかけて出土。

BD4B類は、口縁がわずかに内反し、ゆるやかな湾曲により、口縁から胴部へ移行している。

L3-2-199 (Fig.67-2) 例では、口縁から脚台上半部までを残している。無文部は丁寧に磨かれ、胴部は細かい縄蓆文が施されている。外面の湾曲部から内面全体と脚台部外面に赤彩が施されている。L3-4層とL3-2層で出土しているが、L3-4-53 (Fig.67-3) 例は、軟質土器に通じる器形をしており、分類として別にすべきものかもしれない。

BD4C1類は、口縁が外反し、鈍角的曲折部を通じて胴部に移行する。胴部は脚台部に向かって、ゆるい弧を描きながらすばまる。口縁上半部は外側に少し張り出し、上端部は平らな面が形成されている。口縁下半部は逆にすばまる。胴部接合例によれば、口縁との接合部を除いて、胴部は縄蓆文が施されている。L3-4-40 (Fig.67-4) 例の口縁上端部平面が赤彩されている。L3-4層からL3-3層にかけて出土。

BD4C2類は、BD4C1類に比べ口縁の外側へ尖り出すように、張り出しが大きくなったものである。L3-2-98 (Fig.67-5) 例は、口縁張り出し部の上面に櫛歯弧状列点文が施されている。内外面両面に赤彩がされている。L3-3層からL2-21b層にかけて出土。

BD4D類は、口縁先端が、わずかに外側へ膨らんだもの (L3-1-98:Fig.67-7)。口縁が若干外側へ張り出したもの。一見、BD4C1類やBD4C2類と誤認しやすいが、口縁断面が内湾せずに、やや外反している違いがある。L3-1層のみで出土。

BD4C3類は、やや厚めの器体で、口縁部が少し尖出しながら外反し口縁と胴部の境目に稜が形成されている (L2-19-42:Fig.67-6)。

BD5A類は、4類に比べより底の浅い器形をしている。口縁部内面先端が膨らんでいる。両面あるい

は内面を赤彩している。L3-3-103 (Fig.67-16) 例は、口縁部内面の稜が、明瞭になっているものであり、脚台接合部近くに縄蓆文を残している。L3-4層からL3-1層で出土。

BD5B類は、口縁部先端が内側に膨らみ、なおかつ外側にも張り出している。L3-1-113 (Fig.67-17) 例は、脚台部が確定できるもので、底部裏面に叩き整形時の縄蓆文を残している外面上半から内面にかけて赤彩されている。L3-1層とL2-21層で出土。

BD6A類は、先端が丸く、厚みに変化のない口縁が、比較的深めの胴部を形成するもの (L3-2-100:Fig.67-18) 。両面が赤彩されている。L3-4層で唯一出土。

BD6B類は、先端が丸く、厚みに変化のない口縁がやや内反し、比較的深めの胴部を形成するもの (L2-8-18:Fig.68-1例) 。赤彩されているものもある。L2-18層からL2-4層で出土。

BD7A類は、口縁部が厚みをもつもので、先端部が外側に細く張り出し、内側にはやや厚みをもって膨らんだもの。その結果、口縁上端面は平坦なとなっている。L3-2-114 (Fig.68-5) 例は、口縁上端面に列点文が施されている。L3-3層とL3-2層で出土。

BD7B類は、BD7A類に比べ、口縁部内側の膨らみが小さくなったもの (L3-1-54:Fig.68-6) 。L3-1層で出土。

BD8類は、L3-3-114 (Fig.67-15) 例が唯一の出土例である。口縁部は直立し、胴部は球状を呈す。地文は縄蓆文だが、施文後軽くなでられ、全体的に文様がわずかに磨り消されている。口縁部外面には8本の太い並行沈線を施し、それに直交するように、縦方向の短い並行沈線を施している。さらにその下に、ジグザグ状の沈線を施している。

BD4E類は、口縁部が直立し、外面の口縁先端直下が凹むよう、くびれが作出されている。胴部は弧を描くように丸まっている (L2-17-136:Fig.67-8) 。L2-17-133 (Fig.67-9) 例は脚台部の先端以外を接合できた唯一例である。無文部は磨かれているが、内面中心部には、磨きによる条痕が放射状に観察される。外面胴部下半は縄蓆文である。脚台はすらりと広がる形だが、先端部がどのようなものか確定できない。当類は、L2-19層からL2-11層で出土。

BD4F類は、厚めの口縁部が直立あるいは少し外反し、明瞭な内折部を経て胴部に移行するもの (L2-4-28:Fig.67-11) 。L2-7層とL1-2層で出土。

BD4G類は、口縁先端部がわずかにすぼまり、先端外面に凹みが形成されているもの (L2-1-92:Fig.67-12例) 。器体は口縁から胴部に向かって、急にすぼまる。L2-1層からL1-1層で出土。

BD4H類は、口縁部が直立し、その外面は波打つように凹みが作出されている (L1-2-102:Fig.67-14) 。L1-2層で出土。

BD9類は、口縁先端部が若干膨らみを持ったもので、胴部は、口縁部からさほどの湾曲もせずすぼまっている (L2-14-58:Fig.68-3) 。L2-21層からL2-14層にかけて出土。

BD10類は、先端部が内外両側に肥大したもので、胴部は口縁近くでわずかに内折するが、下部は真っ直ぐに延びている (L1-2-97:Fig.68-4) 。L1-2層のみで出土。

g 脚台 (CH) :Fig.68-69

浅鉢、桶、壺類に接合する脚台部を指す。しかし、上部との接合例あるいは確定例が非常に少ないため、脚台として一括分類した。基本的に浅鉢の接合部から接地部にかけて外側に向かって開いた形が多い。分類対象としたものは先端部が残っている資料のみである。

CH1類は、二等辺三角形状に大きく真っ直ぐに開いた形をしている。L3-5-69 (Fig.68-9) 例は、上位には、並行沈線による区画の中に、弧状列点文を充填し、下位には、水波状沈線と沈線の区画間に弧状列点文を充填している。外面は磨きの後、施文をし、赤彩しているが、内面は磨きのみである。L3-5層のみで出土。

CH2A類は、わずかに脚部の中位が内湾し、先端が若干外反するようになったものである。CH1類に比べ、傾斜度がより大きいのが特徴である。残りの良いL3-5-66 (Fig.68-12) 例では、上位部が内折してすばまっており、中位と下位に3本ずつの並行沈線が施文されている。内外両面が赤彩されている。L3-5-79 (Fig.68-11) 例、やや厚みのある脚台先端部で、水平方向と斜方向の並行沈線の組み合わせ文様があるが、上位部は不明である。L3-5-63 (Fig.68-13) 例は並行沈線間にジグザグ沈線を斜行させている。L3-5-81 (Fig.68-14) 例は並行沈線と波状沈線区画間に貝殻腹縁文を押文したもの。両例とも、L3-5-66 (Fig.68-12) 例のような上位部の形態ではなく、別器形の可能性もあるが、それ以上の推測は不可能であるため、分類としてまとめておいた。L3-5層のみで出土。

CH2B類は、器体の傾斜がかなり緩いもので並行沈線が下位に施されている (L3-3-117:Fig.68-15)。磨きと塗彩が施されている。L3-3層のみで出土。

CH3類は、器形が若干内反しつつ、すらりと伸び出したもので、並行沈線と波状沈線の文様帯がある (L3-5-68:Fig.68-16)。L3-5層のみで出土。

CH5類は、器体は浅鉢接合部から器位にかけて、弧を描くように内湾しつつ延びており、先端部手前で稜を形成するように内折し、先端部がわずかに外反したもの。外面が赤彩されていることが多い。内折部に単独刻文を施しているものもある。L3-4-48例 (Fig.69-3) は最も残りの良い例で、外面が赤彩され、内面は丁寧に磨かれている。L3-5層からL3-1層で出土。

CH6類は、器体が弧を描くように開き、先端部が若干反り返った後、再び接地部に向かって若干張り出している。中位と先端部に、並行沈線間に弧状列点文を充填した文様帯を配置している。先端部が赤彩されていることが多い。L3-3-77例 (Fig.68-17) の場合、中位に文様帯を二つ、先端部にさらに一つ配置している。沈線区画をした後、列点文を押文し、無地面を磨いて赤彩を先端部に施している。L3-4層からL3-1層で出土。

CH7A類は、CH6類同様、器形がきれいな弧を描くものだが、先端部はくびれが作出されている。L3-4-51例 (Fig.68-18) が唯一例で、外面を赤彩している。

CH7B類は、CH7A類同様、器形がきれいな弧を描くものだが、先端部は厚みを変えないまま外反する (L3-4-52:Fig.68-19)。L3-4-52例は外面を赤彩している。L3-4層とL3-3層で出土。

CH8類は、大型品で非常になだらかな裾広がりの器形をもつ。L3-3-122 (Fig.69-4) 例は先端外面が赤彩されている。L3-3層のみで出土。

CH9A類は、CH6類やCH7類同様、器形がきれいな弧を描くものだが、無文で、先端部が少し細くなり、わずかに外側に伸び出している (L2-15-66:Fig.68-21, L2-12-54:Fig.68-22)。当分類は、さらに

細分することも可能だが、小破片的資料が多く、敢えて行わなかった。L3-1層からL2-6層で出土。

CH9B類は、先端部を確定できていないが、胴部の形態や同様の文様を持つ他類から、先端部がCH9A類のようになると推測し、文様帯の有無をもとに独立した分類とした。L2-12-31 (Fig.68-23) 例は、上半部に二つの並行沈線区画間に弧状列点文を充填させている。粘土紐の積み跡が観察される。沈線区画を行った後に施文を行い、非施文部を磨き、外面を赤彩している。

CH10類は、比較的背の高い脚台で、胴部がなめらかに延び、先端部が外側に少し張り出している。二つの並行沈線区画間に弧状列点文を充填させている。外面は磨いている (L3-1-183:Fig.68-20) 。L3-1層で出土。

CH11類は、器高に対して器幅が大きい脚台で、先端部が外反している。CH11C類以外、並行沈線区画間に文様を充填しているのが共通する特徴だが、施文内容などにより細分をした。分類対照したものの中には、L1-2-79 (Fig.69-1) 例やL1-2-33 (Fig.69-2) 例のように、下部と上部の間にゆるい外折部があるものもあり、形態分類上独立させるべきだが、小破片が多く上部形態が不明のものが多いため、細分類は行わなかった。

CH11A類は、並行沈線区画間に斜行格子文様を施したもの。L2-7-33 (Fig.68-25) 例は先端部が外反すると同時に、内側が接地面に向かって張り出している。外面は赤彩か磨きが施されているが、風化が激しいため確定できない。当類は、L2-7層からL1-2層で出土している。

CH11B類は、並行沈線区画間に列点文を充填したものである。L1-2-23 (Fig.68-26) 例は、口縁部が少しくびれ、先端が外反している。二つの沈線区画間にジグザグ状に列点文を充填したものである。外面を赤彩している。また、並行沈線区画間にさらに沈線で細かく幾何学上に区画し、その中に列点文を充填している例もある。L2-7層からL1-1層で出土している。

CH11C類は、並行沈線区画を施さずに、並行する条線を縦方向に施したもの。L2-4-1 (Fig.68-27) が唯一例である。

CH11D類は、並行沈線区画間に、沈線でジグザグ状に施文をしたもの(L1-2-37:fig.68-28) 。L1-2層のみで出土。

CH12類は、CH8類のようになだらかに器体が伸び、先端がやや外反したもので、先端部の方が厚みを増している。L2-2-40 (Fig.69-5) 例は、外面が赤彩されている可能性あり。L2-2層からL1-2層で出土。

CH13類は、器高に対して器幅が大きいもので、相対的に背の低い脚台となっている (L2-1-95:Fig.69-7) 。これは浅鉢類の脚台ではなく壺類の脚台を想定する必要もあろう。L2-2層からL1-2層で出土。

CH14類は、L2-7-30 (Fig.68-24) 例が唯一例で、CH9B類同様、先端部を確定できていない。しかし、上半部下端に外折部分が残っており、麦わら帽子状の特徴的な形態をしていることが理解できることから独立した分類とした。並行沈線区画に弧状列点文を充填した文様帯が4つ配置されている。外面は赤彩されている。L2-7層で出土。

CH16類は、CH14類同様、先端部を確定できていないが、下半で外折しており、特徴的な形態をしていることが理解できることから独立した分類とした (L2-1-137:Fig.69-6) 。L2-1層からL1-2層で出

土。

CH15A類は、背の低い脚台で、やや外側に開いたもので、先端が基部に比べすぼまっているが、特に形態的特徴のないもの（HDD-33:Fig.69-9例）。L3-5層からL3-1層にかけて出土。

CH15B類は、斜め方向に真っ直ぐ延びたものだが、接地部に向かって徐々に厚みを増し、先端部は丸まっている。BD5B類に分類した浅鉢の口縁部例（L3-1-113:Fig.69-11）と同一個体と考えられる脚台部は、当類に相当する。L3-3層からL3-2層で出土。

CH15C類は、薄手の器体が直立に近い形で、真っ直ぐに延びたもの。L3-3-142例（Fig.69-12）が唯一例だが、補修孔が観察される。外面が赤彩されている。

CH15D類は、やや太めで背の低いもの。基部は厚いが、斜め方向に真っ直ぐ延び、先端がわずかに外に張り出している（L3-2-108:Fig.69-13）。L3-2層とHDDで出土。

CH15E類は、L3-2-110例（Fig.69-14）が唯一例だが、脚台下半部が外湾したものである。

CH15F類は、L3-1-182例（Fig.69-15）が唯一例で、CH15D類のように、やや太めで背の低いものだが、先端がすぼまり、外面に二点単位の連続押圧文が施されている。L3-1層で出土。

CH17類は、外側に開いた形態で、先端部が反り返るように外反しているのが特徴である（L2-1-102:Fig.69-8）。CH11類と形態的に非常に類似するが、全く同じ形態をしているわけではない。一部は赤彩されている。L2-1層からL1-1層で出土。

h 波状口縁鉢（ADB） :Fig.73

当遺跡に特徴的な器形の一つである。第11章で述べるが、他の同時期の遺跡では、さほど確認されていない器形である。鉢の口縁に波状の付帯口縁があり、縄（無節の縄が多い）を巻き付けた叩き板の縁を、付帯口縁に当てて、凹部を作出しているのが特徴である。内面はやや丁寧に磨かれている場合が多い。

この器形はL3-5層には存在せず、L3-4層から出現する。L3-4層からL3-1層にかけて、5類の細分型式（1-5類）が存在するが、共通する特徴は、縄蓆文が外面に施され、波状部間の凹部は、叩き板を押しつけのみで作出しているものが多い。ABD1類は、波状口縁が鉢の口縁から外反して伸び出しているものである（L3-3-300:Fig.73-1）。ABD2類は、波状口縁が鉢の口縁外縁部に新たに付け足され、口縁自身は上方に伸出しているものである（L3-1-302:Fig.73-2, L3-1-319:Fig.73-3）。ABD3類は鉢の口縁先端に、叩き具を当てて、口縁外縁に若干のたわみを作出している（L3-4-305:Fig.73-4）。ABD4類は、波状口縁部が鉢の口縁端より下に、作出されたものである（L3-4-311+313:Fig.73-5）。ABD1、2、4類共に波状口縁部が、たわみを持つように作出されているのが特徴で、この技法は後続の型式に継承されている。ABD5類は、口縁先端が尖出し、その上端に叩き具を軽く当てつけたもの（L3-1-304:Fig.73-6）。L2-21bではABD1類が1点確認されたのみであったが、L2-21から上層では、それまでのものとは全く異なった型式、ABD6類が出現する。つまり、外面は無紋か底部に縄蓆文が入るのみで、波状口縁も肥大化し、作出法も前出のタイプと異なったものである。ABD6類は、器形が深皿状に浅くなったもので、外面にしばしば、輪積み痕や内面を磨く際のあて具痕などをとどめている。波状口縁部は、外折した付帯口縁に縄蓆文の叩き板を押しつけ、付帯口縁をたわませたような波

状部を作出している（L2-18b-303:Fig.73-7, L2-18b-300:Fig.73-8, L2-15-93:Fig.73-9）。波状口縁の製作技法やその形態は、L3-1層で多出した2類から継承していると考えられる。ABD6類はL2-21層からL2-14層まで出土しているが、L2-18b層で多量に出土している。縄蓆文が底部にとどめているのは、ABD6類の下層部出土例のみで、ABD7類以降にはいっさい縄蓆文は見受けられない。ABD7類は、叩き具を上方から均等に押し当てて、等辺な3角形の波状口縁部を作出したものである（L2-14-300:Fig.73-10）。L2-18b層からL2-14層にかけて出土している。ABD8類から11層にかけては、波状口縁部の波状部が徐々に幅狭になっていくのが看過できる（ABD8類=L2-13-15-300:Fig.73-11, 9類=L2-14-301:Fig.73-12, 10類=L2-13-303:Fig.73-13, 11類=L2-13-301:Fig.73-14）。出土状況も層序が上になるにつれ、タイプが変化していくのが読みとれる。また、8類から10層にかけては波状口縁が付帯されているため、口縁部が二股になっているが、ABD11類は内側の口縁が突起帯に変化している。ABD12類（L2-9-300:Fig.73-15）とABD13類（TS2-60-80cm-1:Fig.73-16）は、縄蓆文の叩き具の押しつけではなく、別種の工具を押しつけて、いいわけ程度の波状部を作出している。器体も深めの鉢形に変化している。TS2-60-80cm-1例は、輪積み痕が明確に認識できる。ABD12類はL2-11層からL2-9層まで出土し、ABD13類はL2-9層からL2-7層まで出土しており、後者は、この器種の中での最上層出土例である。

i 脚付き桶形容器 (TH)

TH1類（L3-1-105:Fig.66-12）は、軟質土器の脚付き桶形容器と同様な口縁形態をしており、同じ器種ではないかと推定する。内面が赤彩されている。

j 壺類肩部文様 (HV) :Fig.70-72

器形の形態主眼にした分類で、編年整備のための時期差を認識することは十分だが、こうした土器に施される文様自体の変化について検証する。もちろん文様とそれが施された器形をまとめて論じるのが理想であるが、接合例が多くない状況下では文様自身の分類も行うべきと考え、胴部（肩部と腹部）に施文される場合が最も多い壺類の文様の出現頻度を追求した。

なお、遺物整理時の分析では、単純な縄蓆文地文の磨り消し残しなども分類対象としたが、本論では省略し、純粋に装飾文様として認識できるものに限った。分類記号に欠番があるのはそのためである。

HV1A類は、縄蓆文の地文上に並行沈線を入れ、その間にS字状の沈線文を入れたもの（L3-5-83:Fig.70-1, L3-5-86:Fig.70-2）。L3-5層とHDDのみで出土。

HV1B類は、縄蓆文地文の上端部に並行沈線を施したもの（L3-5-85:Fig.70-3, L3-5-91:Fig.70-4）。L3-5層のみで出土。

HV3A類は、横方向の連続列点を並行に複数条施したもの（L3-5-95:Fig.70-5）。L3-5層のみで出土。

HV3B類は、横方向に複数の太い並行沈線を施し、刺突文をその間に一部入れる（L3-5-14:Fig.70-6）。L3-5層のみで出土。

HV4A類は、縄蓆文の文様帯を磨り消しにより作出し、その上に刻線文を施すもの（L3-3-

175:Fig.70-7, L3-2-123:Fig.70-8)。L3-4層からL3-1層で出土。

HV4B類は、肩部から腹部にかけての縄蓆文地文の上に、並行沈線区画間に波状沈線を複数条、並行に施したもの。L3-4層でのみ出土。

HV4C類は、肩部無文部に、文様区画のための条線を引き、円形櫛歯状で弧状列点文をジグザグに施文したもの（L3-3-28:Fig.70-10, L2-18b-67:Fig.70-15, L1-2-53:Fig.71-4例）。L3-4層からL2-2層で出土。この円形櫛歯状工具は貝殻腹縁を、そのまま対象物に垂直あるいは垂直近くなるようにあてて、施文しているものもあるが、平ぶちの貝殻に櫛歯状の歯を作出して施文しているのもあるようだ。L3-4層からL2-2層にかけて出土。

HV4D類は、縄蓆文の磨り残しによる文様帯の上に、並行波状線文を入れたもの（L3-1-118:Fig.71-7例）。L3-3-55（Fig.71-6）のように、波状沈線と半円状沈線を組み合わせたものもある。L3-3層から、L2-21層にかけて出土。

HV4E類は、肩部無文部に円形櫛歯状工具をあてて、器面上で工具をずらして短い弧を描くように連続施文したもの（L3-4-44:Fig.71-9）。L3-4層でのみ出土。

HV4F類は、肩部無文部に並行沈線で区画し、そこに刃先の鋭い円形工具をロッキングさせながら、ジグザグ状の沈線文を施文しているもの（L2-21-101:Fig.71-10, L2-14b-61:Fig.71-11）。HDDやL3-2層からL2-11層で出土。

HV4G類は、肩部文様の有無は不明だが、折れ曲がった腹部の上端に、並行沈線区画に弧状列点文を充填している。L3-2-36（Fig.71-12）例が唯一例。

HV4H類は、肩部無文部に円形櫛歯状工具を対象物に斜行するようにあてて、軽くロッキングさせながら、少し横方向にずつずらして波状沈線文となるように施文しているもの（L2-20-12:Fig.71-13, L2-17-92:Fig.71-15例）。L3-1層からL2-11層で出土。

HV6A類は、磨り消し部との境目近くの縄蓆文地文上に、複数条の波状沈線を施すもの（L3-4-45:Fig.71-16例）。波状沈線が上下に均等になるように施文されているのが特徴である。並行沈線が波状沈線を挟むように施されているものもあり。縄蓆文の地文が肩部下部にまで至る場合は、そこより上は無地であろう。L3-5層からL2-4層で出土。

HV6B類は、肩部が無文になるように丁寧に磨いたもの(Fig.72-1)。

HV6C類は、HV6A類同様、磨り消し部との境目近くの縄蓆文地文上に、櫛歯状工具で波状線を短い単位の弧で施文したもの（L3-1-180:Fig.72-2, L2-12-32:Fig.72-3, L2-8-1:Fig.72-4, L2-21-58:Fig.72-5）。L3-3層からL2-8層で出土。

HV6D類は、施文具、施文の位置やその方法がHV6C類と同じだが、上下半分ずつの弧状文を、施文具でをコンパスのように半円の同心円文を施文していくのが特徴である（L2-17-86:Fig.72-6）。L2-17層で出土。

HV8類は、軽く磨り消した縄蓆文の地文の上に、並行沈線による波状線や曲線の組み合わせを行ったもの（L3-3-116a:Fig.72-7例）。L3-3層で出土。

HV9A類は、無地の肩部の上部に直線と弧線の沈線を組み合わせたものを施文したもの（L3-3-136:Fig.72-9, L3-3-139:Fig.72-10）。

HV9B類は、並行沈線文様を無地の器面に施したもの。L3-3-118 (Fig.72-12) 例が唯一例。

HV9C類は、並行線と斜行格子文などを組み合わせたもの (L3-1-46:Fig.72-11)。L3-1層で出土。
HV9B類とHV9C類は胎土が、浅鉢BD 8 類に近い。

HV10類は、肩部に格子文様を沈線で施したもの。胴部下半にも沈線による文様があるが、推定は不可能である。L3-3-22例 (Fig.72-13) が唯一例である。

HV11類は、縄蓆文の胴部に、貼りつけ文様を施したもの。波状と点状の浮文を組み合わせている。出土はL3-2-113例 (Fig.72-14) など、若干例のみである。

HV12A類は、無文部に粘土帯を貼りつけ、なでつけ後、爪などで押文を繰り返したもの (L3-1-177:Fig.72-15)。L3-1層、L2-19層、L2-14層で出土。

HV12B類は、肩部と腹部の境目に当たるところに、粘土帯を貼りつけ無地の突起を作ったもの (L2-18b-63:Fig.72-17、L2-18b-92:Fig.72-16)。L3-1層からL2-15層で出土。

HV12C類は、肩部の無文部に細い粘土帯を貼り付けたもの。1条と2条のものがある (L1-2-1:Fig.72-19、L1-2-2:Fig.72-18)。L2-1層とL1-2層で出土。

HV13類は、並行沈線と斜行で幾何学紋様を区画し、区画の一部を弧状列点文で充填したもの (L1-2-81:Fig.72-20例)。L2-2層からL1-1層で出土。

HV14類は、縄蓆文を帯状に磨り消し残して、その上に短い刻線を点状に連続施文したもの (L1-2-7:Fig.72-22、L1-2-17:Fig.72-24例)。L2-2層からL1-1層で出土。

HV15類は、格子状に沈線を斜行させたもの (L2-1-74:Fig.72-25)。L2-2層のみで出土。

HV16類は、HV13類同様、斜行沈線で区画をしているがその中をジグザグ状の沈線で埋めたもの (L2-1-29:Fig.72-27、L2-1-30:Fig.72-26)。L2-1層とL1-2層で出土。

Ⅲ 軟質土器

a 短頸広口壺型土器 :Fig.74,75

軟質土器の中で最も出土数の多い器種である。口縁部がさほど高くなく、口縁より幅広の胴部を持つものだが、全体器形が把握できるものはない。ただし、L3-3-201例 (Fig.74-4)、L2-18-205例 (Fig.74-21)、L2-18b-200例 (Fig.74-20) などから、口縁から肩部までが無文であるものと、口縁直下まで縄蓆文が施されている2種類のものがあることが理解できる。また無文部に近い縄蓆文の地文上に波状沈線を施しているものもある。肩部と胴部が、稜線で明確に分かれるものが多いようだが、9類 (Fig.75-8,9) などは、恐らく胴部と肩部の区別はつかないであろう。

肩部や胴部まで遺存している例には、しばしば裏面にあて具痕が観察できる。また、口縁下方部に縄蓆文の叩き具の端を当てた跡の消し残りが観察され、肩部の無文部に、磨り消した縄蓆文があることから、以下の製作工程を推定する。胴部から口縁まで器形全体をある程度か形づくった後に、縄蓆文の叩き板で肩部や胴部を中心に施文しつつ整形し、叩き板の端を利用し口縁部を外反させるように曲げる。そして、口縁から肩部あるいは頸部までの無文部を作るように、縄蓆文を磨り消しながら、整形の仕上げを行う。

1A類は、口縁全体がわずかに内反したものである。L3-4-111例（Fig.74-1）のように背の高いものもあれば、L3-2-211（Fig.74-2）例のように背の低いずんぐりしたものもある。L3-2-211例は裏面に成形時のあて具痕を明瞭に残している。当類はL3-4層からL3-1層にかけて出土している。

1B類は、胴部に対して、非常に短い口縁を有すものである（L3-1-236:Fig.74-3例）。当類はL3-3層とL3-1層で出土している。

2A類は口縁部全体が若干内湾し、先端部が外側に張り出したもの（L3-3-231:Fig.74-5例）。L3-4層からL3-2層にかけて出土している。

2B類は口縁全体が比較的真っ直ぐのび、先端部外側が若干張り出し、稜をなしている（L2-17-206:Fig.74-7例）。L2-17層とL2-1層でのみ出土している。

2C類は口縁先端部が外折するように、明瞭に張り出したものである（L2-4-210:Fig.74-9例）。L2-7層からL1-1層にかけて出土している。

2D類は口縁全体が外湾し、先端が外側に膨らみをもったもの（L2-1-221:Fig.74-12）。L2-1層とL1-2層で出土している。

2E類は、先端が内外両方に張り出したもの（L1-1-201:Fig.74-13）。L1-1層のみで出土している。

3A類は、口縁全体が内湾し、その先端が膨らみ稜をなしているもの（L3-3-249:Fig.74-14, L3-2-237:Fig.74-15例）。L3-4層からL3-1層で出土している。

3B類は、口縁の先端が内側に若干内反し、稜線をなしているもの（L2-17-215:Fig.74-17）。L2-19層からL1-1層まで出土している。

4類は、特に形態的特徴がない外反口縁で、口縁全体がの湾曲度が少なく、厚みの変化も乏しく、先端部の形態的特徴も乏しい（L2-20-211:Fig.74-18, L2-5-201:Fig.74-24, L2-18b-200:Fig.74-20, L2-14-209:Fig.74-23, L1-2-204:Fig.74-25例）。L2-21b層からL2-1層まで出土し、当器種のなかで最大数を占める。正直なところ、当類には形態的に細分すべきものが幾類か混じっているが、明確な基準で細分することができなかった。

5類は、肩部先端がわずかに盛り上がって、小さな口縁部を形成しているもの（L3-1-234:Fig.74-26, L3-1-233:Fig.74-27）。L3-3層とL3-1層でのみ出土している。

6類は、口縁全体が真っ直ぐのびたもので、先端が尖りだしているもの（L2-7-209:Fig.75-1例）。L2-11層からL1-2層にかけて出土している。

7類は、口縁先端部が内湾したものである。一見、浅鉢や台付き鉢の口縁と見間違ふものであるが、頸部近くまで遺存している資料（L2-1-209:Fig.75-4）から、口縁が漏斗状の形をしていたことが分かる。L2-4層からL1-1層にかけて出土している。

8類は、口縁先端部の内側が膨らみ稜を作っているものである（L2-1-212:Fig.75-5, L2-1-213:Fig.75-6）。L2-1層とL1-2層で出土している。

9類は、口縁部が頸部よりさらにすばまるように、作られているものである（L2-2-212:Fig.75-7, L1-2-202:Fig.75-8）。口縁端部が尖り出すものと、平たく面取りされているもの両方がある。L2-2層からL1-1層にかけて出土している。

b 球形深鉢 (NC) :Fig.77

当器種は口縁がわずかに内湾し、比較的深い胴部を有すものをまとめてある。

1類に関しては、深鉢であることに間違いはないが、2類と3類は胴部が確定できず、推測にとどまっている。

NC1類はL3-3-227 (Fig.77-1) 例のように、胴部上半が内側にすぼまった球形に近い形をしている。地文は縄蓆文で、口縁部はなで消されている。L3-4層からL3-1層にかけ大量に出土し、L2-21b層とL2-21層でもわずかに出土している。

NC2類も口縁部がすぼまるように内湾しているが、下半部の形態や縄蓆文の有無が不明である。L2-7-200 (Fig.77-2) 例のように口縁部が明瞭に内折しているものもある。口縁先端の形態や内折の度合いなどで細分も可能だが、例数が少ないので、敢えて細分は行わない。

NC3類は、NC2類と類似した口縁だが、先端部断面に違いが生じている (L2-2-28:Fig.77-3)。

c 脚付き桶形容器 (TH) :Fig.76

TH1類は、上端から下端までの接合は不可能であったが、胎土や器面調整の観察から、同一器種と判断できる。胴部真ん中から口縁先端にかけてなだらかに広がり、口縁先端は若干膨らんでいる。脚部はやや裾広がりの短いものである (Fig.76-24)。L2-17層のみで出土している。

d 鉢あるいは脚台付き鉢 (BD) :Fig.75,76

この器種は、底部から口縁にかけてすぼまることなく開いた容器をまとめてある。脚が付いているものといないものがあるが、胴部下半までの接合例がないと判断は難しく、両者をまとめた分類にしてある。

BD1類は、先端部が内側に向かつて、丸まるように膨らんでいるもの。L3-2-217 (Fig.75-11) 例のように器形全体が丸みをもつものと、L3-3-234 (Fig.75-9) のように比較的真っ直ぐ延びるもの両方がある。器面の磨きやなでは横方向である。L2-18b-206例 (Fig.75-10) は、口縁部直下から下方に縄蓆文が施されているが、当類中、唯一の縄蓆文施文例である。L2-21層以上での出土例は器形が全体により深めのものになっている。

BD2A類は、稜線をなすように、口縁先端部の内側が膨らんでいるもの。L3-4層からL3-1層にかけて出土している (L3-4-217:Fig.75-13例)。L3-3-252例 (Fig.75-12) は口縁先端ぶ外周に、波状口縁鉢と同じように、縄蓆文叩き板の端による押圧文が施され、器体中半から下方にかけて、縄蓆文が施されている。底部には、脚台の接合痕が残されている。

BD2B類は、口縁から胴部下半にかけて、丸くなだらかな器体をなす浅鉢である。口縁部の方が、胴部より器壁が薄めだが、それ以外はほとんど何の形態的特徴もない。L3-1層とL3-2層のみで出土している。L3-2-218 (Fig.75-14) 例は、若干の膨らみが先端にあるのみである。

BD2C類は、口縁部がやや膨らみ、直立に近い形をしたものである (L3-2-245:Fig.75-15)。L3-2層

とL3-1層で出土。

BD2D類は、口縁が比較的細く、基部が厚いもので、きれいな弧を描くような深鉢に近い器形と考えられる。下部は縄蓆文が施されている。L3-1-228例 (Fig.75-16) が唯一例である。

BD3類は、比較的薄い器壁で口縁先端部のみ内折し、内側に稜線が形成されている。L3-4層とL3-3層のみで、若干例確認されている。L3-4-116例 (Fig.75-17) は器体が他の鉢類より深めである。外面は横方向になでられ、内面は縦方向に磨きが施されている。口縁は赤彩されている。L3-3-240例 (Fig.75-18) は、口縁部がより明瞭に内折し、口縁外面に櫛歯状工具によるジグザグ弧状列点文が施されている。

BD4類は、胴部が丸みをもった浅鉢状で、口縁部がやや内湾するように上方に突出している。胴部には縄蓆文が施されている。L3-2-210例 (Fig.75-21) は、全体器形が唯一把握できる脚台付き鉢だが、脚部は裾広がり、下端部が外側にやや膨らんでいる。L3-3層からL3-1層にかけて出土している。

BD5類は、口縁部と胴部の間に明瞭な稜線が走るように、口縁中央部が外側に張り出している。L2-18b-208例 (Fig.76-1) は、胴部に明瞭な横方向の磨きを残し、器形から推測すると、脚台付きの無文浅鉢である。L2-21層からL2-16層まで出土している。

BD6類は、器形がなだらかに広がり、口縁先端部が内側にややすぼまるように大きく膨らみだしたもの (L2-21-206:Fig.76-2、L2-18b-209:Fig.76-4例)。断面や剥落した例からわかるが、この膨らみ部分は明らかに貼りつけによるものである。当類の大半は器体の下半部に縄蓆文が施されていたようだ。L2-21層からL2-7層までかなり多量に出土し、1例がL1-2層からも出土。

BD7類は、器体全体が比較的真っ直ぐ延び、口縁先端部が内側に張り出した小型品。L2-7-220例 (Fig.76-5) は下端部に縄蓆文をわずかに残し、脚台CH1類に分類されるL2-7-201例 (Fig.76-5) と同一個体の可能性が高い。L2-7層のみで確認。

BD8類は、器体全体が半球形で、口縁先端部が内側に若干膨らんでいる小型品 (L1-2-215:Fig.76-7)。L2-7層からL1-2層で出土。

BD9類は、器形がなだらかに広がるもので、口縁先端内側がわずかに張り出すもの (L2-1-231:Fig.76-6)。L2-1層とL1-2層で出土。

BD10類は、器形がなだらかに広がり、口縁部のみ上方に内湾するように作出されているもの (L2-4-204:Fig.76-8)。L2-4層のみで出土。

e 脚台 (CH):Fig.76

鉢類の下部に付けられた圈足類である。型式によっては細分も可能だが、全体数がさほど多くなく、鉢類の口縁ほど形態差を論じるに足る属性が少ないこと、また脚台の性質による形態的規制が大きいことから、細かな細分はあまり行わなかった。

CH1類は、基部から先端部にかけてやや内反するように緩い弧を描いてひろがる。先端部の方が基部より薄くなるのが一般 (Fig.76-10~14)。L3-4層からL1-2層にかけて、比較的まんべんなく出土。

CH2類は、器幅に対して器高が低いもので、先端部が基部に比べ細くなっているもの (L2-20-

208:Fig.76-15、L1-2-210:Fig.76-17例）。L2-20層、L2-17層、L2-2からL1-2層で間歇的に出土。

L2-17-208例（Fig.76-18）は、脚付き桶形容器（TH1）の脚台部である。

CH3類は、器幅に対して器高が低いものだが、厚みがあり全体がやや外湾している（L2-20-201:Fig.76-19）。また先端部外面に凹みがある。L2-20層のみで出土。

CH4類は、下端部が、内側に鋭く張り出したものである。ただし、口縁の可能性も否定できない。L2-13-200（Fig.76-20）例は、全体の器形が、円形ではなく、楕円形と考えられる。L2-13層とL2-12層でのみ確認される。

CH5類は、分厚く径の小さい外広りの脚台である（L2-12-200:Fig.76-21）。

CH6類は、先端部が反り上がるように尖出したもので、胴部はなめらかな弧を描いている（L2-1-222:Fig.76-23、L2-2-211:Fig.76-22）。L2-2層とL1-2層で出土。

IV ストープ :Fig.77

土器（煮沸具）を置き火をくべるための、3足の支脚つき浅鉢状の土器。現在の南部ヴェトナムの民俗呼称ではカラン（karang）と呼ばれている。L3-5層から既に出土している（L3-5-50:Fig.77-4）。L3-5層からL2-18b層にかけて、混砂硬質土器のタイプが出土している（L3-2-183:Fig.77-9、L3-2-186:Fig.77-10、L3-2-33:Fig.77-11）。脚部は、断面がドーナツ形で、器壁が比較的薄いタイプである。一部には器表に縄蓆文もある。

軟質土器のタイプはL3-4層から出現し、L1-1層まで連続して出土している。混砂硬質土器に比べ、中空部が小さいのが特徴である。L3-1-218（Fig.77-20）とL2-21-212（Fig.77-19）は共に、浅鉢部と脚部が接合した例だが、口縁が上方に湾出し、脚の横断面はドーナツ形である。ところが、L2-18層（L2-18-206:Fig.77-13、L2-18-210:Fig.77-12）になると、脚部は横断面が楕円形に変化する。そして、L2-14-214:Fig.77-14）は、横断面がさらに扁平になり、そり出すようになっている。さらにL2-1-202例（Fig.77-15）は断面楕円形だが中空部が大きくなっている。浅鉢部の口縁形態も、湾出部が層ごとに変化している。

V 分類と統計からの認識

a アンソン編年の確立

層単位での器形や文様の出現変化を明確に読みとっていくことができる。

これは各細分類が一定の層範囲でしか出土しないことが、立証づけている。ただし、一部の分類、混砂硬質土器のBV2A類、BV2B類、軟質土器のBV3B類、BV4類などの口縁形態、HV6A類、HV4C類などの文様は時期差を示す基準にならないことが統計より理解できるが、これらをして、時間軸の変化に鈍感な東南アジア考古学者が短絡的に結論しやすい、器形やスタイルといったものは長期間変化しないものがあるという結論を持ち出す必要はない。例えば、口縁形態のみでは、分期が難しい

V2A類、BV2B類だが、これらの口縁を持つ土器の器形全体を見るなら、時期差は十分に読みとれるものとなる。HV4類の文様だが、文様の有無のみで取り上げれば、時期指標とはならないが、文様充填の密度、施文工具の歯の密度、施文の位置などを基準にすればさらに分期が可能となる。また、そ

の文様を有す土器の器形自体は、時期ごとに明確な変化をしている。このことは口縁形態の場合にも当てはまることである。

具体的に、それぞれの分類の出現頻度から幾つかの面期があることが理解できる。

第1の面期がL3-5層からL3-4層にかけてである。これは軟質土器の出現、波状口縁鉢の出現、脚台の施文において水波状線区画が消滅し、単純な並行沈線文になること、球形広口壺の肩部に独立した文様帯が成立することなどで代表される。従って、L3-5層を当遺跡の第1期（AS I）として区切る。

次はL3-1層とL2-21b層である。これは、波状口縁鉢の浅鉢化、さらにはその縄蓆文の消滅、球形広口壺の肩部から腹部への器形変化（carinationに近い）がきつくなるものが出現することなどで代表させられよう。従って、L3-4層からL3-1層までを第2期（AS II）とする。

その次がこれL2-8層とL2-7層に求めうる。これは波状口縁鉢の消滅、充填文様を施文された脚台が幅広化すること、口縁内面に文様帯をもつ漏斗状の長頸口縁の出現、球形広口壺の肩部の文様に幾何学文状の文様区画が出現することなどで代表される。従って、L2-21b層からL2-8層までを第3期（AS III）、L2-7層から最上層（L1-1層）までを第4期（AS IV）と区切ることが可能となる（Nishimura 2002a）。こうした変化を代表的な器種でFig.78のようにまとめることが可能になる。

この分期は石斧の形態変化からも、裏付けられるものである（Fig.90 : Nishimura 2002a）。また、堆積文化層の性質変化も、AS I - III期間の区切りについては対応している。AS III、IV期の区切りについては、L2層の上層部以上において後世の活動による文化層破壊がひどいところが多く、層堆積の性質変化があったかどうかは確認できなかった。

土器の変化に関して、全体を通じて明言できるのは、各時期間での変化は明瞭であるが、全く異質な要素が加わって、新しい型式が出現している例は非常に少ないと思われる。全体を通して、同じような器種構成、文様モチーフが継続されているといってよく、アンソン土器伝統ともいえるべきものが存在する。これは12章で述べるように、当遺跡が土器の製作遺跡であることが、最も大きい理由ではないだろうか。

Table. 4-1 硬質混砂土器

	BV 1A	BV 1B	BV 1C	BV 1D	BV 1E	BV 2A	BV 2B	BV 2C	BV 2D	BV 2E	BV 2F	BV 2G	BV 2H	BV 3A	BV 3B1	BV 3B2	BV 4A	BV 4B	BV 4C	BV 5A	BV 6	BV 7	BV 8A	BV 2I	BV 2J	BV 3C	BV 9	BV 8B	BV 0A
L1-1						21	24																						
L1-2						83	491																						
L2-1						142	900																						
L2-2						25	52																						
L2-4						20	5																						
L2-5						1																							
L2-6						6	5																						
L2-7						34	3																						
L2-8						12	1																						
L2-9						9	1																	1					
L2-10						16																							
L2-11						14	10																						
L2-12						50	19																	4					
L2-13						58	12																	1					
L2-14						104	57																	1			4		
L2-14b						83	25																	2				5	
L2-15						83	29																	8				8	
L2-16						79	12																	3					
L2-17						137	37																	13				6	
L2-18						97	22																	4	4			4	
L2-18b						42	18																2	4	16				
L2-19						69	38												2					11	13	1		2	
L2-20						57	26																	2	24				4
L2-21						149	58			20			2											10	56			12	
L2-21b						9	21		1	1																13		3	
L3-1						183	150	28	35	16			6		23		4			2				5	41	3		7	1
L3-2						125	101	22	19	8			4		18		2			1		1	2						
HDD			1	1		17	2	3					1		1														
L3-3						145	9	39	20	27	1	1			19	1	10	1		10			16						
L3-4			4			34	20	7	6						1		2				1								
L3-5	91	2	2		1									15															
合計	91	2	7	1	1	1904	2148	99	81	72	1	1	13	15	62	1	18	1	2	13	1	1	20	69	154	17	4	47	5

Table 4-2 硬質混砂土器

	BV1 OB	BV 8C	BV 3D	BV 2K	BV 8D	BV 8E	BV 5B	BV 2L	BV 2M	BV 2N	BV 2O	BV8 F1	BV8 F2	BV8 G1	BV8 G2	BV8 G3	BV 8H	BV 11	BV 12	BV 13	NC 1A	NC 1B	NC 2	NC 3	NC 4	NC 5	AB D1	AB D2	AB D3	
L1-1								142	31	29	75		1				1													
L1-2								827	32	10	120		9	3	7			3	1							1				
L2-1								204	97	14	32		9	13	4	2														
L2-2								95	1				1	1	1															
L2-4		1						56					3																	
L2-5		1																												
L2-6								19																						
L2-7		3						34					1																	
L2-8								5																						
L2-9		4				1																								
L2-10		6						1																						
L2-11		1																												
L2-12		1																												
L2-13		1	1			1	2																							
L2-14		4											1																	
L2-14b		3			6																									
L2-15		2	1																											
L2-16			2																											
L2-17	12	3		2																										
L2-18	1	4	1																											
L2-18b	5	18																												
L2-19	1	26																												
L2-20																														
L2-21																														
L2-21b																											1			
L3-1																			1								185	104	4	
L3-2																					2						261	51	7	
HDD																							1				41	6	1	
L3-3																			6		1		1	4			669	96	19	
L3-4																			15				5	5			129	9	9	
L3-5																					23		2							
合計	19	78	5	2	6	2	2	1383	161	53	227	1	24	17	12	2	1	3	1	22	23	3	2	7	9	1	1286	266	40	

Table. 4-3 硬質混砂土器

	AB D4	AB D5	AB D6	AB D7	AB D8	AB D9	ABD 10	ABD 11	ABD 12	ABD 13	BD 1	BD 2	BD 3	BD 4A	BD 4B	BD4 C1	BD4 C2	BD4 C3	BD 4D	BD 5A	BD 5B	BD 6A	BD 6B	BD 7B	BD 7A	BD 8	BD 4E	BD 4F	BD 4G	BD 4H
L1-1																													16	
L1-2																												4	26	5
L2-1																											1	2	36	
L2-2																												1		
L2-4																						1						2		
L2-5																														
L2-6																														
L2-7										6												2						2		
L2-8										8												2								
L2-9										3	8																			
L2-10									2	7																				
L2-11									5	5																				
L2-12					7		7	6																			2			
L2-13					13		11	3																						
L2-14			3	18	4	2																						3		
L2-14b			13	5																										
L2-15			34	4																								6		
L2-16			11																									3		
L2-17			24	1																								14		
L2-18			18	1																		1						4		
L2-18b			107	7																										
L2-19			26														1											2		
L2-20			5																											
L2-21			12											16								2								
L2-21b																	1													
L3-1		3												44		1		4	1	4				3						
L3-2														21	7	19			10					1						
HDD														3					2											
L3-3		11												44		5	15		14					2	6					
L3-4	4													13	1	5			1		1									
L3-5											5	3	1																	
合計	4	14	253	36	24	2	18	16	15	22	5	3	1	141	8	10	36	1	4	28	6	1	6	3	3	6	35	11	78	5

Table. 4-4 硬質混砂土器

	BD 9	BD 10	CH 1	CH 2A	CH 2B	CH 3	CH 4	CH 5	CH 6	CH 7A	CH 7B	CH 8	CH 9A	CH 10A	CH 11A	CH 11B	CH 11C	CH 11D	CH 11E	CH 11F	CH 9B	CH 14	CH 1A	CH 1B	CH 1C	CH 1D	CH 12	CH 13	CH 16	CH 17
L1-1														1										17						2
L1-2		1																					24	41			10	20	1	5
L2-1																							25	38			8	5	1	4
L2-2																							2	2			9	8		
L2-4																								2	1	2				
L2-5																														
L2-6													2												1					
L2-7													4									7	1	2						
L2-8																														
L2-9																														
L2-10													1									1								
L2-11													3																	
L2-12													4									2								
L2-13													1																	
L2-14	1												1																	
L2-14b													8																	
L2-15													1																	
L2-16	1												5																	
L2-17													6																	
L2-18													1																	
L2-18b													6																	
L2-19													5																	
L2-20																														
L2-21	1												4																	
L2-21b																														
L3-1								57	9				9	1						1										
L3-2								48	7						3	1		7												
HDD								15							3	16		5	1											
L3-3				1				50	25		1	5			1	7	1													
L3-4							23	5	6	1	1				1															
L3-5			34	9		1	1								1															
合計	3	1	34	9	1	1	24	175	47	1	2	5	61	1	10	24	1	12	1	1	3	7	52	103	1	2	27	33	2	11

Table. 4-5 硬質混砂土器

	TH 1	Care ng	GKXD 1
L1-1			
L1-2			
L2-1			
L2-2			
L2-4			
L2-5			
L2-6			
L2-7			
L2-8			
L2-9			
L2-10			
L2-11			
L2-12			
L2-13			
L2-14			
L2-14b			
L2-15			
L2-16			
L2-17			
L2-18			
L2-18b		4	
L2-19		1	
L2-20			
L2-21			
L2-21b			
L3-1	2	1	
L3-2		13	
HDD			
L3-3		1	3
L3-4			
L3-5		1	
合計	2	21	3

Table. 4-6 硬質混砂土器

	BV 1A	BV 1B	BV 2A	BV 2B	BV 2C	BV 2D	BV 2E	BV 3A	BV 3B	BV 4	BV 5	BV 6	BV 7	BV 8	BV 9	NC 1	NC 2	NC 3	BD 1	BD 2A	BD 2B	BD 2C	BD 2D	BD 3	BD 4	BD 5	BD 6	BD 7	BD 8	BD 9	BD 10	CH 1
L1-1	4		2		1		1		3	8			2		3																	
L1-2	21		26		23	3			17	37		2	1	2	2				1							1		4	2	2		4
L2-1	44		31	1	27	3			28	46			4	2	1			1										3		1		4
L2-2	6		6		6				1	16			3		1			1										1				25
L2-4	29		3		3				3	32		6	3						3											1		1
L2-5	13									16																						1
L2-6	13									17		5							1													
L2-7	45		1		1				1	48		18					6									4	7	1				2
L2-8	22									25		9														3						2
L2-9	16									16		12														4						
L2-10	12									13		11					21															
L2-11	10									11		18														5						
L2-12	4									7																						1
L2-13	5								2	6							1		1							8						
L2-14	15								3	25							2									25						
L2-14b	5									15																10						
L2-15	5									10							1		1							11						2
L2-16	9									12															3	4						
L2-17	7			4						9									7							1						
L2-18	9									16																4						
L2-18b	9									20									12							1	7					4
L2-19	18								1	25									8							6						5
L2-20	12									15									6							11						3
L2-21	13									19							4		18							4	6					
L2-21b	1									1							2		1													
L3-1	41	2						6		1	3						75		29	3	3	1	1		10							5
L3-2	22		6					10									114		30	7	3	2			14							27
HDD	8		1					2									15															
L3-3	42	24	7					13			1						62		36	8				1	6							8
L3-4	12		2					7									20		5	1				2								8
L3-5																																
合計	472	26	85	5	61	6	1	38	59	466	4	81	13	4	7	292	31	2	159	19	6	3	1	3	30	9	109	7	9	2	4	102

Table. 4-7 硬質混砂土器

	CH 2	CH 3	CH 4	CH 5	TH	KR 口縁	CR 体部
L1-1						1	3
L1-2	1			4		1	2
L2-1	7			7		6	8
L2-2	5			2			2
L2-4							
L2-5							
L2-6							
L2-7							2
L2-8							1
L2-9							
L2-10							
L2-11						4	
L2-12			1				1
L2-13			4			2	1
L2-14						6	1
L2-14b						8	
L2-15							
L2-16							
L2-17	14				7	1	
L2-18							3
L2-18b						3	1
L2-19						6	
L2-20	1	2				7	
L2-21						7	1
L2-21b							
L3-1						11	2
L3-2						4	2
HDD							
L3-3						11	
L3-4						5	
L3-5							
合計	28	2	5	13	7	83	30

Table.5 アンソン遺跡放射性炭素測定年代						
	層位	時期	測定物	測定年代	較正年代	Labo. no.
1	L.3-5	1	炭化物	3990±190BP	4187-4736CalBP	TKa-11541
2	L.3-5	1	炭化物	3840±40BP	4185-4354CalBP	TKa-11526
3	L.3-5	1	炭化物	3780±120BP	3999-4348CalBP	TKa-11817
4	L.3-5	1	炭化物	3690±80BP	3929-4145CalBP	TKa-11816
5	L3-4	2	炭化物	3820±70BP	4119-4351CalBP	ANU-10880
6	L3-3	2	炭化物	3310±110BP	3440-3686CalBP	TKa-11823
7	L3-2	2	炭化物	3310±90BP	3457-3660CalBP	TKa-11824
8	L3-1	2	炭化物	3390±80BP	3537-3760CalBP	TKa-11822
9	L2-21B	3	炭化物	3320±130BP	3431-3731CalBP	TKa-11821
10	L2-17	3	炭化物	3370±80BP	3515-3720CalBP	ANU-10881
11	L2-17	3	炭化物	3310±90BP	3457-3660CalBP	TKa-11820
12	L2-14	3	炭化物	3200±90BP	3340-3541CalBP	TKa-11822
13	L2-12	3	炭化物	3190±110BP	3284-3549CalBP	TKa-11819
較正年代はCALPAL2005 SFCPに基づく。						

b C14測定年代値との比較

L3-5層からL2-12層にかけてC14年代が13点測定されており、3990±190BPから3190±110BPmまで、層位に応じて、かなり整序よく年代値が出ている（Nishimura&Nguyễn K.D. 2002）。

測定値をそのまま、実年代値と仮に解釈した場合、例えばAS I 期文化層は300年、第2期文化層は500年、L3-4層を含めなければ100年、第3期の文化層の3分の2は200年程度の期間で形成されたことになり、第3期文化層がそれ以前の文化層に比べ、かなり短期間に厚い層が形成されたことが理解できる。第3期文化層は、各分層単位で型式変化も徐々に起きていることが確認できることから、C14年代値による形成期間推定は、ある程度確実性があると思われる。

しかし、第2期はANU10880測定年代（3820±70BP）が、第1期の年代範囲に納まってしまい、他の年代値とややかけ離れている。他にL3-4層での測定値がないので、比較はできないが、L3-3層からL3-1層にかけてのTKa年代値と比べ、かけ離れているようにみえる。このことを説明するには以下の2つの可能性を挙げることができる。

一つはANU10880年代値に、何らかの測定誤差が含まれていること。二つ目は採取資料採取時の問題で、発掘時の層位認識ミス（L3-5層のものをL3-4層と認識して取り上げたなど）、あるいは、L3-5層の炭化材が何らかの理由でL3-4層に浮いてしまった可能性などである。しかし、二つ目の可能性に関しては、L3-5層とL3-4層は厚い無遺物に近い砂質土の盛り土による間層が確認されており（Nishimura&Nguyễn K.D. 2002）、その可能性は極めて低い。筆者は測定側の何らかの問題が反映されているのではないかと考える。もちろん、この問題に関しては、これ以上筆者の専門から深入りできるものではない。しかし、このように層位的発掘と型式学をC14年代につきあわせることにより、C14年代のもつ危うさを指摘することも可能であることを強調しておきたい。筆者がC14年代値自身による編年作成と、その再検証可能な方法論の確立を訴える理由はここにある。かつて、同じロンアン省の遺跡コーソントウの発掘採取資料で、同一採取資料を分割して、違うラボで比較測定をすると、

1500年以上の測定値差が生じたことがあった（6章-C-Vで詳述：Nishimura 2003a）。従って、特に測定ラボ間の、測定値偏差を明らかにし、その検証を行えるようなシステムを確立することが重要であると考えられる。

c 胎土の使い分け

混砂硬質土器と軟質土器との胎質差に基づく、器種の差異、あるいは各器種内における細分類段階における形態差あるいは装飾のあり方などの差を容易に認識できる。つまり、L3-5層、つまり最下層以外では、混砂硬質土器と軟質土器間に明瞭な作りわけが存在していたことを示している。もちろんこの現象は、混砂硬質土器形態が軟質土器に全く見られないような、整然とした対応になるわけではなく、一部の細分類には、混砂硬質土器と軟質土器両方に存在するものもあるし、また胎質自身を明確に二分できるものでもなく、その中間的なものが存在するものも事実であるが、基本的に胎質による器種あるいは細かい器形や装飾の造作の作りわけが、存在したことは事実である。

具体的には大型の球形深鉢はL3-4層以降は軟質土器にしか現れず、波状口縁浅鉢は混砂硬質土器にしか出現しないといった器種の作りわけが存在する。また、磨面に精緻な文様を施文する場合も、混砂硬質土器に限られている。これは土器機能や施文に応じた胎質を選択した結果であろう。

VI 新石器時代各遺跡の編年的位置づけ

a はじめに

これまで調査された遺跡について、筆者はいくつかの遺跡で若干の資料研究を行っている。そのなかにはRạch Núi（ザックヌイ）やBinh Đa（ビンダー）のように出土レベル情報が追跡可能な資料も含まれている。また1998年末に筆者らが行ったĐa Kai（ダカイ）遺跡も、出土レベルと分類研究に基づく、前後関係の把握が可能である（Nishimura et al. 2006）。

本論では、まず、ダカイ、ザックヌイやビンダーの資料をアンソン編年との比較を通じて、編年的位置づけを行う（以下、AS、RN、BD、DKと略称する）。そして、上記遺跡以外の遺跡資料について比較を行い、最後に南部ヴェトナムの新石器時代の比較編年を提出する。

なお、本論は、過去に行った議論（Nishimura 2002a, Nishimura et al. in press）を、新出資料や再整理によって深化させたものであるが、基本的結論に大きな変化は無い。

b Binh Đa（ビンダー :BD）遺跡資料と Đa Kai（ダカイ :DK）遺跡資料

ビンダーは1993年の資料を中心として、1979年の発掘資料の若干例を扱う。1979年資料に関しては、遺物の登記が正確に行われておらず、レベル別の検証はほぼ不可能であったが、1993年資料は全層を通じた資料（レベル1から15までで、1が最上）を、検証することができた。ここでは、AS、DK、BD 3遺跡間との比較を中心とする。

ダカイ遺跡は3地点にわたって、調査を行ったが、第1地点（36㎡）、第2地点（16㎡）、第3地点（2㎡）の発掘を行った。第1地点はレベル1から5、第2地点レベル1から7、第3地点は第

1 から10レベルまで、深度レベルを区分している。詳細は発掘報告に載せてある (Nishimura et al. 2006)。文化層もさほど厚くない遺跡で、レベル単位での遺物の取り上げであるため、遺物のレベル別分布による編年は、せいぜい前・中・後の3期分期が精一杯であった。また、ダカイでは石斧も3時期区分されている (Fig.90)。以下、両遺跡間の類似例を紹介する。

BV4B1類 (DK1-237:Fig.79-1) とBV4A2類 (DK1-234:Fig.79-2) は、DK前期のものだが、BD93-L15-2 (Fig.81-2) と同類である。BD93-L15-4 (Fig.81-4) に類似の口縁はASⅡ期に見いだすことができる。BD93-L15-9 (Fig.81-8) やBD93-L15-9 (Fig.81-2) も、類似の口縁はASⅡ期に存在する。BV4A2類 (DK1-241:Fig.79-4、DK1-239:Fig.79-3) は、DK前期のもので、BD93-L13-3 (Fig.81-14) と同類である。縄蓆文地文の上に並行波状沈線と並行沈線の組み合わせる文様 HVA1 (DK1-36: Fig.80-1) は、BD93-L15-1 (Fig.81-1) と共通し、ASⅠ期にも同類 (AS97-L3-5-86 :Fig.47-2) が確認できる。格子状縄蓆文と縄蓆文の磨り消し帯の組み合わせ (HVA4類のDK3-33: Fig.80-2) は、ASⅠ期 S97-L3-5-91 (Fig. 70-4) と同じである。BV4F類(DK1-220:F79-5) はDK前期あるいは中期のもので、BD93-L13-2 (Fig.81-13) と同類である。BD93-L11-4 (Fig.82-1) は、ASⅡ期に同類が確認できる。BD93-L10-2 (Fig.82-10)、BD93-L10-3 (Fig.82-7)、BD93-L10-4 (Fig.82-8) は、ASⅡ期に同類 (AS97-L2-14b-98 : Fig.66-1) がある。BD93-L10-1 (Fig.82-6) は、ASⅢ期に同類の文様が頻出する。文様HVA2類 (DK1-16:Fig.80-3) は、DK前・中期のものだが、BD93-L9-1 (Fig.82-13) やBD93-L8-1 (Fig.82-23) に類似している。DK中期のBV2A類 (DK1-244 : Fig.79-6) は、BD93-L9-3 (Fig.82-15) とBD93-L9-4 (Fig.82-16) に類似している。BD93-L9-2 (Fig.82-14) は、文様構成や形態が、ASⅢ期のAS97-L12-18b-92 (Fig.72-16) によく類似している。DK後期のBV2D2類 (DK1-436:Fig.79-7) は、BD93-L6-1 (Fig.83-9) に類似している。DK1-314 (CH4H5類 : Fig.80-10) は、BD93-L6-2 (Fig.83-10) に類似している。DK中・後期に特徴的な文様HVA6 (DK1-11: Fig.80-4) の施文方法は、BD93-L6-3 (Fig.83-11) と同じである。DK中・後期の文様 HVE2類 (DK1-46:Fig.80-6) の施文方法と形態は、BD93-L6-6 (Fig.83-13) とBD93-L5-1 (Fig.83-22) と同じである。DK1-436 (BV2D2類:Fig.79-7) は、BD93-L4-5 (Fig.83-34) に類似する。DK1-253 (BV2C-2類:Fig.79-8) は、BD93-L4-6 (Fig.83-35) とBD93-L4-2 (Fig.83-36) に類似する。BV2B-1類のDK1-L2-245 (Fig.79-9) は、BD93-L4-4 (Fig.83-38) に類似する。DK中・後期のBD2Aの類 (DK1-403 : Fig.80-8) は、BD93-L4-9 (Fig.84-1) と類似する。DK後期の文様HVA9 (DK1-M1-1:Fig.79-14) は、BD93-L2-5 (Fig.84-21) とBD93-L3-13 (Fig.84-12) が同じである。CH4H-6類のDK3-315 (Fig.80-12) とDK3-316 (Fig.80-11) は、形態的にBD93-L2-10 (Fig.84-26) に類似する。DK後期のBD2B2類 (DK1-407:Fig.80-9など) はBD93-L2-13 (Fig.84-29) と同類である。同じくDK後期のHVE3 (DK2-275:Fig.80-7) 類は、BD93-L2-14 (Fig.84-30) と同類である。DK1-51 (Fig.80-5) の文様 (HVE1類) は、BD93-L2-3 (Fig.84-19) と同じである。DK後期のBV1B2類 (DK2-285:Fig.79-12) とBV1B3 (DK1-77:Fig.79-13) 類は、ASⅣ期のAS97-L1-2-25 (Fig.66-8) とAS97-L1-2-24 (Fig.66-7) と形態的に同類である。DK1-67 (CH5-duB: Fig.80-14) の幾何学文様は、ASⅣ期に類例 (AS97-L2-1-73:Fig.72-21) がある。BD93-L2-2 (Fig.84-18) は、DK後期のBV5D (DK3-L5-370:Fig.79-10) と同類である。BD93-L2-1 (Fig.84-17) とASⅠ期のAS97-L1-2-1 (Fig.72-19) 例は、突帯の突起の程度こそ違うものの文様構成などにおいて同じである。この他、遺跡内出土状況が不明ながらもBD79-H1L4 (Fig.85-3) のように、AS97-L3-3-62 (Fig.64-11:ASⅡ期) と文様類似例が

ある。DK1-440 (Fig.79-11) の玉縁状口縁は、DC-VKCH-2(Fig.89-20) に類似器形がみられるが、AS97-L2-14b-98 (Fig.66-1) 、BD93-L4-2 (Fig.83-36) などと同じ長頸口縁で、口縁器表の調整法も共通している。DK1-60 (Fig.80-13) は、柱状脚台の上部だが、ジンオンのDO90-A1L4 (Fig.88-22) 、DO90-C5L5 (Fig.88-24) 、ロックザンのLG96-HVN (Fig.89-16) などに類似例をみる。DK3-434 (Fig.80-15) は、特異の器形のものだがRN-L10-o10例 (Fig.88-9) などに、類似器形、付加装飾を見ることができる。

以上の比較より、DKとBDはASとの類似資料を多く指摘することができ、それらを通じて、DKはASI-IV期と時期並行すること、BD資料は、ASII-IV期並行のものをほぼ層位的前後関係に応じて確認できることを理解できる。

c ザックヌイ (RN) 遺跡資料 :Fig.87,88

当資料はホーチミン市社会科学院考古学センター保管の資料を再研究したものである。発掘では5mの文化層において出土レベルがいくつに分けられたか報告されておらず、筆者実見資料ではレベル21が最大値であったので、21レベルを最深レベルあるいは、それに近い深度レベルと理解しておく。

当遺跡の土器のアセンブリッジ問題は、第11章で論じてあるが、土器全体の90%以上はRN-L5-o15 (Fig.87-26) 、RN-L13-o8 (Fig.88-12) 、RN-L15-o14 (Fig.88-13) などの植物繊維などの多く混じった縄蓆文深鉢で占められていた (Phạm Q.S.1978) 。従って、わずかな文様破片資料や縄蓆文深鉢の形態変化が時期変理解の鍵となる。

RN-L3-o2 (Fig.87-22) とRN-L8-09 (Fig.88-5) は、BD93-L3-5 (Fig.84-6) と同類である。RN-L3b-o15 (Fig.87-23) は、BD93-L3-13 (Fig.84-12) やBD93-L3-5 (Fig.84-6) と同類である。RN-L5-013 (Fig.87-24) 、RN-L5-013 (Fig.87-25) 、RNL6-o4 (Fig.88-1) は、BD93-L4-11 (Fig.84-3) と同類である。RN-L7-o3 (Fig.88-3) は、ASIV期に類似例をみる。RN-L7-o10 (Fig.88-4) は、同類がASIV期にも存在する。RN-L9-014 (Fig.88-8) は、BD93-L2-14 (Fig.84-30) やBD93-L3-16 (Fig.84-15) と突帯部の形態が類似している。RN-L15-o14 (Fig.88-13) は、ASIV期に類例がある。RN-L18-o8 (Fig.88-14) とRN-L20-o12 (Fig.88-15) は、BD93-L6-5 (Fig.83-12) と同類で、ASIII期にも類例を見いだせる。

d ロックザン (Lộc Giang) 遺跡 :Fig.89

その地理的近接性からアンソンと型式的にほぼ同じ土器を伴出している。

LG-H1-L13-1 (Fig.89-14) やLG-H1-L13-2 (Fig.89-15) はASIII期に位置づけられる。LG-H1-L12-1 (Fig.89-13) はASII期かIII期に頻出する文様である。

LG-H1-L4-1 (Fig.89-1) 、LG-H1-L4-2 (Fig.89-2) 、LG-H1-L5-2 (Fig.89-3) 、LG-H1-L5-4 (Fig.89-4) 、LG-H1-L5-5 (Fig.89-5) 、LG-H1-L5-6 (Fig.89-6) 、LG-H1-L6-1 (Fig.89-7) 、LG-H1-L7-3 (Fig.89-10) 、LG-H1-L7-4 (Fig.89-11) 、LG-H1-L10-1 (Fig.89-12) はASIV期に位置づけられる。また1994年調査の報告書 (Quang V.C.&Ngo T.P.1994) ではASII期の石器・土器も確認できる。従って、遺跡の居住期間はASII-IV期まで連続していたと考えてよい。ASI期に並行する遺物は公表資料、

博物館資料には見あたらなかった。

e カイヴァン (Cái Ván) 遺跡 :Fig.85.86.87

1977年資料の一部、1996年資料の代表的遺物を網羅的に資料化してある。

CV96-H3-L2-1110/1 (Fig.85-7)、CV96-H2-932/14 (Fig.85-13)、CV96-H2-L2-1110/2 (Fig.85-9) はASⅡ期に同様な文様パターン、形態を指摘できる。CV77-1 (Fig.86-10) やCV77-2 (Fig.86-11) もASⅡ期に位置づけられる。CV96-H3-L3-1110/16 (Fig.85-8) は、ASⅡ期あるいはASⅢ期に頻出する文様である。CV96-H2C-L1 (Fig.87-5) は、BD93-L10-2 (Fig.82-10)、ASⅢ期例に比較できる。CV96-H2-L1-999 (Fig.87-6) は、ASⅣ期の口縁と比較可能である。CV96-H3-L1C-1109 (Fig.87-16) の肩部の張り出し具合は、BD93-L7-4 (Fig.83-3) と同じである。同じく、CV96-H1-L2-925 (Fig.87-18) はBD93-L5-1 (Fig.83-22) に対比可能である。CV96-H1-L2a-928 (Fig.87-20) はBD93-HVN資料 (Fig.85-5) やDK3-L6-394と比較可能である。また、CV96-H1-L4-804 (Fig.87-7) とCV96-H3-LM (Fig.87-8) は縄蓆文の球形鉢で、ASⅢ期に同例を見つけることができる。

f ジンオン (Dinh Ông) :Fig.88

Tây Ninh (タイニン) 省博物館資料の一部を資料化した。DO90-1 (Fig.88-19)、DO90-2 (Fig.88-16) はASⅡ期あるいはASⅢ期に同類がある。DO90-3 (Fig.88-17) とDO90-4 (Fig.88-18) はASⅢ期に頻出する文様である。DO90-6 (Fig.88-21) はASⅡ期に同類が存在する。DO90-A1L4 (Fig.88-22) やDO90-C5L5 (Fig.88-24) はASⅢ期の脚に比較資料を見いださう。DO90-B3L9 (Fig.88-23) は特異な文様帯だが、形態的にはASⅡ期の脚に近い。

g カオソントゥ (Cao Sơn Tụ)

1999年筆者らのサーベイ時に、少なくともASⅡ-Ⅳ期にわたる資料を確認できた。博物館資料にASⅢ期に属する波状口縁鉢 (Fig.88-25) を確認している。

h ND11

当遺跡の遺物に関しては公表図版 (Đặng V.T. et al.1998) の質から、多くを論じ得ないが、ASⅡ期の石斧、ASⅣ期あるいはBD上層部に特徴的な縄蓆文地文上の並行沈線文、BD上層部に特徴的な、貼りつけ突帯肩部に並行沈線文を施したもの (例: BD93-L2-4, Fig.84-20, BD93-L5-5, Fig.83-26)、ASに普遍的な列点文を施した脚などを指摘できる。

i ベンドー (Bến Đò)

当遺跡の遺物に関しては公表図版 (Vu Q.H. 1991a) の質から、若干の比較可能例しか指摘できない。ASⅠあるいはⅡ期に特徴的な縄蓆文を施文した、ストーブの脚部、ASⅡ期に特徴的な、幾何学文様を口縁内面に施文した例、ASⅡ期からⅣ期に特徴的ななどを見いだせる。石斧は、ASⅡ期、Ⅲ期並行

の石斧、DK前期例との類似例を見いだせる。

j カウサット (Cầu Sắt)

DK前期・中・後期にそれぞれ特徴的な石斧 (Fig.90-17~19) が出土しており、DKと並行時期関係にあるのではないかと推測する。土器の内容は全く不明に近いが、BD上層部に典型的な肩部に突帯の付いた土器が出土している。

k ゴーカーソイ (Gò Cá Sỏi)

当遺跡 (Bùi C.H. 2000) はザックヌイと同じような土器アセンブリッジを有している。石器はASⅢ期やⅣ期、DK中・後期に比較例を見いだしうる。土器はカイヴァンとの同類・類似例を多く見いだせるが、ザックヌイの上層例、ASⅡ期あるいはⅢ期からⅣ期例に比較例を見いだしうる。

l スオイリン (Suối Linh)

1985年発掘の遺物に関しては公表図版 (Bùi C.H. et al.1997) の質から、多くは指摘しえない。DK前期に特徴的な石刀、DK前・中・後期相当の石斧類、BD中・上層部に特徴的な貼りつけ突帯肩部などが確認できる。2002年の発掘資料 (Trịnh S. 2005) では、ASⅡ期に特徴的な、幾何学文様を口縁内面に施文した例、BD上層部の貼りつけ突帯肩部に並行波状沈線を施文したもの、DK早期に特徴的な石斧などを見いだすことができる。

m ゾンカイチョム (Giồng Cây Trôm) :Fig.89

GCT96-3 (Fig.89-29)、GCT96-4 (Fig.89-30)、GCT96-5 (Fig.89-32)、GCT96-7 (Fig.89-33)、GCT96-11 (Fig.89-36) は、ASⅣ期に同類を見いだせる。GCT96-1 (Fig.89-26)、GCT96-2 (Fig.89-28)、GCT96-6 (Fig.89-31)、GCT96-9 (Fig.89-37) も、形態的にはASⅣ期の口縁だが、当遺跡に特徴的なやや薄手の土器と考えている。

n スオイチョン (Suối Chồn)

SC78-24 (Fig.89-25) はASⅡ期に位置づけられる。発掘報告 (Vũ Q.H.1991c) では多くを指摘し得ないが、石斧ASⅡ期あるいはDK前期や中期に位置づけられそうな資料がある。

o ザックズン (Rạch Rừng)

多くの採集資料の中に、ASⅢ期に特徴的な回転を利用した同心円間やジグザグ文の土器片 (Fig.93-8,9) が若干存在している。

p ゾックチュア (Dốc Chùa) :Fig.89,90

考古学院所蔵資料のDC-VKCH-1 (Fig.89-19) はDKの後期資料、BD93-L6-2 (Fig.83-10) に類似する。DC-VKCH-2 (Fig.89-20) やDC-H1L1-31 (Fig.89-18) は、DK1-440 (Fig.79-11) に比較できる。DC-VKCH-4 (Fig.89-21) は、BD93-L10-2 (Fig.82-10) に比較できるし、DC-VKCH-3 (Fig.89-22) やDC-VKCH-6 (Fig.89-23) は、DKの文様タイプHVA2やBD93-L2-1 (Fig.84-17) やBD93-L4-11 (Fig.84-3) と同じである。DC-VKCH-5 (Fig.89-24) はBD93-L4-1 (Fig.83-33) と同じである。また、石斧 (Fig.90-12~16) にもASⅡ-Ⅳ期やDK前~後期に位置づけられるものがある。

q ロンビュー (Long Bưu)

当遺跡の遺物に関しては公表図版 (Đặng V.T. et al.1998) の質から、土器に関しては、後代の鉄器時代の土器が多く存在することと、DKⅣ期に頻出する外湾口縁 (例: DK3-212) が確認できる以外は詳細を論じ得ない。しかし、石斧はASⅡ期あるいはⅢ期並行のものが確認できる。

VII 新石器時代各遺跡の居住分期

以上の、遺物比較に基づく、居住分期をAS編年に基づいて整理をすると、Table6のようにまとめることができる。アンソンとダカイ以外にASI期に確実に遡るものが確定できないが、これは土器資料の公表・研究不足によるところが大きく、実際は複数の遺跡で並行例が存在するだろう。また、いくつかの遺跡ではASⅠ-Ⅱ期が確認されないものがあり、新石器時代のなかでも居住に関して、時期変動があったことを理解できる。特に海岸部での一部遺跡での居住は開始が遅れるかもしれない。また、多くの遺跡で、新石器時代以後の居住が継続しないのも大きな特徴である。

Table. 6 新石器時代遺跡編年表

	An Son I	An Son II	An Son III	An Son IV	青銅器時代以降
An Son	●	●	●	●	—
Loc Giang		●	●	●	—
Dinh Ong		●	●	●	
Rach Rung			●	?	●
Rach Nui	—	—	●	●	—
Giong Cay Trom	—	—	—	●	?
Dinh Ong		●	●	●	—
ND11		●	●	?	—
Ben Do	?	●	●	●	—
Long Buu		?	●	●	●
Binh Da	—	●	●	●	—
Cai Van	—	●	●	●	●
Go Ca Soi	—	?	●	●	—
Suoi Chon		●	●	●	●
Cau Sat	?	●	●	●	—
Suoi Linh	?	●	●	●	—
Doc Chua		●	●	●	●
Da Kai	●	●	●	●	—

C 金属器時代からオケオ文化初期への編年

I はじめに

東南アジア大陸部全体で見た場合にいわゆるパンチェンショックといわれるタイ考古学の一連のC14年代に依拠した金属器時代の突出した古い年代論は、いまだ、東南アジア全域の先史考古学にその影を落としているといわざるをえない。近年Higham (1996) が、C14年代の見直しにより、東南アジアの青銅器時代開始をBC1200年前後に下げる議論を開始しているが、今村 (1980) が早くに指摘しているように、遺物の相対年代議論を行っておらず、根本的解決にいたっていない。こうした遺跡や遺物の脈略を無視した考古学は、百害あって一利なしである。

ヴェトナム南部の青銅器時代の始まりに関しても、北部ヴェトナムを除いた東南アジア他地域同様、遺物編年に基づく相対編年が整理されておらず、金石併用期を唱えたり、北部の金属器時代開始年代仮説をそのままあてはめたりしたものなど、1研究者1仮説的状况である。しかし、どれとして遺跡の遺物出土コンテクストから遺物編年を組み立てる作業をしておらず、ここでは、いちいちそれらの仮説を検証することはしない。

本論では、前出の新石器時代の編年作業に接続する形で、初期歴史時代とされるオケオ文化初頭に至るまでの金属器時代の編年案の確立を行う。対象とする地域は前論同様、ヴェトナム東南部とされる、ドンナイ川流域からヴァムコー川流域にかけての地域である。

II 新石器時代末に接続する土器アセンブリッジは何か？

アンソンとダカイ遺跡の場合、最上層出土の特徴的土器には以下のようなものが挙げられる (Nishimura 2005)。両遺跡で、口縁が大きく外折し、外折部の上面に幾何学文様を刻み入れたものがあり、一つの指標遺物となる (Fig.66-5~9, Fig.79-12,13)。またアンソンの場合、口縁上端部が大きく膨らみ、張り出したものや内側へ折り返されたものが特徴的器種となっている (Fig.63-19~22)。また、ダカイやビンダー、さらにはアンソンの土器群から、肩部の縄蓆文地文上に並行沈線や並行波状線文、あるいは列点文をめぐらせたのものなど (Fig.72-22~24, Fig.79-14, Fig.84-21,37) を共通した施文パターンとして挙げる事が可能である。そして、こうした土器に最も類似した土器を含む土器群を見つけだす必要がある。

III 青銅器時代に限定可能な遺跡・遺物例

a ゾンカイチョム (Giồng Cây Trôm)

アンソン遺跡が位置するドゥックホア県の隣のĐức Huệ (ドゥックフエ) 県に位置している。1995年末にサーベイをした際に1㎡規模の調査土坑で文化層厚の確認を行った遺跡で、その後99年に再度分布調査を行った。Fig.89-26~37は当遺跡の土器群である。その中には、ASIV期に典型的な、断面が波打つ内折する口縁や、三角形で文様帯を区画し、粗い列点文を施した文様をもつ肩部片もある。同

時期の石斧も採集されている。また、口縁のタイプには、アンソンにないタイプ、口縁先端が内外に張り出し、断面が細かく波打ち、全体に作りが薄手のものがかなり多く見られ、これらは同時期だが、別タイプのものとする。

b ザックヘオ (Rạch Heo) :Fig.91

1996年表採資料は数は多くないが、他遺跡との比較でその位置づけをうかがい知ることができる。口縁にはいくつかの種類が確認される。

RH96-9 (Fig.91-1) やRH96-15 (Fig.91-3) のように先端が内側に突出し、口縁の器面が波打つものがある。これはASIV期に特徴的な器体外面が波をうつ口縁に系統的に繋がるのではないだろうか。口縁先端内側が若干鋭角に張り出すもの (RH96-11:Fig.91-6, RH96-12:Fig.91-2) や口縁部が胴部とは完全に独立し直立するもの (RH96-7:Fig.91-7, RH96-6:Fig.91-9, RH96-10:Fig.91-4) もある。前者類はBD最上層資料に類似例を見いだすことができる。RH96-10 (Fig.91-4) 例はカイヴァンやブンバック出土の高杯口縁例に類似している。また、大きく外湾し内面に並行沈線と交叉沈線を刻文したもの (RH96-8:Fig.91-11) や外折口縁で、並行沈線を刻文したもの (RH96-5:Fig.91-8) などが含まれている。特に後者はASIV期例やDK後期例に接続する例と考えられる。文様に関しては、縄蓆文地文を磨り消し部と磨り残したところに刻線を刻み入れたもの (RH96-1:Fig.91-5, RH96-2:Fig.91-13) や縄蓆文地文上に直線とジグザグ状の並行沈線を刻み入れたもの (RH96-3:Fig.91-10) などがある。これらの文様はASIV期やBD上層部の文様に近い。また、突帯が付された胴部片 (RH96-14:Fig.91-12) もある。これはフーミー出土例に類似例があるし、ASIV期の突帯付き胴部片と系統的に繋がるかもしれない。

c フーミー (Phú Mỹ) :Fig.91.92

当遺跡資料は、考古学院所蔵資料を系統的に資料化した。Fig.91-19～32, 92-1～19は所蔵資料の主だった口縁、文様、脚部資料である。胎質は全て、砂粒混じりのもので、褐色、明灰褐色を呈している。また、磨き等により、平滑な器面を維持している。口縁は先端部が外側や上方向に突出したものが特徴的である。脚部は、大型で中半部が曲折しているもの (PM98-2:Fig.92-5, PM98-3a:Fig.92-6)、貼りつけ突帯を持つもの (PM98-11:Fig.92-11) や下部が折れて外側に張り出したもの (PM98-27, 28:Fig.92-12, 7) がある。文様は、肩部あるいは胴部上半に、縄蓆文地文上に大きいうねりの並行沈線を施文したものが主である。地文が上半で磨り消されているのも一つの特徴である。また、PM98-46 (Fig.92-10) 例やPM98-1 (Fig.92-11) 例のように貼りつけ突帯を有す胴部片がある。

d ブンバック (Bưng Bặc) :Fig.91

公表図版 (Pham Đ.M. 1996) は、模式図が中心で、正確な形態理解が難しい。博物館資料を管見の限り、胎質は砂混じりの褐色、あるいは灰褐色のものであった。ただ、拓片の文様には2種類 (Fig.91-16～18) がある。一つは縄蓆文の地文上に大きくうねった波状沈線文を刻み込んだもの。もう一つは、縄蓆文沈線の上に間隔の大きい並行沈線文を施したものである。前者はフーミーの文様と同類で、後者はDK後期の文様に類似している。

口縁形態 (Fig.91-14,15) に関しては、先端部の根元が外側に湾出したものが、DK後期の外反口縁 (BV1 類) に類似している。また、高坏において、口縁が内湾したものがあるがカイヴァンに同類を見ることができる。

e プントム (Bưng Thơm) :Fig.92

胎質はブンバック同様砂混じりの褐色、あるいは灰褐色のものである。土器のアセンブリッジの主 (60%以上) を占めるものは、高坏であるため、高坏以外の土器の形態がよく理解できない。ただ高坏類は口縁が丸く内反するもの (BT97-3,4:Fig.92-25,28) で、脚部 (BT97-2,8,9,10:Fig.92-24,21,20,23) は下部が外折している。また低湿地による保存の良さから、彩文例が多く出土している。それらの文様には後述の並行沈線文と同じような文様モチーフが多い。若干数公表されている壺、釜の類には、縄蓆地文にうねりの大きいS字状並行沈線を刻文しているもの (BT97-5,6,11:Fig.92-27,30,29) や並行沈線によるS字状文様を連続施文したもの (BT97-7:Fig.92-26) がある。文様はブンバックやフーミー出土例と共通しているし、高坏に関しては、全体的にブンバックと共通し、脚がPM98-23 (Fig.92-18) 例や口縁がRH96-10 (Fig.91-4) などと類似している。

f ザックズン (Rạch Rừng) :Fig.93

1990年と1996年の表採遺物だが、色々なヴァリエーションの土器を含んでいる。その中で、前出の各遺跡と共通する土器を指摘することができる。胎質は砂混じりの褐色、あるいは灰褐色のものである。RR90-1 (Fig.93-1) はRH96-6,7 (Fig.91-9,7) などによく類似している。両面を波打つように丁寧な磨いているのが特徴である。RR90-52 (Fig.93-3) はとRR) などと共通性を感じさせる。縄蓆地文上に並行沈線や並行波状沈線文が刻まれたもの (RR90-7,47,53,54,65:Fig.93-8,5,7,9,10) があるが、これらもRH96-3 (Fig.91-10) あるいは新石器段階の施文方法との類似性を指摘できる。また、RR90-18 (Fig.93-15) はRH96-8 (Fig.91-11) と形態、文様両面で同類である。

g ゾックチュア (Dốc Chùa) :Fig.98

様々な時代の遺物を含む遺跡なので時期区別が困難だが、上出の土器資料と類似するものを指摘できる。DC-H1L4-11 (Fig.98-23) とDC-H1L1-12 (Fig.98-1) は、PM98-38例 (Fig.92-3) に類似する。DC-H1L4-18 (Fig.98-21) は、PM98-24 (Fig.91-30) 、PM98-32例 (Fig.91-32) に類似している。外折した脚DC-H1L3-6 (Fig.98-5) はプントム出土例 (Fig.92-24) にやや類似する。

h 小結

以上指摘した土器は、それぞれ、胎質、形態や文様モチーフ、施文方法において共通していることが理解できる。後述のように、フーミー、プントム、ブンバック、ゾックチュアでは青銅器や青銅器の鋳型が出土している。また鉄器や石斧が管見の限り1点も存在しない。報告に石斧として報告されているもの (Trinh S.2001) は、刃部の丸められた石斧型をした楔であり、石斧ではない。よって、以上の土器を青銅器時代のもと考え、フーミー、ブンバック、プントム、ザックヘオを青銅器時代

のみの居住遺跡と判断し、ザックズンとゾックチュアは青銅器時代の文化層を含む歴代居住遺跡と判断する。

IV 鉄器時代遺跡の抽出

a 鉄器出土遺跡

ゾンカーヴォ、ゾンフェット、スオイチョンなどに代表されるサフィン系球形壺型甕棺墓には、しばしば鉄器が伴っている。この他にロンビュー中・下層部 (Đặng V.T. et al.1998)、ゴーカオスーの下層レベル (6-9レベル: Trần A.D. et al.2001)、ゴーオーチュアの試掘抗の中レベル (Ngô T.P.&Bùi P.D.2000) で鉄器片の出土が報告されている。墓葬以外の脈絡での出土例は決して多くなく、鉄器時代に所属しながらも鉄器が出土していない遺跡例もあると想定される。

青銅器時代の終末あるいは鉄器時代の始まりをいつとするかは、重要な課題である。本論では鉄器時代、あるいはそれ以降に比定可能な資料を抽出し、比較編年作業を行い、鉄器時代の範囲確定のための基礎論を提出する。ただし、問題は比較編年のための根拠を何に求めるかであるが、筆者の行ったコーソントゥ編年を一つの基礎とし、ゴーオーチュアの発掘結果、出土レベルの判るゴーカオスー資料、さらにはゾンカーヴォやゾンフェットでの編年認識などを根拠として利用する。

b コーソントゥ (Cổ Sơn Tự) の編年 :Fig.101

1996年に行ったコーソントゥの試掘調査 (Nishimura 2003a) は、第1坑と第2坑での共通分類枠での分類結果を相互比較する作業を行った。土器は砂粒が多く混じり、しまりのよい硬質土器と砂粒は少なく植物繊維や有機物が多く混じった軟質土器に大別できたが、両類において時期変化を明らかにでき、土器のヴァリエーションは多くないながらも、4期に分期可能な編年を組み立てた (Fig.101: Nishimura 2003aを改変)。また、後に再論するが、C14年代測定結果と他遺跡との遺物比較から紀元前10000年紀後半に納まる実年代を想定している。ここでは、CSTの比較を念頭に置きながら、各遺跡資料の叙述を進める。

c ゴーカオスー (Gò Cao Su : GCS) :Fig.94~97

発掘資料 (レベル1から9) まで、口縁や文様資料を網羅的に資料化してある。出土レベル順に叙述を進め、より下層レベルにはない新出タイプを指摘しているが、決して、それ以下の層にないタイプという理解はできない。なぜなら、博物館所蔵時点で資料自体が取捨選択されているからである。

最下層資料 (L8+L9) に釜あるいは広口壺、高杯の口縁 (GCS-L8+L9-5,6,7,10,15:Fig.94-6,2,12,16,15) や高杯の脚 (GCS-L8+L9-1,8,11b:Fig.94-11,3,18) が含まれている。並行沈線による施文例 (GCS-L8+L9-5,6:Fig.94-6,2) や部位不明だが並行沈線文と刺突文の組み合わせ文 (GCS-L8+L9-9:Fig.94-5) もある。この中で、GCS-L8+L9-3 (Fig.94-8) はCST I 期のP1L16-22 (Fig.101-2) に、GCS-L8+L9-14 (Fig.94-10) はII期のP1L9-32 (Fig.101-16) に類似している。また、GCS-L8+L9-4 (Fig.94-7) は、CST I 期のP2L14-50 (Fig.101-1) に口縁形態が類似する。GCS-L8+L9-13 (Fig.94-9) も

CST I 期のP1L20-6 (Fig.101-3) などに形態的に近い。さらにはGCS-L8+L9-1 (Fig.94-11) などはブントムやフーミーの脚類にも形態的につながりを認められよう。

第7レベルでは、2重の貼りつけ突帯に指頭圧痕で施文したもの (GCS-L7-14 (Fig.94-20)、縄蓆文地文をバンド状に残して、まわりは磨り消し、縄蓆文部に波状線文を刻み入れているも (GCS-L7-18:Fig.94-28)、口縁外面にV字状並行沈線文を施した高坏口縁 (GCS-L7-12:Fig.94-23)、内湾口縁で方角文等の幾何学叩き紋を持つもの (GCS-L7-10,11:Fig.94-16,26)、口縁下に突帯のついたもの (GCS-L7-5:Fig.94-27) などが新出している。GCS-L7-12 (Fig.94-23) のV字状並行沈線文は、CST III 期のP2L6-300 (Fig.101-21) にも同様な文様がある。

第6レベルでは、肥厚口縁の外面に曲線状並行沈線文を刻文したもの (GCS-L6-1:Fig.95-1)、口縁上面に並行沈線さらに内外両面にも並行沈線による施文を施したもの (GCS-L6-17:Fig.95-8)、同じく口縁外面に並行波状沈線を刻文したもの (GCS-L6-18:Fig.95-10)、肥厚した口縁で先端が上方に張り出した高坏口縁 (GCS-L6-7:Fig.95-13) などが新出している。また、直立口縁で、胴部に縄蓆文を施した壺 (GCS-L6-6:Fig.95-16) や外側に膨らみを有す程度の脚 (GCS-L6-2:Fig.95-9) などは前出例より、若干の形態的変化を見せている。外反口縁 (GCS-L6-9:Fig.95-18) は、CST III 期のP1L8-1a (Fig.101-12) 例に、口縁断面形態が類似している。

第5レベルでは、頸部に尖った突帯の付された口縁 (GCS-L5-4:Fig.95-24)、外折した器高の高い口縁 (GCS-L5-1:Fig.95-19)、外反する肥厚口縁をもつ高坏口縁 (GCS-L5-8,11:Fig.95-32,21) などが新出している。またGCS-L5-10 (Fig.95-20) は、GCS-L6-11 (Fig.95-3) と形態的に近いが、外側への張り出しが大きくなっている。GCS-L5-9 (Fig.95-30) は、GCS-L6-3 (Fig.95-11) と同類だが、口縁近くに幅太の沈線が入っていることと断面形態が違う。GCS-L5-1 (Fig.95-19) はCST II 期のP2L12-1 (Fig.101-17) 例にままた類似している。また、GCS-L5-11 (Fig.95-21) は、CST IV 期のP2L3-304 (Fig.101-34) にままた類似している。

第4レベルでは外反肥厚した大型口縁 (GCS-L4-1:Fig.96-2)、口縁上面に波状線で区画し、刺突文を外側に充填したもの (GCS-L4-24:Fig.96-15)、口縁先端部に連続刺突文を施したもの (GCS-L4-8,15:Fig.96-6,5)、口縁内面先端に並行波状沈線を施文したもの (GCS-L4-2,9:Fig.96-11,10)、裾広がりの脚に曲線区画と貝殻腹縁文の組み合わせ文を施文したもの (GCS-L4-12:Fig.96-14)、断面三角状に尖りだした折腹胴部に、肩部に線区画と貝殻腹縁文の組み合わせ文を施文したもの (GCS-L4-5:Fig.96-13) が、新出のものである。また磨り残し縄蓆文上での並行波状沈線文 (GCS-L4-22:Fig.96-20) もあるが、完全に縄蓆文がなくなり無文化した帯状部の上に並行波状沈線文したものが、新出している。また先端が外反尖出した口縁 (GCS-L4-7:Fig.96-3) は、GCS-L5-10 (Fig.95-20) との形態的連続性を考えることができる。さらに、幾何学叩き紋をもつ内湾口縁で、前出類よりさらに内湾のきついもの (GCS-L4-21:Fig.96-16) が新出している。GCS-L4-18 (Fig.96-1) は、CST II 期のP1L9-9 (Fig.101-11) に類似している。また、GCS-L4-15 (Fig.96-5) は、同じくCST II 期のP1L10-67 (Fig.101-14) に類似している。

第3レベルでは、貝殻殻頂部を先端面や上面に施文した外反口縁 (GCS-L3-1,6:Fig.96-24,36)、口縁が尖出しながら外反する碗あるいは高坏口縁 (GCS-L3-2:Fig.96-27)、線状幾何学文を施文した、広がりの大きい脚部 (GCS-L3-22:Fig.96-38)、口縁内面に彩文した高坏、部位不明の鋸歯状装飾をもつ

た突帯部（GCS-L3-9,10:Fig.97-20,19）などが新出している。また、GCS-L4-12（Fig.96-14）と形態的には同じだが、並行波状沈線を交叉施文したもの（GCS-L3-14:Fig.96-34）、先端部がやや膨らみ上面に連続刺突文を施文し、外面にも刻文をしたもの（GCS-L3-17:Fig.96-23）は、GCS-L4-7（Fig.96-3）と形態的に繋がることが理解できる。また、GCS-L3-25（Fig.96-35）は、貝殻腹縁文ではなく点状刻文になっている。さらに、帯状部に並行波状沈線を施文したもので、波状沈線がS字状から単純な連続波状文になったもの（GCS-L3-35:Fig.97-14）や沈線と点状刺突文の充填文になったもの（GCS-L3-23:Fig.97-11）が新出している。これらは、前出の縄蓆文地文に波状沈線を施す同モチーフのものに後出するものと考えてよいだろう。断面三角状に尖りだした折腹胴部片は、肩部に波状沈線文や彫り込みによる施文が行われている（GCS-L3-31,38:Fig.97-7,8）。

第2レベルでは、外湾肥厚した口縁で外面に波状沈線文を施したもの（GCS-L2-22:Fig.97-22）、内反口縁で外面にV字状区画と列点文を施したもの（GCS-L2-15:Fig.97-37）、外反口縁で肩部にV字状区画に線状文を組み合わせたもの（GCS-L2-17:Fig.97-30）が新出している。また、断面三角状に尖りだした折腹胴部片で、折腹胴部が鋸歯状突起になっているもの（GCS-L2-57:Fig.97-32）や、折腹胴部上面に鋸歯状施文をしたもの（GCS-L2-2:Fig.97-41）は、器形としては前出例を踏襲するが、文様的には新しいものとなっている。また、口縁内面あるいは外面の幾何学的線状区画（GCS-L2-4,6:Fig.97-35,33）は、前出のGCS-L3-38（Fig.97-8）例の彫り込み文とモチーフ的に同じである。GCS-L2-20（Fig.97-22）は、GCS-L3-37（Fig.96-28）が形態的に変化したものと理解できる。GCS-L2-21（Fig.97-28）、GCS-L3-17（Fig.96-23）と形態的に近い。GCS-L2-4（Fig.97-35）は、CST IV期のP2L2-100（Fig.101-35）に形態的に近く、GCS-L2-10（Fig.97-23）も、断面形態ではCST IV期のP2L3-65（Fig.101-41）と類似している。

第1レベルでは、頸部をくびれさせた口縁（GCS-L1-1:Fig.97-46）や肥厚した内湾口縁（GCS-L1-3a:Fig.97-48）が新出している。

以上から、GCSの土器アセンブリッジは、L9からL1を通じて、形態、文様上変化は見られるものの、連続した変化であると考ええる。また、CST編年のI期からIV期まで類似例を見いだすことが可能で、時間的並行関係にあると判断される。

d ゾンカーヴォ（Giồng Cá Vò）とゾンフェット（Giồng Phết）:Fig.107～110

ゾンカーヴォ（GCV）とゾンフェット（GP）の間で、遺跡で最も普遍的に出土する、幾何学文の叩き紋を有した円錐形尖底土器の変化に関して、出土の前後関係より共通した認識ができていく（Đặng V.T.&Vũ Q.H. 1997, Đặng V.T. et al.1998）。それは、GCV Type1→GCV Type2→GP Typeという変化である。

GCV Type1（Fig.107-17～25）は、口縁から肩部にかけて、丸みをもって湾曲し、口縁上面の先端部手前に、太幅の沈線が入るものがある。GCV Type2（Fig.107-26～28）は、口縁部から肩部にかけての湾曲がきつくなり、器形全体としてはすぼまるようになる。GP Type（Fig.108-1～3）は、口縁部が外側に張り出し、逆に肩部が内側に窄まり、器形全体としては頸部を形成するようになる。GCVの発掘ではGCV Type1、GCV Type2、GP Type全てが確認されているが、GPでは下層がGP Typeで占め

られ、上層がGiồng Am (ゾンアム:Vũ Q.H. et al.1994) と同じタイプの円筒形土器で占められている。GCVとGPが時期的に重なることは、Giồng Phết(ゾンフェット) 出土の他種の土器群にGCVと同類の土器が含まれていることで、ある程度納得がいく。

ただし、残念ながら他類の土器に関しては、編年的研究が全く追求されていない。従って、GCVに関しては多くの土器が図面公表されているが、墓葬単位で遺物が報告がされておらず、共伴関係が理解できない状況になっている。ただ、1997年に筆者が責任編集した*Journal of Southeast Asian Archaeology* No.17のヴェトナム考古学特集号掲載の英訳論文(Đặng V.T.&Vũ Q.H. 1997)では、掲載図面の層・墓葬番号を明確にしたので、ごくわずかであるがH1M20号墓(Fig.108-5~11)、H4M80号墓(Fig.108-12~15)、H1M54号墓(Fig.108-10,17)、H4M74C(Fig.108-18,19)号墓などで若干の共伴関係を理解可能で、ここにまとめて掲げておく。H4M80号墓とH4M74C号墓は双獣頭块状耳飾り(Fig.108-15,19)が共伴している。

ここでは、他遺跡との比較を中心に行う。まず、円錐形幾何学叩き紋土器については、GCV Type1が、GCSのレベル7から3にかけて、GCV Type 2が、レベル4で出現している。また、ゴーオーチュア(GOC)の最下層でもGCV Type1あるいはGCV Type 2のもの(GOC97-H2L8-238:Fig.104-14)が出土している。GOC97-H1L11-227(Fig.103-15)やGCS-L3-17(Fig.96-23)の断面形態や施文のあり方が、GCVのFig.109-20例に類似する。GOC最上層部出土の脚部の長い高坏(GOC97-H2M1-201:Fig.105-8)は、GCVにも類似例(Fig.109-14)があるが、口縁形態や脚部文様などは類似とは言えず、ある程度の時間差があると考えてよい。GCS-L3-22(Fig.96-38)の脚部片の断面形態は、GCVの(Fig.109-13)例と同じである。GCS-L7-5(Fig.94-27)の器種不明口縁は、GCVのFig.110-3例と形態的に同じであろう。GCS-L4-24(Fig.96-15)の口縁はGCVのFig.110-10例と断面形態が同じである。

文様に関しては、施文部位が異なれどモチーフなどが同じというものが多い。また、同じくGOC最下層出土のGOC97-H2L8-237(Fig.104-15)の文様は、GCVに同様例(Fig.109-1)がある。GCS-L4-13(Fig.96-8)やGCS-L3-26(Fig.97-12)の並行波状線文様は、GCVのFig.110-6と同じものである。GCS-L2-15(Fig.97-37)の口縁部の施文は、GCVのFig.110-7の施文と同じである。GCS-L2-4(Fig.97-35)、GCS-L2-9(Fig.97-40)やGCS-L4-5(Fig.96-13)は、GCVのFig.110-12例と文様が酷似する。GCS-L2-16(Fig.97-36)やGCS-L3-23(Fig.97-11)の施文は、GCVのH4M80例(Fig.108-14)やFig.110-10例に類似する。CSTIV期の器蓋片P2L4-145(Fig.101-32)は、GCVのFig.110-1と類似する。

こうした類似例を指摘していくと、GCSに類似例のみられない文様類が、GCVに存在することに気づく。それは、Fig.108-5,8,13, Fig.109-4,5などの角張った幾何学文のもので、なかには粗く短い刻線文、刻点を充填したものもある。さらに、Fig.108-16,17, Fig.109-3などの単純で無地文の上に施された並行波線文、Fig.108-14,18などの断続する並行波状線の周囲を粗く刻線文、刻点で充填したものなども挙げられる。これらは施文のスタイル・モチーフとして、GCSには見られないものであり、GCSより後出するGP期のものと判断できよう。

また後述するので具体例は省くが、GCSと並行するロンビュー(Long Bru)との共通資料が多いことも指摘しておく。

H1坑とH2坑（共に第2マウンドに位置するが75m程度離れている）の資料があるが、報告書では代表的な器形が報告されているのみで、分類統計表も付されていないので、詳細な両坑間での比較は不可能である。ただし、報告者は、両坑で共通した文化層を4ユニットに分け、当遺跡で最も多く出土する土製支脚分類の各ユニット間での変化を論じており（Ngô T.P.&Bùi P.D.2000）、それによれば両坑間での時期差はないと考えてよい。また、両坑間で取り上げられている代表的な土器が、かなり異なっているのは、筆者がCコーソントゥで論じたように、地点間で生産された土器の器種がかなり異なっていることが原因していると考えられる（詳細は11章参照）。

ところで、当遺跡では、いくつかの器種において発掘レベル間での形態変化が看取でき、編年のための重要な根拠を与えてくれる。具体的には以下の例を挙げられる。高坏の口縁であるが、最下層部で口縁外面下に沈線が入っていたもの（GOC97-H1L12-1:Fig.102-1、GOC97-H1L12-217:Fig.102-2）が、口縁先端部が肥厚化し（GOC97-H1L12-216:Fig.102-3、GOC97-H1L12-215:Fig.102-4、GOC97-H1L9-31:Fig.102-5、GOC97-H1L8-1:Fig.102-6）、さらには先端部が内反するように（GOC97-H1L2-1:Fig.102-8）変化している。また口縁が大きく外側に張り出すもの（GOC97-H1L2-19:Fig.102-14、GOC97-H1L2-20:Fig.102-15）は、最上層での特徴であろう。球形壺で、比較的高く大きく外反した口縁（Fig.103-14～19）でも、口縁先端部の突出部や頸部での接合断面形態が変化するのを読みとれる。また、口縁先端外面に刺突文や文様を施すのは最下層部の特徴である。また、口縁が窄まった平底の球形壺も上層部でしか出現しないもののようである。またオケオ文化に特徴的な皿形器蓋（GOC97-H2L1-105:Fig.104-16）が最上層で出土している。

そして、いくつかの器形、口縁形態や文様において、CST、GCS、GCVとの類似例が指摘できる（Nishimura 2003a, Nishimura 2005a）。まず距離的に最も近いCSTであるが、CSTIV期の沈線を口縁直下にもつ高坏口縁（P2L1-36:Fig.101-33）は、GOCの最下層（H1L12-1:Fig.102-1）で出土している。同じくCSTIV期に特徴的な外面が波打つように段差をもたせる器面調整（P2L2+L3-146:Fig.101-28）が、GOCの最下層（GOC97-H1L12-214:Fig.102-17）で確認できる。さらにCSTIV期に位置づけられるP2L4-125（Fig.101-27）の口縁と同型口縁が、GOC97-H1L12-6（Fig.103-5）で確認される。またCSTⅡ期に特徴的な、先端が肥厚した外反口縁（P1L9-2a:Fig.101-15）も、GOCの最下層（GOC97-H1L12-212:Fig.103-1）で出土している。

GCS-L3-17（Fig.96-23）の口縁形態はGOC下層部のGOC97-H1L12-220（Fig.103-12）、GOC97-H1L11-227（Fig.103-15）に類似する。GCS-L2-21（Fig.97-28）、GCS-L1-7（Fig.97-39）の口縁形態は、GOC下層部のGOC97-H1L11-227（Fig.103-15）に近い。

f ゴーソアイ（Gò Xoài : GX） :Fig.93

表採資料である。GX-1,2,3,6,13（Fig.93-28,37,34,38,31）などの口縁資料は、外面を丁寧になでて波打つような器面調整を行っている。GX-3例は口縁真ん中で折れ曲がり、GX-2例は口縁真ん中で突縁が付されている。GX-8,10例（Fig.93-41,42）は、口縁上面に並行沈線と刺突文の組み合わせ刻文がある。また、GX-4,11例（Fig.93-39,36）のように口縁上面が、波打つように調整されたものや同心円状沈線を巡らせたものなどがある。胴部文様には、口縁上面同様並行沈線と刺突文の組み合わせ刻文例（GX-14:Fig.93-30）、縄蓆文状に並行沈線文を刻文したもの（GX-15:Fig.93-33）などがある。GX-7

(Fig.93-35) のように口縁直下まで縄蓆文を施した無頸壺も特徴的である。

CSTやGCSとの比較では、以下の類似例が指摘できる。GX-3 (Fig.93-33) 例はCST I 期例 (CST-50:Fig.101-1) に類似している。GX-4例 (Fig.93-39) は、GCS-L7-6 (Fig.94-24) に類似している。GX-6はGCS-L2-10 (Fig.97-23) と系譜的には接続するであろう。GX-7 (Fig.93-35) はGCS-L6-6 (Fig.95-16) と同じ系統に属すが、形態的に少し異なっている。

g ロンビュー (Long Bửu:LB) :Fig.100

当遺跡の場合、報告書図版の質から、細かな比較は可能としないが、多くの類似例をCST、GCSに見い出すことができる。

Fig.100-1は、CSTIV期のP2L2+L3-146 (Fig.101-28) と類似する。Fig.100-2やFig.100-5は、GCS-L3-3 (Fig.97-6) などと近い。Fig.100-7は、形態的にGCS-L4-24 (Fig.96-15) に近い。Fig.100-7はCST II 期のP2L7-61B (Fig.101-13) に形態的に類似している。Fig.100-8,9は、GCS-L8+L9-13 (Fig.94-9)、GCS-L5-1 (Fig.95-19)、CSTII期のP2L12-1 (Fig.101-17) と同類である。Fig.100-15はGCS-L8+L9-3 (Fig.94-3) に類似している。Fig.100-19はGCS-L8+L9-1 (Fig.94-11) と同類である。Fig.100-11は、CST II 期の縄蓆文浅鉢P1L11-139a (Fig.101-19) に類似している。Fig.100-13はGCS-L8+L9-13 (Fig.94-9) と類似する。Fig.100-17はCST I 期のP2L14-48 (Fig.101-6) と類似している。Fig.100-20の折腹胸部は、GCS-L4-5 (Fig.96-13) のそれと同類であろう。Fig.100-25は、GCS-L3-22 (Fig.96-38) と同類である。文様拓本Fig.100-22,23は、GCS-L4-12 (Fig.96-14) やGCS-L3-28 (Fig.96-32) などと同類である。こうした類似例より、LBはCSTとGCSに時期的に重なりと判断する。

h ザックズン (Rạch Rừng : RR) :Fig.93

CSTやGCS との類似資料を指摘できる。

RR90-1 (Fig.93-1) もCST期のP2L14-50 (Fig.101-1) と同類である。RR96-2 (Fig.93-25) は、CSTIV期のP1L4-F (Fig.101-40) と同類である。RR90-45 (Fig.93-16) の重複V字状文は、CST III 期のP2L6-300 (Fig.101-21) やGCS-L7-12 (Fig.94-23) の文様と同じである。RR96-4 (Fig.93-22) はGCS-L5-14 (Fig.95-22) と同類である。RR90-10,28,36,46 (Fig.93-12,11,14,13) は、GX-10,14 (Fig.93-42,30) との、文様や形態の共通性を指摘できる。

i ソックチュア (Độc Chùa : DC) :Fig.98

DC-H1L4-17 (Fig.98-13) 例は、CSTIV期のP2L2+L3-146 (Fig.101-28) に類似している。文様拓本 (Fig.99-40,41) は、GCS-L2-22 (Fig.97-24)、GCS-L4-12 (Fig.96-14) と同類である。DC-H1E5-2 (Fig.98-25) は、GCS-L4-16 (Fig.96-12)、DC-H1E6-1 (Fig.98-24) はGCS-L3-3 (Fig.97-6) に類似する。DC-L5-24 (Fig.98-16) はGCS-L2-20 (Fig.97-22) に形態的にやや類似している。DC-H1L1-9 (Fig.98-27) もGCS-L5-11 (Fig.95-21) に形態的に近い。

j ゴーカイトウン (Gò Cây Tùng : GCT) :Fig.111

ロンアン省の遺跡、特にCSTとの類似点を多く指摘できる。

GCT95-H2L8-303 (Fig.111-3) とGCT95-H2L7-279 (Fig.111-2) は、CST I 期のPIL20-6 (Fig.101-3) に類似し、GCT95-H2L5-190 (Fig.111-7) 、GCT95-H2L4-128 (Fig.111-11) 、GCT95-H2L6-? (Fig.111-5) もCST I 期のP2L14-50 (Fig.101-1) に類似している。また、GCT95-H2L6-250 (Fig.111-6) の口縁形態は、CSTIV期のP2L2-100 (Fig.101-35) のそれに類似している。GCT-H2L5-152 (Fig.111-24) は、CSTIII期のP2L5-225 (Fig.101-25) と類似している。GCT95-H2L5-195 (Fig.111-1) は、CSTIV期のP2L2-100 (Fig.101-35) に類似している。GCT95-H2L6-232 (Fig.111-23) は、CSTIV期のP2L2+L3-139b (Fig.101-36) に形態的に類似する。GCT95-H2L5-161 (Fig.111-6) は、CSTIV期に類似例がある (P2L3-101:Nishimura 2003:131) 。GCT95-H2L8-296 (Fig.111-19) の口縁は、CSIII期のP2L6-300 (Fig.101-21) に類似している。また、GCT95-H2L4-110 (Fig.111-10) は、GCS-L4-24 (Fig.96-15) に口縁形態が類似している。以上から、GCTにはCSTと重なる時期が存在することが理解できる。

k スオイチョン (Suối Chồn) :Fig.107

SC78-M2-1 (Fig.107-9) は球形壺棺葬から出土したものだが、SC7911-2 (Fig.107-7) の類似器形のものとする。また、SC78-M3-2 (Fig.107-11) とSC78-M3-1 (Fig.107-13) と有角瑛状耳飾り (Fig.107-13) は、球形壺棺葬のなかで共伴関係にある。また別の球形壺棺葬から出土したSC-GM-1 (Fig.107-16) はSC78-58 (Fig.107-15) と同器形にあることが理解できる。

SC78-M3-2 (Fig.107-11) は肩部に縄蓆文地文上に波状沈線が施されており、モチーフとしてはGCS-L3-35 (Fig.97-14) と同類である。SC78-B-4 (Fig.107-12) やSC78-C4-91 (Fig.107-14) は、DC-H1L1-6 (Fig.98-8) やLBのFig.100-19,25などと形態的に共通している。SC-179 (Fig.107-2) は、GCS-L7-6 (Fig.94-24) やLBのFig.100-14と同類である。SC78-B-3 (Fig.107-3) はGCS-L1-3a (Fig.97-48) と同類である。幾何学叩き文様SC7911-1 (Fig.107-1) は、GCS-L3-34 (Fig.97-2) やGCS-L4-20 (Fig.96-7) に通じている。SC78-A-1 (Fig.107-10) は、DC-L5-24 (Fig.98-16) やGCS-L2-20 (Fig.97-22) と形態的共通性を指摘できる。

l ブンシン (Bưng Sinh : BS) :Fig.112

銅鼓Phú ChánhIII号鼓 (PCIII) と2000年の発掘時に出土した2,4,5号墓 (M2,M4,M5) の共伴土器を資料化した。胎質はゴーオーチュアのもので非常によく類似している。器種としては小壺、縄蓆文釜、高坏類が確認できる。ここでは、ゴーオーチュア (GOC) との比較を行う。高坏は大型と小型品がある。BS00-M2-5 (Fig.112-4) は、GOC97-H1L12-2 (Fig.102-12) より、GOC97-H2L4-100 (Fig.102-13) との類似度が高い。BS00-M2-6 (Fig.112-5) は類似形態のものとして、GOC97-H1L8-1 (Fig.102-6) 、GOC97-H2L4-1 (Fig.102-7) 、GOC97-H1L2-1 (Fig.102-8) を挙げることができるが、口縁形態はGOC97-H2L4-1 (Fig.102-7) との類似度が最も高い。PCIII-2 (Fig.112-17) も高坏口縁部と考えられるが、口縁の断面形態はGOC97-H2M4-89 (Fig.105-6) に類似する。BS00-M5-4 (Fig.112-14) は、条線が口縁内面に巡らされることを除けば、GOC-H1L10-1 (Fig.103-7) に口縁断面形態にやや類似する。

BS00-M2-3 (Fig.112-1) の口縁は、段階的に外反するように整形されているが、類似した口縁形態を GOC-97-H1L10-35 (Fig.103-35) に見いだすことができる。BS00-M4-3 (Fig.112-8) は、外反する口縁形態、頸部内面が尖出するような整形、口縁外面の斜線沈線文様が、GOC-H2M7b-99例 (Fig.105-1) と類似している。以上の比較から銅鼓に伴う土器群は、GOC最下層部と最上層部を除く中層時期のどこかで重なる考える。

また、Phú Chánh II 号鼓は、四乳四鏡と共伴している(Yamagata et al. 2001)。この鏡は岡村編年 (1984) では紀元前1世紀終わってから紀元後1世紀初頭に位置づけられている。銅鼓は現在まで、遺跡が分布する区域で4個が収集、発掘されているが (Phú Chánh I -IV号鼓)、それらは今村編年の第2期 (紀元前1世紀から紀元後1世紀) に位置づけられるものである。従って、当遺跡での銅鼓を含む木製甕棺葬を紀元後1世紀を中心とする年代範囲で納めてよいと考える。これはGOCの中層レベルの暦年代を考えるうえでも重要な参考資料となる。

V C14年代問題

Fig.114で掲げるようにいくつかの遺跡で、C14年代が測定されている。ただし、年代測定の背景を考慮しておく必要がある。CSTでは第1坑15レベル出土の炭化物を2つに半裁し、東京大学放射性炭素年代測定室とホーチミン市核利用センターの年代測定室で測定したところ前者が 2470 ± 90 BP、後者が 4100 ± 70 BPと測定された。当然、遺物の内容から後者の年代は受け入れがたい。

同様な問題はGOCでも、第1坑のレベル11の炭化物 (同一サンプルではない) が、Australian National Universityの放射性炭素年代測定室では、 2420 ± 70 BP(Nguyễn C.D.2000)、ホーチミン市核利用センターでは 1860 ± 60 BPとかなりかけ離れた年代値になっている。またブンバックでも、レニングラード大学での測定値とホーチミン市核利用センターの年代値がそれぞれのラボ単位である程度まとまりつつも、ラボ間ではやや食い違いの大きい結果となっている。筆者の採取したCSTのサンプル以外は、サンプルの出土脈絡、共伴土器、採取環境、保管状況などがの詳細情報は不明であるため、どのラボの年代が、精度が高いということは言明しにくい。後年、測定装置に不具合があることが明らかとなったホーチミン市核利用センターの年代は特に信用度が低いと考える。

VI 編年

上述のCST(コーソントゥ) 編年、GCV(ゾンカーヴォ) とGP(ゾンフェット) での編年観、GCS(ゴークアスー) やGOC(ゴークアチュア) の土器の変化、さらには各遺跡間の類似例を参照すると、以下のような編年観を設立することができる。

鉄器時代の初頭はGCSとCSTの並行関係より両遺跡の最初期に求めたい。またGCVもこれに並行しよう。GOC最下層もその可能性があるが、資料不足で確認できない。そしてCSTの分期区分に、GCSの各レベルとの共通資料、さらにはGCVタイプ1,2の出現関係を対応させることが可能となる。またGPタイプを基準とするGP期を、仮に鉄器時代の最終時期と位置づけておくが、これに並行する遺跡はGCV上層が確実な例である。ブンシンとGOC中層レベルの並行関係はある程度保証されるがGCV上層やGP下層との並行関係は、それ以前からの編年関係で判断するとそこに落ち着くといった

程度のもので、さらなる傍証を要する。ここでは上述の編年観より、CST I 期、GCS最下層、GOC最下層を鉄器時代初頭に所属していると判断する。

この編年に実年代を当てはめると以下のようになる。

新石器と青銅器時代の境はアンソンやブンバックのレニングラード測定年代を参考にすれば、BP3000前後に100年程度の含みをもたせるのが妥当であろう。青銅器時代と、筆者が仮定する鉄器時代（CST I 期、GCS最下層）の境はBP2500年に100年前後の含みをもたせてよいだろう。そしてゾンフェット（GP）期とGOC中層レヴェル、さらにブンシンの時期が重なることを仮定にした場合、ゾンフェット期を、ブンシンの鏡や銅鼓の年代から紀元後1世紀を中心とする年代に位置づけられ、継続するOc Eo（オケオ）文化の出現時期はそれ以降となる。

Table. 7 金属器時代遺跡編年表

	新石器時代	青銅器時代	?-----鉄器時代-----?					オケオ文化
			Phase I	Phase II	Phase III	Phase IV	Giong Phet	
Rach Heo		●						
Phu My		●						
Bung Thom		●						
Bung Bac		●						
Doc Chua	●	●	●	●				
Co Son Tu			Phase 1	Phase 2	Phase 3	Phase 4		
Go Cao Su			L9-L6	L5?	L4-L3	L3-L1		
Long Buu	●		●	●				
Go Xoai			●					
Suoi Chon	●	?	●					
Rach Rung	●	●	●					
Giong Ca Vo			GCV1		GCV2		Giong Phet	
Giong Phet							下層	上層
Go O Chua			?	1 坑の11,12 レヴェル 2 坑の7,8 レヴェル			Middle layer?	Upper layer
Da Kai	●							
Go cay Tung			●	●	●	●		
Bung Sinh							●	
Giong Am								●

VII 編年整備から生まれる新認識

a 青銅斧

フーミーでは両端が三角状に反り上がった短冊状斧形製品が出土している（Fig.115-1,2）。刃部と考えられる方に鑄造の湯口がついている。その反対側の両端は曲線状装飾に作出れ、動物が中央につけられているものもある。この形状のものは珍しいものであるが、ブントムでも似たような小形品の鑄型（Fig.115-12）が出土している。

ゾックチュア (Fig.115-19~22)、ブントム (Fig.115-12,13)、ブンバック (Fig.115-8~11)、カイヴァン (Fig.115-14,15)、スオイチョン (Fig.115-17,18)、ローガックで出土している青銅斧や鋳型には、着柄部に細い突帯がある。また、ブントム出土例では渦文の入ったものもある。ゴーカオスー出土 (Fig.115-25~27) やゴーオーチュア (1997年調査時表採) の鋳型例には着柄部に細い突帯は走っていない。コーソントウの鋳型 (Fig.115-26:Nishimura 2003a) も、着柄部に細い突帯の有無は分からないが、同形のものである。

また、近年、ゴーオーチュアの上層部で出土した青銅斧は上述とはさらに違うもので、青銅斧が鉄器時代以降も一定期間利用されたことが理解される。

b 鎌

ブントム (Fig.115-13)、ゾックチュア (Fig.115-20) で身が弧状に反ったものが出土している。弧の内側が刃部として機能するよう薄くなっているようだ。上記の刀身の反った鎌はカンボジアのO Pie Can (オーピーカン: Levy 1943) でも出土している。矛はゾックチュアでも出土している。かえしのついた小型槍頭はブンバック (Fig.115-10)、フーミー (Fig.115-4)、ゾックチュア (Fig.115-22) で出土している。その他、釣針 (カイヴァン: Fig.115-16左)、小型筒状製品 (ブンバック: Fig.115-8下とカイヴァン: Fig.115-16右) から出土している。鋳型は砂岩のような細かい粒質の石材を利用して、鋳型断面は、両面を鋳出面とするものと、片面を鋳出面とするものにより、形態が違い、前者は長方形に近く、後者は半月形に近い。両面利用のものはブンバック、ブントム、カイヴァン、スオイチョンに限られており、大量に鋳型が出土し、その未成品も確認されている。ゾックチュアには両面利用例は存在しない。これは鋳型を製作する石材の入手可能性に決定された現象であろう。

また、ゴーカオスーの鋳型はキメの細かい粘土を使った土製である。土製鋳型はここでしか確認されていない。刃部が扇状に広がっているものが多く、断面は長方形あるいは中央がやや張り出した六角に近いものが主である。また、ゾックチュア出土例 (Fig.116-7~9) とゾンカーヴォ出土例 (Fig.116-10,11) も、形態を異にしている。これらは刃部がより幅広くなり、着柄部に対し刃部の長さが小さくなっているものや全体が細長いものである。

以上をまとめると、鋳型や製品の形態より、フーミー、ブントム、ブンバック、カイヴァン、ゾックチュア、ゾックチュア、スオイチョンの共通性が浮かび上がってくる。ゴーカオスーやゾンカーヴォの鋳型や製品が、前述のグループとも違うことが理解できる。これらは土器の分析で結論したように、時期的 (青銅器時代と鉄器時代) な違いと考えられる。

c 石器

青銅器時代あるいはそれ以降の居住が確認されていない遺跡では、全く石斧が確認できない。これは、青銅器時代に入って、斧が金属にとって代わられたことを示しており、石斧が残存し使われ続ける北部ベトナムの金属時代とは異なっている。現在までのところ、青銅器時代に確実に利用されている石器は主として多器種である。それらは契、石環、そして磨石である。

契は、断面方形の石斧状の形をしており、これを石斧として報告している例 (Trinh S. 2001) もあ

るが、観察が不十分である。ブンバック (Fig.116-12~14)、ブントム、フーミーの遺跡で出土しているものは、どれも先端の刃部が意図的に磨きにより丸められており、石斧としては機能できない。上端部に叩きによる破損痕を留めており、契として利用されたと考えられる。

石環は、ゾックチュア (Fig.116-18,21)、ザックズン (Fig.116-15~17)、ブンバック (Fig.116-19,20) で出土している。ブンバックは石環の製作遺跡で、未成品が製作段階に応じて確認されている。これらの石環は断形が三角、長方形、D字状のものなどである。ただし、ゾックチュアのもものは、新石器時代のものも含まれている可能性がある。新石器時代のものとは確定できる資料がまだ少なく、これらの形態を両時期に分別するにはまだいたっていない。

磨石に関しては、形態的に規格性が弱く、筆者が北部でベトナムの新石器時代と青銅器時代の比較で行ったような硬度の比較など行わないと時期差を見いだすのは困難であろう。

契は後続の鉄器時代の遺跡では確認されておらず、青銅器時代独特の石器のようだ。また、石環も現在までのところ、半貴石やガラスなどのものしか鉄器時代の遺物は出土していない。従って、これらの在地の一般石材の石環も新石器から青銅器時代のもものと限定できよう。

d 玦状耳飾りについて

ゾンカーヴォ (GCV) の軟玉製双獣頭玦状耳飾り (Fig.108-15) が出土したH4M80号墓には、ゴーカーオスのレベル3より上層で出現する、刻線で簡略波状文を描きそのまわりを刻点で充填する文様をもつ土器 (Fig.108-14) が共伴している。この文様の類似例にはGCS-L3-23 (Fig.97-11) や GCS-L2-16 (Fig.97-36) などもあるが、GCV例の方が、充填が粗で波状文の形態も若干違うので、GCS例が先行すると考えている。また、GCVのFig.108-13例は、GPでも類似例があることから、報告者の認識でいけば、GCVの中でも最終段階、つまりGP期に所属する可能性が高いことになる。また H4M74CでもH4M80 (Fig.108-14) 例に文様が酷似した土器 (Fig.108-18) に双獣頭玦状耳飾り (Fig.108-19) が共伴している。

ところで、ドンナイ省のSuối Chồn (SC:スオイチョン) の球形甕棺墓SC78-M3例には有角玦状耳飾り (Fig.107-13) が出土しているが、この墓に共伴する土器 (Fig.107-11) は、縄蓆文の地文に単純な波状線を施しているもので、GCS-L3-35 (Fig.97-14) 例などに類例を求めうる。文様的には、SC78-M3 (Fig.107-11) 例の土器文様の方が、GCVH4M80 (Fig.108-14) やH4M74C (Fig.108-18) の文様例に先行すると考え、玦状耳飾りにも時間差があることが想定される。

ゾンフェット (GP) でも、軟玉製双獣頭玦状耳飾りと有角玦状耳飾りが出土しているが、これらがオケオ文化に相当するGiồng Am (ゾンアム) 段階のものでないとすればGP期に時期的に限定される (前者は球形甕棺葬より出土、後者は脈略不明)。さすれば、前者の双獣頭玦状耳飾り例は玦状部が角張っており、同様例はGCVにもある。また有角玦状耳飾りはガラス製で、有角部が長くなったものであり、形態的にもGCVやSCで出土している有角部の短いものとは異なっている。

以上の認識をまとめるなら、有角玦状耳飾り (有角部の短いもの) は、GCV2期あるいはGCSの上層部の時期に並行する可能性が高く、双獣頭玦状耳飾りや有角部の長い有角玦状耳飾りは、やや遅れてGP期に並行する可能性が高い。この編年認識は今村 (1987) の推測などとも一致する。この場合、

GCVでは、大量の双獣頭状耳飾りが出土しているが、有角状耳飾りは非常に少ないので、墓葬のかなりは最終居住期であるGP期のものである可能性が高い。この状耳飾りの編年認識は、ロンアン省の初期オケオ文化に所属すると考えられるGò Hàng（ゴーハン）出土品で、双獣頭状耳飾りの系譜に属す、金属製の単獣頭状耳飾り（西村1997b）の存在とも齟齬をきたさない。

また、この仮説で類推を重ねるなら、サーフィン系の状耳飾りが出現するのは、南部において筆者編年案の鉄器時代最初期ではない可能性があり、今後はCST I - II 期やGCV I 期とされる鉄器時代初頭に、甕棺葬やいかなる状耳飾りが存在したかを追求しなくてはならない。

e 埋葬方法

Bình Thuận（ビントゥアン）省のBàu Hòe（バウホエ）遺跡では、球形壺を使った甕棺葬が1984年の小規模発掘（Nguyễn D.T. 1985）で確認されている。ビントゥアン省以北から、フエあたりにかけては青銅器から鉄器時代にかけて甕棺葬が海岸部を中心に濃密に分布することが明らかになっており、サーフィン文化の伝統として捉えられている（Vũ C.Q. 1991）。ところで、この墓葬（76H2M3, 79H1M8）の副葬品として有翼戈（Fig.116-2,4）が出土しているが、全く同形態のものがビンズオン省ゾックチュア遺跡の土坑墓の上に土器や石を意図的に配した墓の副葬品（Fig.116-1,3）として出土している。

従って当時ビントゥアン省の海岸部とドンナイ川中流域では、墓葬方法が異なっていたことが理解できる。ゾックチュアの墓葬はゲアン省のLàng Vạc（ランヴァック）の墓葬方法（Imamura&Chu V.T. ed 2004）と通じるものがあるが、伸展葬土坑墓の一類として捉えてよいであろう。

土器編年から考えればゾックチュアの土器は新石器から鉄器時代初頭まで連続している。残念ながら上記墓葬に共伴した土器は明らかではないが、76H2M3では青銅器時代の石環が共伴している。同形態の墓葬では石器時代の典型的な青銅器（斧、矛）を共伴してるものもあるので、この類の墓葬が青銅器時代を主としたものであると判断してよかろう。石環の埋葬された伸展葬はヴァムコートイ川中流域のRạch Rừng(ザックズン)でも確認されている。石環の型式や存在年代から考えれば、青銅器時代の墓葬と判断可能である。

そして、鉄器時代になると、ドンナイ川上流からホーチミン市周辺の海岸遺跡にかけて球形壺を利用した甕棺葬が多く確認される。具体的にはスオイチョン、ゾンカーヴォ、ゾンフェット、ダカイ、Dầu Giấy（ダウザイ）などである（Lê X.D. et al.1991）。従って、ドンナイ川流域では青銅器時代から鉄器時代にかけて墓葬伝統が、がらりと変わっていることになる。これは前述の中部サーフィン文化の影響抜きには説明できない現象である。ドンナイ川流域の甕棺葬でも中部サーフィン文化に頻出するものと同類の状耳飾りも出土している。もちろん土器の文様や器形などは前段階の青銅器時代から系譜をたどれるものがあることは前述してきた通りである。しかし、在地伝統にない土器文様も新出している。また、状耳飾り自体サーフィン系のもの以前に位置づけられるものは、当地域には全く存在しない。従って筆者は、状耳飾り使用や墓葬伝統を含むサーフィン文化が南部ヴェトナムの東部地域に何らかの方法で南下したことを想定する。具体的にサーフィン人が南下移住し、在地の人たちと新たな文化伝統を創出した可能性もあろう。

ただし、鉄器時代やそれ以降、球形壺を利用した甕棺葬が南部ヴェトナムで均質に行われていたと

いう安易な結論には達しない。鉄器時代あるいはそれ以降の南部ヴェトナムには上記以外のの墓葬方法も存在している。

一つは、伸展葬の土坑墓である。メコン河主流右岸域にあたるAn Giang（アンザン）省のゴーカイトゥンでは伸展葬土坑墓の集団墓が出土している（Tống T.T.&Bùi M.T. 1994）。共伴土器からCST並行期と判断される。また、ゴーオーチュアのH2地点の中層から上層にかけても出土している。また、同遺跡のH1地点では、上層部で方形土坑の中に寸胴深鉢や各種壺、釜形土器を埋納した遺溝が確認されている。人骨の確認はされていないが、埋納品の出土状態より、墓葬である可能性が高い。また、ビンズオン省のPhú Chánh（フーチャイン：Bùi C.H.2004）では、近年、木製の甕型容器を利用した甕棺葬が出土している。注目されるのは、この甕の上に、ヘーガーⅠ式銅鼓を蓋のようにして正置している墓葬が含まれていることである。前述したように、銅鼓は現在まで4個が収集、発掘されており、銅鼓型式や共伴鏡、土器などから紀元後1世紀が、これらの墓葬にふさわしい年代と考えられる。従って、筆者がGiong Phet（ゾンフェット）期と設定した鉄器時代からオケオ文化への過渡期において、メコン本流域からヴァムコータイ川上流域とドンナイ川中流域では別個の埋葬伝統が存在したことが理解できる。おそらく銅鼓を含む木製甕棺葬はドンナイ川流域の鉄器時代の甕棺葬伝統の継続として理解してよい。ゾンカーヴォでも土器の球形壺を利用せずに甕棺形に土坑が掘込まれていたものが確認されており、木製甕棺を利用していた可能性もあろう。

従って、ドンナイ川流域では甕棺葬伝統が続き、ロンアン省西部を含むメコン河流域（河口部域や沖合の島嶼部は違う可能性あり）では伸展葬伝統が続いていると判断される。これは文化の地域性と言い換えてよく、互いにかなり文化的に異質な集団であったと推定される。

第7章 紅河平原域の集落分布変遷とその背景

A はじめに

第3章と4章で叙述した編年に基づいて、紅河平原の遺跡（西村・西野2003）の時期区分を行うと、Fig.117からFig.120のような分布図ができあがる（西村2003b）。それぞれの分布には明瞭な差違をみることができるので、その解釈を行ってみたい。また、Table 8(P.141) は、各省別の時期別遺跡数、Table 9(P.142) は、各省の高度別遺跡数頻度を示してある。

B 旧石器時代からホアビニアン時代

Fig.117に図示したように、ソンヴィアンの遺跡は紅河平原域の河岸段丘・扇状地複合地帯に分布している。最も多く分布が集中するのはフート省の紅河とロー川が合流する河岸段丘地帯である。分布の最南端はハノイ市Đông Anh（ドンアイン）県Cổ Loa（コーロア）城址内のXóm Cừu（ソムキュー）遺跡とĐường Cẩm（ドゥオンカム）遺跡で、その標高は10-20mの間に納まっており、海拔標高の上でも当遺跡は最も低い位置にあると考えられ、段丘形成の年代が理解できれば、議論の多いソンヴィアン石器群の年代理解の一助になるであろう。また、この石器群遺跡の分布はQ1-Q3とされる更新世に形成された河岸段丘の分布と重なっている。因みに、研究対象域のなかで、当石器群に同定可能な洞穴遺跡は全く確認できない。

ホアビニアンに関しては洞穴・岩陰遺跡しか当地域では確認できない。唯一、カイベオ最下層の無土器文化層が、ホアビニアンやバクソニアン等の更新世末か完新世初頭礫石器群の可能性があるが、資料の公表が無く判断が不可能である。BP2-3万年程度しか遡らないホアビニアン石器群と、それ以前のソンヴィアンの間には、洞穴と開地といった遺跡立地の違いが存在する。この違いが何に起因するのかはよく分からないが、中国南部を含めた東南アジア大陸部で、BP3万年前後を境に洞穴居住が各地で確認され、逆に開地居住遺跡（あるいは開地礫器製作址）の確認例が非常に少なくなるのが一般的傾向である。もちろんホアビニアン期や並行する石器群時代の居住が洞穴のみで行われたわけではない。洞穴以外の居住地は居住痕跡が非常に見つかりにくく、礫石器群の場合、礫が集中する河岸段丘が礫石器製作の地として多く発見され、その中でも相対的に古い時期のソンヴィアン石器群の遺跡は段丘上位部の発見されやすい所に位置している結果を反映していると考えべきであろう。

この場合、完新世の開地遺跡が礫の多く分布する新しい時期に形成された低位河岸段丘に見つかるといえる。もし、ソンヴィアンの遺跡のように河岸段丘などの開地遺跡も相当数存在するならば、洞穴遺跡の多寡は人口数や遺跡の利用パターンにおいて、ホアビニアンとソンヴィアンの間には明瞭な差が生じていると考えた方がよい。

またハロン湾最南端のカットバー島（ハイフォン特別市）では洞穴遺跡で、若干の打製石器と共に淡水産巻き貝と陸産巻き貝を中心とする貝層が確認されている。これらの遺跡はその文化遺物の少な

さから、年代や文化判定が困難であるが、同じハロン湾北部の洞穴遺跡等で確認されているSoi Nhự (ソイニユ) 文化と同質と考えられている(例: Hà V.T.ed.1998)。出土する貝種の生息域問題は、最初にサーベイを行ったAnderson (1939) が認識していたことだが、これらの遺跡には現海岸線に近接した遺跡が多く、出土する貝種が淡水産と陸産が主をなすということは、海岸線がはるかに離れていた時期の所産と考えなくてはならない。従って最終氷期前後の海退期に形成された貝層がとなり、明らかに新石器以前のホアビニアン等の礫石器インダストリーに並行する時期と考えてよい。問題は文化遺物において、ホアビニアン等と類似性が見だしにくいことにある。当地域は礫石器製作に適した礫もなく、石器も石灰岩などが主のようで、定型的石器がより製作されにくい環境に適応した石器文化と見なさねばなるまい。

C 前期新石器から後期新石器時代

前期新石器時代 (Fig.118) の開地遺跡は、カットバー島やニンビン省Yên Mô (イェンモ) 県などの海岸部でしか発見されていない。この傾向が遺跡分布の真の傾向かどうかは発見遺跡数の数が少ないため、簡単に判断は下せない。しかし、山岳部のホアビニアン石器群が出土する洞穴やカットバー島の山間部に属する洞穴・岩陰、さらにはナムディン省Vụ Bản (ヴバン) 県のLò (ロー) 洞穴遺跡 (Nguyễn Q.H.1999: 疑問ながらも局部磨製石斧が出土しているので、前期新石器段階も存在したと判断) で、同時期の遺物が確認されている。出土する貝が汽水、海水産のものが多く、淡水貝がさほど多くないことを考慮するなら、海岸資源利用により重きを置いた資源開発・居住パターンであったと想定してよい。農耕開始期前後の小型生物資源集中開発の結果と考えられる(西村1994)

後期新石器時代 (Fig.118) になると海岸部のみならず山間部から中遊域にかけての平原域の高位部でも遺跡が出現する。最も確認遺跡数が多いのはフート省であるが、ハータイ省、ヴィンフック省、ハノイ市、バックニン省の一部まで分布域が連なっている。前期新石器と比べ、フート省などの段丘・扇状地複合地帯が突然のごとく、活発かつ大規模に利用されている。この背景には、狩猟採集だけでなく、農耕を完全に組み込んだ生業への変化があったはずである。後期新石器時代の土器や石器のバリエーションはそのことをうなずかせるに十分のものをもっている。炭化米は一部、後期新石器時代の遺跡で確認されているし、後続の金属器時代になると確認例も増加するから稲作が生業の一部であったことは間違いない。問題は農耕に水稻耕作や焼畑耕作がどの程度組み込まれていたかであろう。段丘・扇状地複合地帯が活発に利用されるには、水稻耕作と同時に陸稲などの畑作も存在したと考えた方が理解しやすい。時代はさらに下って、鉄器(ドンソン)時代のLàng Vạc (ランヴァック) 遺跡は、ゲアン省の段丘・扇状地複合地帯に位置している。この遺跡の土製支脚の胎土からは稲と共にモロコシやハトムギなどの畑作種の雑穀が確認されてる(Hori&Miyamori 2001)。単純な比較ではあるが、ランヴァック周辺の地形は前述の段丘・扇状地複合地帯によく類似している。前期新石器時代の生業のなかに、現在の山岳部に見られるような雑穀と陸稲を合わせた焼畑農耕なども存在したと想定する必要がある。

フンイェン省ハイズオンやハーナム省、そしてハイフォン市の低地では全くこの時期の遺跡は存在しない。これは当時、このあたりがまだ汽水であられるような低湿地であったため、居住可能範囲

に含まれなかったのが主理由と考えられる。しかし、ナムディン省やニンビン省の低地では同時期の居住遺跡が数は少ないが確認されている。これは山脈や残丘の裾、あるいは海岸近くの砂礫を利用した結果である。また、ハイフォン市沖のカットバー島でも多数確認されている。こうした海岸付近の居住痕跡は、前期新石器に引き続き海岸資源に依存した居住がある程度活発であったことを理解させてくれる。

D 青銅器時代から鉄器時代

後期新石器時代から青銅器時代になると海岸部での居住遺跡が大幅に減少する (Fig.119)。また、後期新石器時代の遺跡が多いフート省、ハータイ省でも減少している。さらに、興味深い現象としては紅河本流からĐuống (ドゥオン) 川にかけての北岸では後期新石器から青銅器時代にかけて連続して居住されている遺跡が多いことである。これらの事象は石器から金属器への転換に関係している現象ではないかと考える。周知のように紅河平原域内では、沖積平野であるがゆえに青銅器の素材は全く存在しない (Pl. A)。銅、錫の資源は、近いところでは紅河平原に北接するタイグエン (Thái Nguyên) 省やバックザン省やタインホア省の山間部にしか存在しない。従って、青銅器製作にあたって素材を紅河平原の外域から移入せねばならないことは明らかである。

これに比べ、前段階の新石器時代には、フート省 で若干の石器製作遺跡も確認されているし、石材調達地がその周辺地であろうと考えられている軟玉等の石器製作遺跡も紅河平原内域 (ハイフォン市のチャンケン、バックニン省Bãi Tụ (バイトゥ) 遺跡などで確認されている (Nguyễn K.D.1996)。従って、利器等が石器から青銅器に置き換わり始めるフングエン段階からドンダウ段階にかけての移行期には、素材供給の条件面で大きな変化があったと考えられる。そして、金属器素材入手条件は前時代の石器のそれほど容易ではなく、金属器への置換を一度に押し進めるというようなものではなかった。石斧などは大型品を中心に依然として使用され続けている。そして、この入手条件は集落の位置選定にも影響したはずである。つまり金属素材流通のネットワークからはずれるところは放棄された可能性が考える。

後期新石器段階 (フングエン期) から青銅器時代 (ドンダウ期) にかけて連続して居住されている遺跡がいくつか存在している。標識遺跡のドンダウ遺跡が位置するヴィンフック省南域、ハノイ市ドンアイン県、バックニン省Từ Sơn (トゥーソン) 県などにそうした遺跡が集中する傾向がある。しかも、それらはHoàng Giang (ホアンザン) 川、Ngũ Huyện Khê (グーフエンケー) 川などの川岸に立地している。水上交通が主要運搬手段であったと考えられる当時において、河川近くに遺跡が立地していることは理解しやすいところだが、恐らく石材・金属器素材両方が入手しやすい条件が新石器時代から金属器時代にまたがって居住を存続させたものと考えられる。このような現象は当地域に限ったことではなく、ヴェトナム南部の新石器時代から金属時代にかけても看取できることから (Nishimura 2002a)、地域を問わない、かなり普遍的な現象であったと考えられる。

青銅器時代 (ドンダウ・ゴームン段階) から鉄器時代 (ドンソン段階) になると前時代に比べ、低地への進出が明らかとなる。特にハータイ省南部からハナム省、ナムディン省にかけての低湿地帯 (氾濫原) での遺跡数が爆発的に増加している。この増加は汽水にあらわれるような低湿地が完全

に陸化し、居住可能面積拡大による遺跡の自然増加と結論できるような増加レベルではない。後期新石器時代、青銅器時代、そして鉄器時代にかけての遺跡分布範囲とその数の変化を見れば、鉄器時代の居住範囲が爆発的に増加し、面積的にも極端な広がりを見せていることから納得できる。ではその爆発的な低地・低湿地への居住域拡大はどんな理由に基づくものであろうか。

桜井（1979,1987b）は、紅河平原域の水稲耕作史を考察するにあたって、稲の作付け選択が水経注などの古い文献に記載されていることに注目した。そして先史時代の遺跡分布状況からドンソン時代において夏期は高みを除いて水没してしまう低湿地帯の居住を可能としたのは、冬期栽培が可能な冬春稲が存在したからであろうと推測し、ドンソン時代に作付け選択が行われた可能性を指摘している。ただし卓見である。そうすると、青銅器時代から鉄器時代にかけて、作付け選択が稲作技術に加わり、低湿地居住を可能にした可能性が高い。

この時代において海岸の居住域はハイフォン省、タイビン省、ナムディン省を結ぶ地帯に到達している。しかしフンイエン省やハイズオン省の南半部などは未居住地帯が多い。これはデルタ形成にあたってこの時代はまだ陸化した部分の少ない、居住不可能なほどの大低湿地帯であったのではないだろうか。

また、鉄器時代以降の遺跡は墓葬遺跡での確認が主となってくる。これは金属器などをふくむ副葬品のまとまった発見の多いことが主理由と考えられるが、現在の集落下に、この時代以降の居住を含む遺跡文化層がしばしば眠っており、その後の連綿と続く居住文化層、特に近世以降の盛り土等による居住域拡大（Nishimura&Nishino2002）のため、遺跡形成初期の文化層がなかなか確認されにくいことが一つの原因と考えられる。

E 1世紀から3世紀

墓地遺跡を中心とした紀元後1世紀以降の資料と、居住地と墓地両方を併せた先史時代の資料を単純に比較することは慎まねばならないが、居住範囲の比較のための一判断材料とはなり得よう。また、集落遺跡がほとんど確認されていないのは前節で述べたように、該当する時期の文化層が現在の集落下にある場合が多いためであろう。このことは、当地域で初期歴史時代から現在まで連綿と居住活動が同じ場所で連続している可能性を示している。

この時期の遺跡分布（Fig.120）はかなりの広範囲にわたっている。特に、前時代に比べ紅河平原の下流域（ハイズオン、ハイフォン、タイビン、ナムディン各省）での分布拡大が目立つ。これは当時の社会経済的状況を考えれば理解がしやすい。漢代以降活発化した中国と南海諸国、あるいは西方諸国との交流・交易は沿岸航路を中心としたもので、各地に中継地を必要としている。特に、広州から南海へ向かうには雷州半島の徐聞や合浦、そして交趾郡や九真郡などの中継地を経ていく必要があり、交趾郡はその一つの核地域として重要であったようだ。具体的歴史現象としては2世紀末から3世紀初頭に交趾郡太守として独立国的勢力を振るった士燮の存在やほぼ同時期と考えられる仏教伝来などを挙げることができる（後藤1975、西村2001）。物質文化の上でもこうした域外交流を反映するものが確認されている（西村同上）。漢系の墓葬はこうした交易・交流を担った人々が残したものと考えれば、低湿地の川岸近くなど、水上交通の便がよい所に多くが立地していることに納得がいく。

この現象は紅河平原に限ったことではなく、中国側と通じる古来からの水上交通ルートであるハロン湾（Đỗ V.N.1972）や南接するタインホア省（例 Lạch Trường・Janse 1947）やメコンデルタ（Malleret 1959,1963）、合浦などでも看取できる当該期沿岸部の普遍的現象である。また紅河平原域のへそとも呼ぶべきバックニン省を中心に多くの遺跡が集中している。これは紀元後2世紀以降、交趾郡郡治であった龍編（Long Biên：ロンビエン）がルンケー城（バックニン省トゥアンタイン県：通称 Luy Lâu（ルイロウ）城）に位置していたことを考えれば理解しやすい（西村2001, Nishimura 2001）。

逆に前時期に比べ、遺跡数が減少しているところもある。前述したようにハータイ省南部からハーナム省にかけての低湿地帯はドンソン期の遺跡が多く分布しているが、後1-3世紀の墓葬や居住遺跡の確認例は非常に少ない。このことは当地域が後1世紀以降、居住地として利用されることが減少したことを意味するのではない。確認されている墓葬はすべて磚室墓と考えられ、もし、それらが漢系文化を担う人々が残したものと仮定すると、漢系の人々はこうした低湿地に住み着くことは少なかったと考えられる。一步想像を進めるなら非漢系文化、つまりは在地の文化を担う集団がまだ漢化せずに居住していた可能性さえあろう。

F 漢代の郡県制の空間について

前漢代のBC110年に交趾郡10縣が設置され、羸饒、安定、苟漏、麋泠、曲陽、北帯、稽徐、西于、龍編、朱鸛の縣名が列挙されている（『漢書28下地理志』）。そして、後漢代には、『後漢書23郡国志』によれば、龍編、羸饒、安定、苟漏、麋泠、曲陽、北帯、稽徐、西于、朱鸛、封谿、望海となり、西于より分割設置された封谿と望海の2県が増えて（AD 43年）、計12縣となっている。縣の位置比定においては『水経注』37葉榆水条が主たる文献資料であり、これに『元和郡縣図志』と『太平寰宇記』が地理的情報を与えているに過ぎない（桜井1979）。そして、各縣の位置比定に関して、文献史学、歴史地理学より、様々な意見（Maspero 1910,1918, Madrolle 1937, Trần Q. V.1959,2001, Đào D.A.1964, Đinh V.N.1973ab,1977, 桜井1979）が提出されているが、縣比定において、完全に一致を見るのはCố Loa城が位置した封谿縣だけである。筆者は文献資料を詳しく扱う立場にないので、ここでは考古学資料とそこから導かれる仮説に基づいて、空間的限定をおこないつつ、位置比定のための予備的議論を行う。また、桜井（同上）が行った各縣比定の議論はそれまでの説を再検討しつつ、地理的知見を十分に検討した解釈なので、本議論でも再検討の基礎とする。

紅河平原全体を俯瞰したときに、磚室墓を中心とする1-3世紀の遺跡分布（Fig.121）は、いくつかの分布のまとまりが存在することに気づく。

上流から下流にかけて、順に挙げると、1:フート省南部、2:ヴィンフック省南部、3:バックザン省南東部、4:コーロア城周辺から Tiên Sơn（ティエンソン）県にかけての Hoàng Giang（ホアンザン）川沿い、5:ハノイからハードン市周辺域、6:バックニン省Đuống（ドゥオン）川南岸ルンケー城周辺、7:ハイズオン市周辺、8:ハーナム省北部、9:タイビン川（旧 Bamboo 運河）沿いのハイズオン省南部とタイビン北部、10:ハイフォン市北部からクアンニン省南部にかけての Kinh Thầy（キンタイ）川下流、11:ナムディン川右岸のナムディン省 東南部などが、分布の大きなまとまりとして認識できる。

既稿（西村2001）で論じたように、ルンケー城は後漢以降の交趾郡の郡治、龍編城（Long Biên）に同定可能である。前述したように、この城址周辺の磚室墓群は、郡治である龍編に関係した人たちの墓であろうから、他の墓群や城址も交趾郡の各県を中心に対応する可能性が高く、各県の比定はこうした考古学データの分布論を根拠の一つにする必要があろう。

ところで、当該期に比定できる城址は、後漢代以前に建設され、後代に再利用された可能性を残すコーロア城を除いて、Mê Linh（メーリン Phan Đ.D. 1973）、Quên（クエン Đỗ V.N. 1970）の2城がある。メーリン城はヴィンフック省Yên Lãng（イエンラン）県Mê Linh（メーリン）社のHạ Lôi（ハロイ）村に位置しており、南には紅河本流が流れている（Phan Đ.D. 1973）。徴姉妹を祀ったđền（神社）があり、当城址は紀元後40年に徴姉妹が義挙した際に、最初に攻め落とした麋泠縣の城であると考えられている。城壁は二重であったようで、外壁は壁高1.8m、壁のすそ幅4.6m程度のもので、内壁との間はわずかに2.65m程度しか離れていなかったとされる。城郭の規模は破壊が進んでいたため、詳細は不明だが、正方形に近く、面積が36000㎡あったとされており、一辺の長さが190m前後となる。土塁からコーロア城やルンケー城で見つかるものと同類の瓦が見つかったから、紀元前1000年期末から後1000年紀初頭の城堡であったことは間違いなからう。クエン城はハータイ省のQuốc Oai（クオックオアイ）県Liệp Tuyét（リエップトゥエット）社Đại Phù（ダイフー）村に位置し、西側には、下流でダイ川に合流するTích（ティック）川が流れている。残存の程度はよくないが、一辺170m、高さ1.5-2mの土塁が隅丸方形をなしていたようだ。十二使君時代（10世紀後半）の杜景碩（Đỗ Cảnh Thạc）の根城とされているが、土塁からコーロア城やルンケー城と同類の瓦類や後漢代と考えられる土器片が確認されており、城郭建設が少なくとも後漢代にまで遡るのは確実である。これらの2城はいずれも漢代にまで遡ることは確実であるから、ルンケー城やコーロア城同様に、縣城の候補になりうる存在である。特に前者を麋泠縣城と考えることに位置的には異論はないのではないかな。

また近年の磚室墓公表資料（ハータイ省Hoài Đức（ホアイドゥック）県Yên Mả（イエンマー）遺跡:Bùi V.L.&Trịnh C. 1993）のなかに、義熙七年（411年）の紀年磚共伴が報告されている。その銘文内容によれば、被葬者は411年の廬循反乱の鎮圧に関係した交趾朱鷲縣の人で、杜氏の姓を有した人の可能性が高い⁽¹⁾。廬循の反乱を鎮圧した交州刺史の杜慧度は朱鷲縣の出身で、父の代から交趾太守を務めており、杜慧度の子、杜弘文も交州刺史を務めており、交州の土豪的勢力を持っていたことが伺える。従って、被葬者が杜慧度にまつわる人なら、イエンマー磚室墓の造営地が朱鷲縣であることも納得できる。当遺跡はハードン市から西に5kmのところに位置し、磚室墓の分布グループとしては5のグループに属する。桜井（1979）は朱鷲縣はハードン市周辺に位置比定しており、当縣の比定については、確実性が非常に高いと考えてよい。この遺跡よりさらに西北西約10kmには先述したクエン城がある。当城址はダイ川に注ぐ支流沿いに位置しており、桜井らが比定する帶江水（Đáy川）が流れる苟漏縣の縣城の候補になりうる位置である。

望海縣に関して桜井（同上）は、「北二水左水、東北逕望海縣南...又東逕龍淵縣北、又東合南水」という記述と、当縣が封谿縣と共に、西于縣より分割して設置されたこと、交趾郡北界に位置した扶巖究という未支配地の記述などから、Cầu（カウ）川上流域、つまりバックザン省南西域あたりに比定している。バックザン省南東域は磚室墓の比較的密な分布域であるため、この理解は妥当かもしれない。この場合、龍淵縣北部はカウ川とドウオン川を含む現バックニン市からQuế Võ（クエ

ヴォー) 県あたりとなり、龍淵(龍編) 県南部がルンケー城の位置するトゥアンタイン県となり、龍編県は現在のバックニン省とかなり重なりをもつことになる。

ここまでで、位置比定問題を振り返ると、桜井説は紅河平原上流域においてはかなり卓見を披露していたことが理解できよう。問題は下流域である。

ルンケー城が羸婁城でないとすると、羸婁県はどこかが問題となる。羸婁から龍編に郡治が遷るのは、後漢の交趾郡太守、周敞の時(142-144年頃)と、『太平寰宇記』に記されている。ルンケー城の発掘では城郭建設は紀元後2世紀半ば前後と考えられる(Nishimura 2002)。従って、前漢代から後漢のある時期までに郡治として機能した羸婁を支えた実体が考古学的に確認できる場所を探さねばならず、具体的には前漢から後漢前半並行期の遺跡が多く確認される場所である必要がある。紅河平原域において、前漢並行の漢系遺物群は実はさほど多く確認されているわけではない。これは、前漢代の漢系遺物に対する認識不足とドンソン文化に対する優先感情が一つの原因と考えられるが、後の時代と相対的に規模的にも小さい墓葬など、複数の条件が認識を弱めていると考えられ、今後の資料の増加を待ちたい。

ところで、Trần Q.V. (1959) は『漢書地理志』の”羸婁有羞官”という記述に注目し、羞官は南越代からの官制の残りではないかと考え、羸婁が南越時代から継続した中心だったのではないかと鋭い推測を述べている。推測の是非はともかく、近年、吉開(1998b) が論証するように、南越の官制や地域呼称が北部ヴェトナム平地部に及び、それが前漢の郡県制に連続している例があるのだから、郡治になるような所はそれ以前から、何らかの中心的なところでなくてはなるまい。

この仮定の下で遺跡分布やその内容を再び眺めると、前述の7:ハイズオン市周辺や11:ハイフォン市北部からクアンニン省南部にかけてのKinh Thầy (キンタイ) 川下流などで、紀元前後1世紀頃の漢系木槨墓や、それ以前の漢系遺物をともなった木棺墓なども多く発見されている事実気づく。こうした、中国側に陸接する紅河平原北東域が、前漢並行期に他地域より早く漢系遺物を多く受け入れていたことは、地理的観点から不思議ではない。また、キンタイ川沿岸のヴェトケー木棺墓遺跡(VBTLSVN 1965) では100点を超える青銅器が埋葬されたドンソン文化期最大の副葬品量を持つ墓も発見されている。その中には、石塞山型銅鼓、ドンソン型青銅提筒、越式鼎といった普遍的には出土しない青銅器が多く含まれており、被葬者が当該期の社会において相当有力な位置を占めていたことを想像させる。当墓葬は紀元前3世紀頃に位置づけられ、ドンソン文化期からすでに階層がかなり分化・発達した社会が成立していたことを理解させてくれる。こうした考古学的現象より、当地域に前漢並行期から郡治レベルの中心があったことは十分に考えられ、羸婁縣はハイズオン省からハイフォン市あたりにかけて存在したと推測する。

再び『水経注』の解釈の問題に戻る。

「水自麋泔県東、逕封谿縣北...又東逕浪泊...又東逕龍淵(編) 縣故城南、又東左合北水...其水逕曲易縣東流注于浪鬱」の一文から、龍編縣を抜けた川が曲易縣を抜け浪鬱(海)に注いでいると桜井は解釈している。ルンケー城を基準にするなら、バックニン省東端の六頭江(現在、トゥオン川、カウ川、ドゥオン川が合流するPhả Lại (ファーライ) 周辺) を抜けて、キンタイ川からハロン湾に注ぐルートがそれに相当するのだろうか。そうすると曲易縣はハイズオン省北部あるいはバックニン省東端からクアンニン省北部あたりとなる。

次に「其次一水、東逕封谿縣南、又西南逕西于縣南、又東逕羸隴縣北、又東逕北帶縣南、又東逕稽徐縣、逕水注之。水出龍編縣高山、東南流入稽徐縣、注于中水。中水又東逕羸隴縣南」の解釈が問題となる。桜井（1979）は封谿縣をハノイ市ドンアイン県コーロア城址周辺、バックニン省トゥーソン県周辺を西于縣、トゥアンタイン県を羸隴縣、Quế Võ（クエヴォー）県周辺を北帶縣、六頭江と呼ばれたファーライ周辺（バックニンとハイズオンの省境）を稽徐縣と解釈しているが、当然、羸隴縣以下、大きなずれが生じることになる。封谿縣南をコーロア城周辺とし、遺跡分布図を参考にすると、西于縣南を現ハノイ市中心域やGia Lâm（ザーラム）県からHung Yên（フンイエン）省北部に、羸隴縣北をハイズオン市周辺、北帶縣南から稽徐縣をハイズオン省西部からハイフォン市あたりに比定するのが適切なものかもしれない。後半の記述はバックニン省の残丘群から派生した水流が稽徐縣に流入し、中水に流れ込み、羸隴縣の南にも流れていると理解すれば、稽徐縣は龍編縣と接するようにハイズオン省西側にまで張り出していたと考えなくては行けない。また中水を現タイビン川と考え、羸隴縣の南を現Luộc（ルオック、仏名バンブー運河）川流域という解釈も成立しうるのではないか。さらに「其水自縣東逕安定縣北帶長江」の解釈に関して、ルオック川が紅河に接続することを考えれば、帶長江を紅河本流としてもいいのではないか。そうすると安定縣は遺跡分布図の8や9のグループが位置するハーナムからナムディンあたりとなるのだろうか。

麋泠県に関しては封谿縣の西に位置するという解釈で動かないであろうが、その県域空間に関しては、分布図が語るようにフート省南部までを含めた紅河本流沿いのかなり大きく長細い空間を想定する必要がある。これは紅河本流の交通路としての支配が強く意識されているようだ。後に麋泠県は呉代に新昌郡として交趾郡から独立し、晋代には新昌郡は6縣に分割され、その中に麋泠県は名をとどめている。隋代には新昌郡は嘉寧と新昌の2縣に分割され、唐代の元和年間には峯州のもとに5縣となる（桜井1979）。この過程は漢代に郡県制の空間として辺境に位置した比較的大きな空間としての麋泠県が、より細かい区分を受けるまでに行政空間として充実化したことを示しているのであろう。現ヴィンフック省 南部には隋唐期並行と考えられる窯址などが分布しており、当地域に一定量の人口が居住していたことを語っている。

また、各縣の分布を紅河平原全体で見渡した場合、ハノイ市 周辺域からドゥオン川、さらには、クアンニン省南部やハイフォン市にかけての一带に集中していることがわかる。また、古城址の分布はハノイ市周辺に集中している。こうした分布様相は紅河平原の中原つまり、政治・経済的中心やその地理的偏りを表していると理解できる。

G 4世紀から9世紀

この時期の遺跡分布は前時期に比べ激減する（Fig.120）。その最大の理由は該当する磚室墓資料が激減するからである。このことは何を意味するのであろう。沖積平野において、居住可能域が物理的に縮小するということは海進による平野部減少や局地的な海岸浸食（春山2002）以外には考えにくい。当該期の分布を観察すると前時期に比べ、減少が明らかなのはクアンニン、ハイフォン、フート、ハナなど、紅河平原域のなかでも辺縁域である。ただ、タイビンからナムディンにかけては、数的減少をみせるものの、海岸へ向かった開拓限界の後退には至っていないようだ。

従って、この遺跡数の減少を単純に人類居住域の縮小に求めることは難しく、この場合、磚室墓が減少する文化的理由を考えた方がよい。当該期の前半である4-6世紀を、後藤（1975）は在地勢力の伸長期として描き、最後には李賁の一時的独立（万春国）に至ったと考えている。筆者も基本的には同じ考えであるが、その背景には単に紅河平原あるいは北部ヴェトナムでの在地勢力あるいは支配者側（六朝）に対抗する勢力の成長を看取するだけではなく、その成長を可能にした条件を読みとることが必要である。

前節の後1世紀から3世紀の叙述において、水上交通の活発化は低湿地の川岸や川口近くの活発な利用をもたらしたと述べたが、今度はその逆の傾向を想定する必要がある（西村2001）。つまり、三国時代以降、雷州半島の徐聞や合浦が振るわなくなる（楊1985）のと同様、紅河デルタ域が前時代に比べ磚室墓の大幅な減少が起きるのは、中継貿易地としての役割や魅力が減じられたからであろう。たとえば三国・六朝以降も中国の南海貿易の中心であった広州とその周辺では該期の磚室墓は依然として多く発見・調査され続けている。

これは楊（1985）が論じたように船足の短い大陸沿岸航路から、より長距離に航海する沖合のルートが可能になったことを示唆するのであろう。文献からの補強資料としては、5世紀初頭に広州とマラッカ海峡を商船で直接航海した中国僧法顕の例（Wang G. 1958）などが挙げられる。具体的航路としては海南島を中継地として、紅河平原沖を経ないで九真郡やさらに南の沿岸部へのルートへ移行したと考えられる。呉による海南島朱崖郡復活や広州刺史呂岱の南海宣化使節もこの脈絡で考えるべきであろう。3世紀から5世紀にかけて、ヴェトナム中部の北域に位置した日南郡をめぐる中国側と林邑の熾烈な抗争も交易ルート掌握のためと考えるべきであろう（山形・桃木2001）。

こうした結果、紅河平原域の交易中継地としての重要性は薄れ、逆にそのことが中国側政権の関心低下、在地勢力の伸長を促したのではないだろうか。4-9世紀の磚室墓がバックニン、ハノイ域に集中していることは、それらを残した人々が、六朝・隋唐政権中心地である龍編や宋平（後の羅城）にまわりついていった人々であったことが理解できる。推測をさらに進めるなら、龍編や宋平といった中心を離れるとその政権からは、性質的にはかなり縁遠かった集団が居住していたことになる。

また、古螺・羸婁・龍編・宋平（後の大羅、現ハノイ）と紀元前2世紀頃から、紀元7世紀にかけて北部ヴェトナムあるいは交趾郡（後の交州）の中心は、少なくとも4地点を変遷している。このことは何を意味するのだろうか。10世紀以降の紅河平原について桜井（1980,1981）が分析したように、少なくとも李陳朝までの紅河平原の各王朝政権は平原域全体を支配下におくことには成功していない。つまり、それぞれの自勢力基盤が紅河平原のどこかにあり、そこを中心に他勢力を懐柔したということである。上述の郡治・州治の変遷もそのことを意味しているのだろう。紅河平原域の北域に位置していた古螺・羸婁からドゥオン川と紅河に挟まれた紅河平原のへそとも呼べる位置にある龍編、そして紅河の南岸に位置するハノイと、徐々にその位置を南へ遷している。

H 10世紀

10世紀はヴェトナムが長い中国支配を脱却して、独立を達成した時期であるが、大越史記全書など文献資料に紅河平原各地で地方勢力（十二使君など）が出現し、平原域の開拓・支配域を具体的に考

察できるようになる（桜井1980）。考古学と文献史学のかなり具体的な重ね合わせが可能となる時期である。

丁朝・前黎朝の都がおかれたホアルー城郭遺跡群を除いて、10世紀と認定できる遺跡は数は多くない（Fig.120）。それは10世紀と比定できる陶器群が、ホアルー城郭やドゥオンサー窯址遺跡などでつい最近になって理解できたからであり、まだ確認されてない遺跡が相当数あるものと予測される。ただその中でも注目されるのはタイビン省のThái Phúc-Thái Hà（タイフックタイハ）遺跡群である。ここではレンガ建築遺構らしきものが確認され、ホアルー城郭でも出土している“江西軍”⁽²⁾と印字された磚があることから10世紀の建築遺跡と考えられている（Nguyễn N.P.&Vũ Đ.T.1999）。遺跡群は現海岸線からわずか1-3kmの範囲内に位置しており、当時の海岸線際に立地していたと考えられる。

一方、桜井（同上）は十二使君の一人、陳覽が布海口に依拠した大越史記全書の記事とその布海口が現タイビン市の市域内にあったという後世の記録に注目し、現タイビン市周辺域が紅河平原域の開拓限界であったと推定している。

さらに南西に行くと、筆者が集中的なサーベイを行っているナムディン省ナムディン市、ヴァン県、ミーロック県でも10世紀以前から10世紀頃にかけての小規模な居住は確認されている（Nishimura&Nishino 2002）。従って、タイフックタイハ遺跡群、タイビン市、ナムディン市、そしてヴァン県を結ぶ線が10世紀の開拓・居住限界と考えられる。タイフック-タイハ遺跡群では現海岸線と非常に近いが、ヴァン県では30km近く離れているのがわかる。これは紅河本流を中心とする沖積作用の強弱差を表していると考ええる。

ところで分布を俯瞰すると、10世紀段階において紅河平原南部の居住限界というものは、それ以前の時期、例えば紀元後1-3世紀と比べてあまり前進していない可能性が高い。その理由としては紀元後1000年紀という時代は、人口や村落の稠密化を引き起こすほどの大規模な水利工事や集約的農業を行っていなかったということが当てはまるのではなかろうか？

1 李・陳朝期との比較

データ集が10世紀までの遺跡を対象としているため、紅河デルタ全域での比較は無理であるが、著者がサーベイや発掘調査を行ってきたナムディン省や隣接するタイビン省との比較を簡単に行っておく。Fig.122（Nishimura&Momoki 2002）はナムディン省やタイビン省の李・陳朝期の各遺跡分布である。この中には考古学的遺跡のみならず王室の采邑や公主（皇帝の娘）が寓居した伝承地も含まれている。その分布範囲を初期歴史時代（10世紀まで）の遺跡の分布範囲と比べてみると海岸側へ若干（10km弱か）前進しているのがわかる。単純に考えればこの距離が初10世紀頃から陳朝期にかけてのびた開拓限界なのである。これはデルタ先端部形成とも絡み合った問題で、その開拓限界伸長の理由を、単に新たに形成された洲土をこれまで通りの農業技術で順次開拓していった結果だけなのか、あるいは桜井（1989,1995b）が論じるように堤防建設による干拓といった工学的手法で開拓した結果なのかを判断することは難しい。おそらく、その両方なのであろう。しかし、焦点を遺跡の分布密度に変えてみるとその違いが歴然としてくる（Nishimura&Nishino 2002）。比較的サーヴェイ密度の高い

ナムディン省のナムディン市、ミーロック県、ヴバン県を対象に俯瞰すると李朝期の居住痕跡はさして多くないのに、陳朝期の居住痕跡は至る所で確認できる（Nishimura&Momoki 2002）。このことはヴバン県のバッコック村と周辺域の試掘・分布調査でも確認されていることである（西村他2000, Nishimura&Nishino ibid.）。この陳朝期の居住域拡大現象は氾濫原や沿岸砂碛列のような低地において確認できるから、そこには人為的環境改変による居住を可能とする理由を当てはめるしかない。桜井（前掲）が議論した陳朝期の堤防建設による開拓がまさにその理由に相応しいのは間違いない。堤防建設は可耕地の拡大のみならず集落の増加・稠密化も引き起こしている。当地域を陳朝が重視した背景の一つであろう。

また、フンイエン省の南半部、ハイズオン省東部は一部の大河川沿いを除いて、10世紀までの遺跡がほとんど確認できない。桜井（1980）の10世紀の歴史地理的研究においても、紅河本流やLuộc（ルオック）川沿いの河川交通の重要地点と考えられる細江、簾州、扶帯を除くと、当地域のかなり北端に近い洪州（現ハイズオン省西北端部）以外でしか、大きな地方勢力は確認されていない。これは当地域が未開拓であったといわないまでも、一つの大きな地方勢力を形成できるほどの人口、集落がなかったことを意味しよう。おそらく当地域は李朝・陳朝以降の開拓が主となるのであろう。

Ⅱ まとめと展望

旧石器時代から紀元後10世紀までの居住パターンの変化を概観した。

居住パターンの変化として、上流域から下流域へ、つまり高所から低所への居住域の拡大が通時的に確認できる。これは下流域でのデルタの形成・発展、人類の低地への適応居住という、地形変化と文化的適応の両方が背景となっている。

地形変化という視点では、旧石器時代、新石器時代、そして鉄器時代あるいは初期歴史時代の3段階での居住域範囲が大きく異なっていることに、海進海退現象やデルタ形成が大きく反映されている。局地的には紅河本流に沿った地域はデルタ形成の速度が速く、従って開拓前線が徐々に現海岸線に近くなっていることが明瞭に遺跡分布パターンに現れている。これとは対照的にハイフォン市下流域ではこうしたデルタ形成が進んでないせいか、開拓前線の前進の時期的差異がはっきり現れてこない。

また、文化的適応という視点では居住範囲拡大の場合のみならず、居住範囲の狭小化という場合が存在するということが明らかとなった。

全体的に俯瞰するなら、紅河平原の人類居住は非常に長期にわたって、徐々に拡大し、また、各地点、遺跡での居住期間も非常に長い場合が多々あると考えられる。先史時代の遺跡の場合には遺跡と現集落が重なり合っていない場合が多いが、初期歴史時代以降は確実に重なり合ってくる場合が増え、居住地が安定した環境にある場合は1000年以上の居住期間さえ簡単に存在しうるようになる。

注釈

(1) Hà V.T. (2002) は問題の文字磚に” 晋末爵忠訊討賊廬循有功” や” 交趾朱者貴民杜” とよめるものがあることから、墓の造営を南齊代（420年以降）と考え、廬循反乱鎮圧に功のあった杜慧度一族（名は杜貴民）の墓ではないかと考えている。しかし、大西和彦氏（ヴェトナム宗教史研究）に” 朱者” ではなく” 朱鷲” と読めることをご教示いただいた。記して感謝する次第である。

(2) 最近のタンロン皇城遺跡の研究では、江西軍の銘文入り磚は、9世紀の製作ではないかとする意見が、中国研究者（陳良偉教授私信）より出されている。遺構出土例もこれに矛盾しないようである。本例の場合、磚の再利用か否かが問題となるが、記述からはホアルーのような再利用の可能性は十分にある。

Table 8 各省の時期別遺跡数

省名	旧石器・ホアビ ニアン時代	新石器時代	金属器時代	初期歴史時代	遺跡数
Phú Thọ	95	56	44	11	192
Vĩnh Phúc	4	21	13	31	59
Bắc Giang	17	6	4	11	38
Hòa Bình	11	3	2	0	15
Hà Tây	8	16	66	18	98
Hà Nội	2	14	28	36	68
Bắc Ninh	C	11	29	43	67
Hải Dương	1	0	10	14	25
Hưng Yên	C	0	6	3	8
Hà Nam	1	3	31	8	41
Ninh Bình	7	13	3	6	24
Nam Định	C	7	3	10	16
Thái Bình	C	0	2	19	20
Hải Phòng	6	22	17	13	51
Quảng Ninh	C	2	3	5	10
総数	152	174	233	228	732

Table 9 各省の高度別遺跡数

	1-3m	3-5m	5-	10m以上	10-	20m以上
Phú Thọ	0	0	0	0	9	159
Vĩnh Phúc	0	0	1	0	3	1
Bắc Giang	0	5	1	0	1	1
Hòa Bình	0	0	0	0	0	1
Hà Tây	2	1	3	1	1	5
Hà Nội	0	1	3	0	1	1
Bắc Ninh	1	4	1	5	1	0
Hải Dương	1	1	1	0	1	2
Hưng Yên	5	4	0	0	0	0
Hà Nam	3	3	2	0	0	0
Ninh Bình	0	3	1	0	1	1
Nam Định	1	2	1	0	0	2
Thái Bình	2	0	0	0	0	0
Hải Phòng	1	5	8	1	3	1
Quảng Ninh	5	4	0	1	0	0
総数	126	107	105	8	183	236

第8章 メコン・ドンナイ川平原域の集落分布変遷とその背景

A はじめに

新石器時代から鉄器時代までの編年整理と後続するオケオ文化に関する既存研究を利用しながら、遺跡分布変遷を明らかにしてみたい。ただし、編年案で示したような細分時期に応じた変遷を追うのは、時期細分の可能な遺跡資料が多くないため、新石器時代、青銅器時代、鉄器時代、オケオ文化の各時代区分を採用する。また、オケオ文化に関しても、筆者は一部の時期の土器編年研究（Nishimura 2004a, 2004b）しか有さず、遺跡踏査の経験もそれほど多くない。従って、オケオ文化期自身を時期細分することは行わず、一括扱いとする。

これらの時代を通して分布変遷を考察する対象域も、メコンデルタとその周辺全体を通じて行うことはしない。これは土器等に関する公表データがあまりにも少なく、筆者自身が資料精査を行わなければ、理解できない地域が多いので、データが比較的揃いのいい、ドンナイ川流域からヴァムコー川流域を中心とし、西限はティエン（Tiền：メコン本流、東側の分流）河までとした（Fig.12）。行政的には、ドンナイ（Đồng Nai）省、ビンズオン（Bình Dương）省、ビンフック（Bình Phước）省、バージア・ヴンタウ（Bà Rịa-Vũng Tàu）省、ホーチミン（Hồ Chí Minh）市、タイニン（Tây Ninh）、ロンアン（Long An）省、ティエンザン（Tiền Giang）省、ドンタップ（Đồng Tháp）省を範囲とした。なお、バージア・ヴンタウ（Bà Rịa-Vũng Tàu）省所属のCôn Đảo(コンダオ)島、ティエン河以西のティエンザン省所属のSa Đéc（サデック）県は対象としていない。

分布作成にあたって利用した資料は、Khảo cổ học Long An（Bùi P.D. et al. 2001）、Đánh giá hiện trạng và hệ thống hóa các di tích khảo cổ học trên địa bàn tỉnh Long An（Vương T.H. et al.1996）、Văn hóa Óc Eo:những khám phá mới（Lê X.D. et al. 1995）、Khảo cổ học Đồng Nai（Lê X.D. et al 1991）、Khảo cổ học tiền sử và sơ sử Thành Phố Hồ Chí Minh（Đặng V.T. et al.1998）、Thư mục khảo cổ học Việt nam（Nguyễn G.H. & Trịnh S. 2001）、ヴェトナム考古学年報（NPHMVKCH）などである。

まずは時期別の遺跡分布状況の叙述から始めることにする。

B 時代区分基準

筆者が組み立てた新石器から鉄器時代までの編年（Nishimura 2002, Nishimura 2005a、第6章参照）を基準としたが、資料を実見しない限り時期を判別できる公表遺跡資料は、極めて少ない。また、今回の分布変遷では、紀元前2000年紀から紀元前1000年紀の後半までという3000年近い時間帯を新石器時代、青銅器時代、鉄器時代、オケオ文化時代の4期に区分しているだけだから、詳細な編年の応用も必要としない。そこで、筆者の編年作業に基づいて、抽出した以下の認識に基づき時期判定を行った。

・新石器時代は紀元前2000年紀とし、青銅器時代は（BP3000-2500あるいは2400BP）、鉄器時代は（

2500あるいは2400BPから2000BP頃)、オケオ文化時代はそれ以降と暫定的に理解した。

- ・旧石器とされている両面加工石器は新石器時代の石器群に確認されるものがあり (Nishimura et al. in press)、しかも、北部ヴェトナムで確認されているソンヴィアン石器群 (中期旧石器以前) やホアビニアン石器群とは異なることなどから、表採資料のみから旧石器時代としての判断は不可能であり、時期不明遺跡にした。筆者は新石器時代の石器が表採された可能性が高いと考える。

- ・石斧は確実な例としては新石器時代にしか確認できない。

- ・青銅器の一部の器種は鉄器時代 (例: 青銅斧、Long Giao: ロンザオの青銅戈) にも使われており、形式的に新しそうなものは、鉄器時代とした。石環も鉄器時代には半貴石やガラス質のものになっており、時期判別の一基準とした。また球形甕棺墓の出現も鉄器時代の墓葬として判断基準とできる。

- ・オケオ文化時代に関しては、ケンディ等の特徴的な土器やその土器の胎質 (非常にキメの細かい胎質で、白灰色が基調)、レンガ、ヒンドゥー教・仏教関係の遺物の出現等で、かなり容易に判断されている。ただしオケオ文化遺跡の中には、さらに後の時期 (プレ・アンコール、アンコール時代など) の遺跡・遺物も若干含まれているが、ここではその判別も難しいことから、問題とはしない。オケオ文化自身が終末をいつとするかははっきりしていないので、ここではオケオ文化とそれ以降の時期も含む可能もあるとして理解してよい。もちろん、紀元2000年紀と考えられる貿易陶磁の遺跡やキン族や華人進出以後の遺跡に関しては含めていない。

こうした分期基準をもとに、合計405地点の遺跡データの時期判定を行ったところ、新石器時代142遺跡、青銅器時代16遺跡、鉄器時代32遺跡、先史時代だが時期特定不可能14遺跡、オケオ文化209遺跡、時期不明14遺跡の数を数えることとなった。当然、1遺跡で複数の時期が確認されている場合もある。そして、新石器時代から鉄器時代までをFig.123の分布図に、オケオ文化時代の分布をFig.124に表してみた。

C 新石器時代以前

新石器時代以前の遺跡については、発掘研究や地質学的研究がかけている旧石器時代の候補となる遺跡が報告されているにすぎない。北接するLâm Đồng(ラムドン) 省で、ソンヴィアンと同様な礫石器群が報告されており、旧石器時代の遺跡は存在するはずである。また、旧石器と新石器時代の間をつなぐホアビニアンや北部ヴェトナムの前期新石器相当の遺跡・遺物も報告されていない。ホアビニアン・インダストリーの場合は、開地遺跡が見つかりにくいことを考え合わせれば、納得もできるが、前期新石器並行の遺跡・遺物が全くないのを、踏査不十分という理由で説明したくない。中部ヴェトナム、カンボジア、タイなどの周辺地域をみわたしても、同傾向であることを考えるなら、北部前期新石器時代と並行する時期には、まだホアビニアン・インダストリーであった可能性が高い。ここに、紀元前2000年頃の新石器時代成立とオーストロ・アジア語族の植民を重ねる仮説 (Bellwood 1989) が、当地域においても当てはめる余地 (西村1996) が生まれるわけである。

D 新石器時代

河川の沖積により平野部が徐々に伸張するデルタ地帯においては、ロンアン省Cần Giuộc（カンズオック）県Rạch Núi（ザックヌイ）、ティエンザン省Châu Thành（チャウタイン）県のLinh Cô Tự（リンコートゥ）、Kim Thạch Bửu Tự（キムタックビュートゥ）、Gò Sáu（ゴーサウ）、ドンタップ省のGò Tháp（ゴータップ）遺跡等が海岸側の居住性先端の遺跡として挙げられる。これらの遺跡は砂堆列上の遺跡で、Ta T.K.O et al. (2002) の地形区分図 (Fig. 10) では、メコン本流が形成した最初の砂堆列となる。また、Thị Vải（ティヴァイ）川河口のバージア・ブントウ省のBà Rịa（バージア）県、Tân Thành（タントイン）県の一連の遺跡が、海岸近くの遺跡である。最近ではベンチャー（Bến Tre）省ゾムノイ（Giồng Nổi）で、当該期遺跡の発見がされ（Lại V.T. et al. 2005）、Trà Vinh（チャーヴィン）省のLư Cừ（ルークー）でも当該期の遺物（有肩石斧：筆者Tra Vinh:チャビン省博物館実見資料）が発見されている。

地形形成研究（Ta T.K.O et al. 2002）では、ベンチャー市より東に、4000年前の海岸線が、Trà Vinh市辺りに3000年前の海岸線が推定されている（Ta T.K.O et al. 2002）。この地形形成研究と地質図（Pl.C）に基づけば、最奥に位置するドンタップ省のゴータップ（Chân Gò Minh Sư地点：Nishimura 2004a）が位置する砂堆列は、4000年以前の、おそらく海退が始まった最初期の砂堆列である可能性が高い。また、ASII 期に位置づけられる有肩石斧が確認されるティエンザン省の遺跡やチャビン省のルークーに基づけば、4000年頃の海岸線は、地形形成研究が推測するラインよりもう少し海寄りであろう（Fig.123）。

ところで、砂堆列の後背域にあたる場所では、それほど多くの遺跡分布をみない。たとえば、ドンタップムオイの中心域では砂堆列上のゴータップ以外ではカンボジア国境近くまで、遺跡分布は皆無に近い。ヴァムコータイやヴァムコードン川流域でも、中流域には遺跡の分布はみられず、ドンナイ川流域も現ホーチミン市の市域北部より北にしか遺跡の分布はみられない。

この傾向は紅河平原のデルタ形成地帯（ナムディン省など）での同時期の居住パターンによく類似しており、おそらく先端の海岸線付近は河川堆積による砂州が発達し、その上で規模は小さいながらも居住が可能となるものの、海岸線と段丘部の間、その中でも特に海岸側は汽水域や沼沢地がかなり広く存在し、居住に不適であったと考えられる。

当該期の遺跡分布はドンナイ・ビンズオン・ビンフック各省の丘陵、山間地帯が中心をなしていることが分かり、筆者が調査しているVàm Cỏ（ヴァムコー）川流域は、その分布域において周縁的位置を占めるに過ぎない。後述するがこれは当該期の生業を考える上で重要な傾向である。

また、遺跡形態の分布に関しても興味深い傾向が伺える。Circular earthworkは環状土塁集落ともいうべき、特異な形態の新石器時代の集落である（Malleret 1959, Groslier 1966, Nguyen T.D. 1984, 2004）。また、筆者の調査したĐa Kai（ダカイ）遺跡は、土塁と言えるほど高い土盛りはみられないが、環状集落ともいうべき形態を示しており、環状土塁集落の1類型と理解できる（Nishimura et al. in press）。こうした形態の遺跡は高原・山間部でしか確認されていない。残念ながら、これまでのドンナイ省の遺跡などは、地形測量などがされておらず、ダカイのような形態の集落遺跡があるかどうか自体不明

であるが、その可能性は大いにあろう。

一方、ダカイなど環状（土塁）集落と全く同時期と理解できるアンソンは、大型の重層マウンド遺跡であるが、台形に近い平面プランを呈している。これと同じ形態の新石器マウンド遺跡が、アンソンより上流にあるコーソントゥ遺跡である。また、同時期のザックヌイ、ビンダー、ジンオンなどの大型マウンド遺跡（第11章）の分布を俯瞰した場合、平野部にしか位置していないことがよく理解できる。両遺跡形態は全く相容れない分布を示している。これは、少なくとも居住に関する文化の違いとして捉えていいのではないだろうか。もちろん両遺跡形態に共通する遺物なども存在し、文化全体で考えた場合に両者が地域的な文化の違いに即応するというものではない。例えば、Lithophoneと呼ばれる打製石製木琴は両方の遺跡形態をまたいで分布している（Nishimura et al. in press）。

E 青銅器時代

新石器時代に比べ遺跡数が激減する。これは石斧の表採例なども新石器時代の遺跡として登録していることが最も大きな原因であり、青銅器が何らかの理由で発見されにくい状況があった場合、見かけの数的変化であり実際の状況を的確に反映していない可能性がある。ただし、発掘・表採資料の実見研究を行った遺跡のみでも、新石器時代から青銅器時代への遺跡例数の減少は明らかで、当遺跡データもある程度信頼のできる傾向を提出しているようだ。

この新石器時代から青銅器時代にかけての遺跡減少は何を意味しているのだろうか。

遺跡数が減少するという傾向以外に、遺跡の立地のヴァリエーション自体が変化していることを読みとれる。つまり、青銅器時代の居住遺跡の多くは川岸や河口部の湿地帯などに立地している。このことは川あるいは水域を利用した生業・経済と遺跡立地が結びついていたと考えて良い。では、漁労や水産資源の活発化がこうした遺跡立地利用の背景にあったのであろうか。そうではないだろう。青銅製釣り針の出土があるものの、骨角製の釣り針は新石器時代にすでに出現しており、特に画期的な変化を見せているわけではない。おそらく、こうした青銅器時代の遺跡立地は新石器時代にも既に活発に利用されており、生業の変化によるものと考えする必要はないであろう。注目されるのは、ゾックチュア、ブンバック、ブントムでは石環、石製鋳型、青銅器などの集中的生産を示す資料が多く出土していることである。これは、集落単位で青銅器や石環類の専門的生産が確立されていたことを示すものであるが、その背景にあるのは原料の希少性ではないだろうか。

Pl. Bの鉱産地質図が示すように、メコン平原と周辺部では銅、鉛、錫などの青銅生産原料は全く存在しない。従って、青銅器を生産するには遠隔地から原料あるいはingotを輸入しなくてはならず、青銅素材自体が希少価値品であったと考えられる。そうした状況であれば、青銅素材を入手するに都合のよい、（水上）交通の要所に居住立地が選ばれるのは当然の結果であろう。当然、これまで、利用されていた山間・丘陵部の石器石材採取地やそれに近い居住立地は、石器製作の減少・放棄により、利用対象ではなくなる。要約すれば、石器から青銅への素材変化が起こした、集落立地の再編減少であろう。紅河平原でも新石器から青銅器時代への移行期に類似した現象が確認される（第7章参照）。

F 鉄器時代

青銅器時代に比べ、若干遺跡数が増え、より低地・低湿地に遺跡が進出している。ただし、低湿地に初めて居住進出が行われたわけではなく、新石器時代にすでにそうした遺跡が出現している。ゾンカーボ、ゴーオーチュア、コーソントゥなどに代表されるように、こうした遺跡は土器生産遺跡としての性格が強い（第11章参照）。

また、銅鼓が複数出土している遺跡Phú Chánh（フーチャイン）は、ドンナイ川中流域の支流に位置しており、社会の階層化、権力差の生じた社会形成の中心は、海岸部でもなければ、山間部でもない、その中間的位置であったことが理解できる。

G オケオ文化時代

分布全体を俯瞰すると、低地、平原域の方に遺跡が多い。特に低湿地帯（ドンタップムオイ）で、遺跡の爆発的増加が認められる。これはメコン平原の低湿地帯・低地に全体に看取される現象で、初期国家扶南成立に伴う、海上交易の活発化による低湿地帯・低地遺跡形成の活発化と理解されている場合（例：Le X.D. et al. 1995, Higham1989）が多い。この現象は、紅河平原の紀元後1世紀以降の遺跡分布（第7章参照）にも看取される現象である。

ホーチミン市のCần Giỏi（カンゾー）県海岸に近い汽水域でも鉄器時代に引き続いて遺跡（ゾンフェット遺跡群など）が集中立地している現象がある。ゾンカーヴォ遺跡群同様、特異な環境を利用して、特殊な筒状土器の生産⁽¹⁾あるいはそれを利用した生産活動と結びついた遺跡と考えられている（Đặng V.T. et al. 1998）。

ロンアン省やドンタップ省のドンタップムオイ（Plain of Reeds）は、省の精力的調査のおかげで、開発されて20年ばかりにも関わらず、遺跡の分布がかなり明確になっている。地質図（Pl.C）と遺跡分布をつきあわせると、現在のヴァムコータイ上流域（現河川域はPl.Cのうす水色）と旧河川流路（Pl.Cの灰色）に沿って、遺跡が分布している。これは過去、ドンタップムオイにおいて明確な流路をもつメコン河の支流が存在し、それが遺跡形成において、大きな役割を果たしていることを意味している。このあたりの認識は、現湿地帯の中において、遺跡を見ているとやや理解しがたいことかもしれない。巨大な遺跡群であるドンタップ省のゴータップ（Gò Tháp）も、この旧河川の南岸の砂堆列上に位置しており、ドンタップムオイの中では、標高的にも高く形成が古いところである。新石器時代や鉄器時代の文化遺物、文化層が確認され（Nishimura 2004a）、さらには阮朝期に抗仏ゲリラ勢力の拠点になっていることも理解しやすい。多くの、外来品（銭、半貴石製品や鉛のインゴット）や土器製作具が発見されたGò Hàng（ゴーハン）遺跡も、ヴァムコータイ川に注ぐ支流脇に立地している。おそらく、メコン平原のなかでも自然環境としては、最不適地のひとつであるドンタップムオイ地域においても、河川交通の要所や砂堆列などの居住適地を選び居住している。特に河川との位置関係は重要である。

近年、調査され話題となったラムドン省のカッティエン（Cát Tiên）遺跡群（Bùi C.H.&Đào L.C. 2004）は山間部の盆地に立地している。また、山間部・盆地部は相対的に調査の網が及んでいないところでもあり、現在の分布でものを考えるのは危険な側面もある。しかし、スアンロックの玄武岩丘陵地帯では、各時代の先史遺跡が多く発見・調査されているにもかかわらず、オケオ時代の遺跡は皆無である。従って、遺跡分布の中心は低地・平原域に移っていると判断せざるを得ない。ただし、ドンナイ川のような主要河川沿いには、かなり山側の盆地地帯まで遺跡が形成されているようだ。

カッティエン（Cát Tiên）、タイニン省のタインディエン（Thành Diên）、ビンター（Bình Tả）、ドンタップ省のゴータップなど、大型宗教建築を群としてかかえる遺跡群は、いずれも主要河川、旧河川沿いに立地しており、水系単位での中心的位置を占める遺跡で、政治的には扶南の各地方中心を表していると考えられる。

H 集落の分布変遷と生業変化

通時的に集落分布を概観した場合、丘陵・段丘複合地帯などの相対的に高地に集落が多く立地していたのが、オケオ文化時代には、ドンタップムオイなどの低湿地に多くの遺跡が立地するようになっている。この立地変化には前述の各要因が絡み合っているが、立地変化に伴い生業変化も生起していたはずである。周知のように、新石器時代の土器、特に植物繊維混和土器には大量の籾が混入されているものが多く、大量の籾を一時に利用できるほどの稲利用（おそらく稲作）が確立されていたことが理解できる（Nishimura&Nguyễn K.D. 2002）。穂摘み具の可能性のある石器も出現しており、稲作が生業の一部に組み込まれていたことは確実であろう（Nishimura et al. in press）。では、いかなる稲作であったかが焦点となる。ドンナイ省や周辺の新石器時代の大型集落遺跡の立地は、現在でも水稻耕作を行わない、あるいは行えないところが多い（例：カウサット、ダカイ、ヴィンフック、ビンズオン省の環状土塁遺跡群など）。天水では水稻耕作に全く適していない、高地・台地に立地しており、稲作とすれば畑作、特に焼き畑耕作の可能性が高いと考えられる。これはタイのバンコック平原周縁部の先史時代集落形成パターン（Mudar 1995）においても指摘されたことである。

もちろん、河川の自然堤防や氾濫原を遺跡周囲立地に含む、低地平野部の遺跡では、水利の便が良いであろうから水稻耕作が可能となる。ロンアン省のヴァムコー川流域の新石器遺跡などはその可能性が大いに高い。つまり新石器時代に既に複数の稲作法が存在していた可能性がある。そして、オケオ文化時代には低地・低湿地での水稻耕作が、より強力に行われていたのであろう。

I ドンタップムオイ低湿地域の形成について

Plain of Reeds（葦の原）とよばれ、1980年代の大規模運河建設に伴う開発までは、原野に等しかった当地域は、メコン本流の形成した自然堤防と本流が河口部で形成した砂碛列に河川水の排水口をふさがれて形成された低湿地帯である。雨期には大冠水して、海のようなことでも有名である。排

水の悪さに起因する硫酸酸性土壤に耐えうるChamの木や一部の草本科の森林・草原が卓越していた植生であった。このような現在の生態環境からはオケオ文化時代に多くの遺跡が形成されたことがやや想像しにくい。また、現在残存する遺跡の形成層も、雨期に冠水あるいは水没するということも、理解しがたい現象である。遺跡形成時と現在の環境にさほど差がないなら、当時、遺跡形成つまり居住は乾期のみに行われた季節的なものであったと考えなければならないが、初期国家形成・成立の当時代において、そうした居住法が一般であったとは考えにくい。むしろ当時と現在の環境は異なり、オケオ文化時代には、当時の排水状況は現在よりよく、現在のような大冠水が起きるような環境にはなっていなかったのではないだろうか。オケオ文化の土器編年が未整備である現在、各遺跡を時期別に把握できないのが残念であるが、当地域は紀元後2000年紀の遺跡は非常に少ない。従って、現在のようにドンタップムオイが大冠水をするようになったのは、紀元2000年紀に入ってからではないだろうか。

注釈

1) 形態的ヴァリエーションに乏しく、なおかつ大数量で出土する鉄器時代からオケオ文化時代にかけての卵形や筒形土器群は、海岸に近い立地で大量に出土することを考えるなら、土器製塩に利用されたと考えるのが最もふさわしい。こうした土器は海岸部以外では、わずかしき確認されていない。同様な論理をロンアン省の新石器時代遺跡ザックヌイの球形壺にも当てはめられるかもしれない。

第9章 北部ヴェトナム後期新石器時代の生業基盤変容について： 農耕社会成立過程に関する基礎的理解

A はじめに

東南アジアにおいて、農耕がいつから行われ、農耕社会がいつ形成されたかというテーマは、多くの人が論じてきたものである。考古学的には新石器時代というものが相互比較理解のための理解基準の一つになるのだろうが、まだ東南アジア全域においてその新石器時代像は共通の土俵で理解できるほど研究が成熟していない。本論では北部東南アジアの一地域である北部ヴェトナムに焦点をあてて、近年の調査資料や筆者の新しい認識に基づき、編年の枠組みとそこから生じる認識を整理し、農耕社会成立過程を理解するための鍵を提出してみたい。

ただし、本来ならば、植物や動物遺存体の分析や食料獲得や生産に直接関係する道具などの分析を中心に、生業内容を具体的に議論しなくてはならないのだが、それを可能にする資料がまだまだ不足している。そこで、本稿では第3章で叙述したように、新石器時代を前期・後期に分期したうちの後期新石器時代を、さらに前後2期（マードン・ホアロック期とフングエン期）に細分し、その間に生業基盤に関してどのような変容があったかを、いくつかの視点から検証し、将来の具体的生業像理解のための基礎論を提出するにとどめる。

B 遺跡立地・遺跡形態からみた後期新石器時代

I 前期新石器から後期新石器時代にかけての変化

遺跡調査密度の高い紅河平原域の場合、前期新石器時代（Fig.129）の開地遺跡は、カットバー島やニンビン省Yên Mô（イェンモ）県などの海岸部でしか発見されていない。この傾向が遺跡分布の真の傾向かどうかは発見遺跡数の数が少ないため、簡単に判断は下せない。しかし、山岳部のホアビニアン石器群が出土する洞穴やカットバー島の山間部に属する洞穴・岩陰などで、同時期の遺物が確認されており、出土する貝が汽水、海水産のものが多く、淡水貝がさほど多くないことを考慮するなら、海岸資源利用により重きを置いた資源開発・居住パターンであったと想定してよい（西村2003b）。同時期のタインホア省ダーブット貝塚遺跡群、ゲアン省のクインヴァン貝塚遺跡群などと同様に、農耕開始期前後の小型生物資源集中開発の結果と考えられる（西村1994）。

後期新石器時代になると海岸部のみならず山間部から段丘地帯にかけての平原域の高位部でも遺跡が出現する。もっとも確認遺跡数が多いのはフート省であるが、ハータイ省、ヴィンフック省にもかなり存在し、ハノイ市、バックニン省の一部まで分布域が連なっている。前期新石器と比べフート省などの段丘・扇状地複合地帯が突然のごとく、活発かつ大規模に利用されている。

II ハロン文化などの遺跡立地

クアンニン省からハイフォン省にかけての海岸地帯で多く確認されている、ハロン文化⁽³⁾の諸遺跡 (Fig.130) には、開地遺跡と洞穴遺跡が存在する。開地遺跡のほとんどは、島や岬状地形の浜堤部に位置している。遺跡の面積はバイベンのように5000㎡位の大きなものもあるが、カイベオ(Hoàng X.C.&Nguyễn K.S.2005) のように約800㎡と非常に小規模なものもある。後背地には少なくとも農耕に適した沖積土壌の平野が決して多くない場合が多い。もちろん、斜面地などを利用しての小規模な農耕は可能であるが。カットバー島、Cái Bàu (カイバウ) 島ではともに、1980年以降の紅河平原部からのヴェト族の移住者が、土地改良を経て、水稻農耕を小規模ながら行っているが、それ以前は水稻農耕を行う農耕適地は皆無に近かったようだ。例えば、Ba Vững (バーヴン) 遺跡(Hà H.N.2005) は、ハロン湾のカイバウ島の東南岸に位置している (Fig.132)。遺跡は山麓から海岸にかけての段丘・沖積平野部ではなく、その先端にある石灰岩山塊麓の浜堤に位置している。後方の段丘・沖積平野部では、水利のよいところでは水稻耕作を行っているが、それ以外にヤムイモ・タロイモなどの栽培が盛んであることをしばしば聞いた。当然、バーヴン遺跡の人間が、農耕を主とする生業を行っていたなら、このような立地は選ばず、より後背の平野部を選択するであろう。こうした開地遺跡の立地は香港や広東省沿岸で確認されている中期新石器時代 (大湾文化: 鄧・王1992) の遺跡と非常によく類似している。

マイファー文化、ハロン文化の諸遺跡などは洞穴・岩陰遺跡も多く確認されている。ともに、洞穴岩陰内空間を居住に利用しただけでなく、集団墓地として利用したことが明らかになっている (Bùi V.&Nguyễn C. 1997)。前述のように、ハロン文化では、近接距離内に浜堤部などに立地する開地遺跡も確認されており、異なる立地が同時期に利用されたことを想定せねばならない。筆者1999年に行ったCái Bèo(カイベオ) 島の踏査では、洞穴・岩陰内の空間は大きいものではなく、また、水場や平地が周囲にない立地も多く、一時的な居住は行えても、長期安定居住は無理と判断された。浜堤の開地遺跡と洞穴・岩陰遺跡を頻繁に行き来するような居住パターンも考えられるであろう。

また、Fig.130からも明らかなように、後期新石器前半期 (いわゆるハロン文化) と後期新石器後半期では、立地が明瞭に変化していることも注目される。後半期の遺跡は島嶼部にはほとんどなく、海岸依存の占地性が明らかに減じられている。

III 北部紅河中遊域の遺跡立地

紅河中流域はフングエン期以降の先史時代遺跡が多く確認されているところである (西村・西野2003)。そこで、フート省のViệt Trì (ヴェトチー) 市の西に位置する紅河の湾曲部が形成した自然堤防と氾濫原複合地帯 (滑走斜面側) とその周辺の河岸段丘や丘陵・山脈地帯を中心に、遺跡分布を概観する (Fig.131)。分期は後期新石器時代前半、後期新石器時代後半、金属器時代 (ドンダウ期からドンソン期) の3期とした。後期新石器時代前半の場合、当区域内には Hồng河 (紅河) に注ぐ支流ブア (Bua) 川川岸近くの1遺跡しか確認できないが、この区域外の近くにも3遺跡ほどが確認できる (Phạm L.H.1999)。全て、川べりや丘陵地に位置しているのが特徴である。後期新石器時代後半になると、遺跡数が増加し、丘陵地帯や自然堤防・氾濫原複合地帯にも遺跡が出現する。さらに後の金属器時代の遺跡と立地傾向を比較すると、丘陵地、自然堤防・氾濫原複合地帯ともに遺跡が分布し

ており、後期新石器時代後半との傾向差が特に明瞭に生じているわけではない。従って、後期新石器時代後半以降に、当地域では丘陵地、自然堤防・氾濫原複合地帯ともに、多くの遺跡が形成されていることが理解できる。

IV マンバック遺跡とホアロック文化の遺跡の立地

マンバック (Fig.133) はニンビン省の埋没旧河川脇に位置し、周囲には石灰岩山塊が散在する。こうした石灰岩山塊の根元には完新世の最大海進期の海食崖が残されており、その高度は、遺跡の文化層最下部の高度と一致する。現在の周囲環境はかなり低平な水田が囲むところであり、水田集落としての当地域の開発はせいぜい13-14世紀までにしか遡らない居住史の新しいところである。また、マンバックではダーブット文化の土器も最下層で出土しており (Trình H.H.2004)、海退後すぐに遺跡で居住が開始されたことが想像される。遺跡から現最短海岸線までは約15kmだが、下層部の出土貝 (タイワンハマグリ、マドガイ、ハイガイ) の生息環境 (Matsushima 2004) が示すように、内湾性の浅海域・潮間帯に非常に近いところに位置していたようだ。当然、汽水域・海岸域の資源開発が生業の主であったろう。また、下層文化層の時期に農耕を行っていたなら、汽水域に適応した水稻稲作を想定しないといけない。

タインホア省のホアロック文化は、フーロック遺跡とホアロック遺跡 (Fig.134) の調査で認識されたものであるが、共にMã (マー) 川の形成したデルタの先端に近い砂碛列帯に位置している。現海岸まで3km離れているが、当時の海岸線はさらに遺跡近くに位置していたはずである。遺物の分布面積はそれぞれ25000㎡、20000㎡を越える大きなもので、一時的居住が形成したといった規模のものではない。マー川のデルタ先端部に位置する立地を巧みに利用するための生業 (漁業や運輸) が活発であったことが推察される。

V クィンヴァン遺跡群とタックラック遺跡群

前期から後期新石器時代にかけての貝塚遺跡が分布するクィンヴァン遺跡群 (Fig.135) は、ゲアン省の北部海岸に迫りだした山脈から流れ出したHậu (ハウ) 川とDũa (ズア) 川の下流域に位置している。貝塚は主に2つの群 (西群と東群) に分けることが可能である。西群は山側の残丘が点在するところから平野部にかけて分布している。東群はハウ川と海岸砂丘列の間に位置している (Hoàng X.C.1966b, Nguyễn V.H.1979b)。貝塚の主要構成貝はマドガイ (*Placuna placenta*) であり、現水田となっている各河川の下流域、特に西群と東群の遺跡空白地帯は当時、内湾性の潮間帯・浅海や汽水域が多くを占めた古環境であったと判断される。当遺跡群はĐền Đoi (デンドイ)⁽⁴⁾、Lèn Hàng Thờ (レンハント)、Trai Oi (チャイオイ)、Trai Mung (チャイムン) など一部遺跡 (Pham T.N. 2000) が、後期新石器時代前半と推定される。

タックラック遺跡群 (Hoàng X.C.1966c, Phạm T.N.2000) はハティン省のハティン市郊外の平野部に分布している (Fig.136)。分布図に明らかなように、貝塚遺跡は海岸に形成された砂丘列 (図136の北東端) より西側でHa Vang (ハヴァン) 川に合流する各支流近くの丘陵の裾野部や微高地に位置している。非貝塚遺跡は若干高度が高い西側に位置しており、各遺跡で砂層が基盤層に見られることから、貝塚遺跡の周囲環境は、クィンヴァン貝塚遺跡同様、マドガイの生息しやすい内湾性の潮間帯・

浅海や汽水域が多く存在したと考えられる。

両遺跡群ともに、後期新石器後半期の遺跡が分布域内にほとんど確認されていないことも注目される。後期新石器後半期の人間が資源開発域としては利用しなかった環境なのである。

C 貝塚遺跡の位置づけ

北部ヴェトナムの開地貝塚遺跡の多くは前期新石器時代に属し、タインホア省のダーブット文化やゲアン省のクインヴァン文化の遺跡群は、その代表的なものである（西村1993、東南アジア考古学会編1994）。そして、数は多くはないが、後期新石器時代の遺跡にも貝塚遺跡が存在する。上述のようにクインヴァン遺跡群のレンハント、チャイオイ、ゲアン省のタックラック遺跡群は、この時期に相当する。

マンバックでも、マードン・ホアロック期に相当する下層部は貝層と認識できるほどの多量の貝が出土しているが、フングエン期相当の上層では貝の出土量は非常に少ない（Trình H.H.2004）。

また、上述のハロン文化とされる海岸部遺跡では貝塚の形成例がほとんど存在しない。開地遺跡の場合、浜堤上に位置した遺跡なので、骨や貝が残りにくい保存条件が存在する。しかし、カイベオ遺跡（カットバー島）やホアロック文化の遺跡では動物骨や魚骨が大量に確認されており、骨・貝が全て残らなかったという解釈は成立しない。また、ハロン文化の洞穴・岩陰遺跡でも、同地域内にあるSoi Nhự（ソイニユ）文化（Hà H.N.&Nguyễn V.H. 2002）とされる更新世末頃の洞穴遺跡には淡水産巻き貝などの純貝層が確認されるが、ハロン文化の洞穴・岩陰遺跡では、それなりの貝の出土はあるものの純貝層をなすような場合は存在しないようだ。従って、同時期の貝塚遺跡や同地域のそれ以前の魚類等の資源利用が活発で、貝の利用頻度は低かったのであろう。遺跡と比較して、明らかに貝の採集量は生業比率において相対的に少なかったと考えてよい。たぶん、遺跡立地の項で述べたように、マンバック、クインヴァン遺跡群、タックラック遺跡群などの貝塚遺跡において、出土貝の主要構成種は内湾性浅海-潮間帯の貝が最も多く、海岸に近い内湾性の環境下、貝の集中採集が行われたことが理解できる。

一方、タインホアのホアロック文化の遺跡（ホアロック、フーロック）は海岸から約3kmしか離れておらず、約4000年前の海岸線は、現在よりさらに内陸へ位置していた可能性が高く、上述の貝塚遺跡よりさらに海岸線に近い遺跡であったことになる。その場合、汽水域は遺跡周囲に少なく、より海水域に関係した生業（漁業）の比率が高い可能性もある。

さらに、フングエン期になると貝塚と呼べるようなものは、ほとんど存在しない。チャンケンとĐầu Rằm（ダウザム）両遺跡は、ハイフォン省とクワンニン省の間を流れるバックダン（Bạch Đằng）川の河口部近くに位置し、フングエン期に属しているが、共にマガキなどの出土はあるものの純貝層を形成するほどには至っていない。例えば、ダウザムの第4坑では、貝を多く含む層が出土したが、55kgの骨の量に対して500個程度の貝殻しか確認されていない（Phạm T.N. et al.2005）。また、紅河河流域の山麓域に位置するPhượng Hoàng（フオンホアン）は、同時期の居住遺跡の中では多量の動物遺存体が確認された遺跡だが、13737片の動物骨に対して、733個の貝殻しか確認されていない（Vu T.L.

et al. 1995)。

概観すると、後期新石器時代前半には前期新石器時代から継続して貝塚遺跡が形成され、後半には貝塚を形成するほどの集中的貝の採集活動は行われていなかったと理解できる。過去にこの変化についての意味を論じたが（西村1994）、このことは当時の生業変化を如実に表している。貝を中心とする沿岸・汽水域の小型生物資源の集中利用が、前期新石器時代に活発化し、後期新石器時代後半には生業全体の中での比率が圧倒的に縮小したと推測される。

D 重層遺跡・重層マウンド遺跡の出現

いくつかの時期の文化層が重なり合っている遺跡を重層遺跡と筆者は呼んでいる。その中でも遺跡形態がマウンド状を呈すものを重層マウンド遺跡と呼んでいる（西村1994）。これは東南アジアや中国の平原部の特徴的な先史遺跡の形態で、出現時期も限定されている。紅河平原では、重層遺跡出現が頻繁化するのはフングエン期である。そして、その中にはドンダウ遺跡のように、フングエン期からドンソン期までの連続居住が確認され、面積が86000m²（Gò Đồng Đậu Lớn等3つのマウンド複合と考えた場合）、文化層が最大5mを越える大型マウンド遺跡も存在する（Lê X.D.&Hoàng X.C. 1983）。また、タインゼンのように、文化層自体はさほど厚くはないが、フングエン期からドンソン期まで連続居住が確認できる場合も多い。

特に、重層マウンド遺跡は、東南アジア大陸部の平原域に新石器時代から鉄器時代にかけて普遍的に出現するもので、詳論は既稿に譲るが、筆者自身は土器の集中的生産と盛り土により厚い文化層が形成されたと考える（Nishimura&Nguyễn K.D.2002, Nishimura 2003a）。もちろん、こうしたマウンド遺跡は居住遺跡でもあり、土器を繰り返し生産することは、その遺跡で繰り返し居住を行ったことを表しており、定住性の高まりを反映していると考えられる。

E 動物利用について

新石器時代から青銅器時代の遺跡において、若干の遺跡で出土動物骨の同定がなされており、資料採集方法、同定方法に問題はあるが、それらは家畜を含めた動物利用のあり方をおぼろげながら教えてくれる。Table 10は、量的多寡の情報が存在する遺跡のみにおいて、主要哺乳動物の有無（一部量比）を表している。所属時期は、コンコーグア（前期新石器：Vũ T.L.1980）、カイベオ（前期新石器～後期新石器前半：Vũ T.L.&Nguyễn G.Đ.1987）、ホアロック、タックラック（Vũ T.L.&Nguyễn M.T.2005）、マイファー（後期新石器前半：Vũ T.L.&Nguyễn C.1997）、Phượng Hoàng（フオンホアン：Vũ T.L., Lâm M.Đ.&Đặng Q.P.1995）とチャンケン（後期新石器後半）、ドンダウ（後期新石器後半から金属器：Vũ T.L.1984）、Quy Chu（クイチュー：金属器）である。また、哺乳動物以外にも、トリ、カメ、魚などが多く出土している遺跡もあるが、保存条件や採集方法の違いで、他資料との比較が困難な場合が多い。

前期新石器時代のコンコーグアではウシ・スイギュウ類の比率が高かったのが、マードン・ホアロッ

ク期では、どうやらシカやブタに比率の中心が移るようである。カイベオは新石器時代の複数の時期を含む資料で、海水魚やイルカが多量に出土し、哺乳動物がわずかししか出ていない。これはハロン湾に立地する新石器時代の海岸遺跡の生業を如実に反映したものであろう。海岸に近い砂丘上貝塚タックラックでも、魚は多く確認されている。また、山地に近いフオンホアンのようにブタ・シカ以外にサルが多く出土しているものもある。ブタの家畜化に関しては、その過程を認定するにあたって困難があるようだが、マードン・ホアロック期以降、家畜ブタが頻出し、青銅器時代には、野生ブタ（イノシシ）に対し、相対的に比率を増すようだ。また、イヌが出現するのもマードン・ホアロック期以降である。

以上基本的にはブタ、特に家畜ブタの比率が時期を下るに従って増加し、イヌ飼育が後期新石器時代には完全に存在することを読みとることができる。これらは、後期新石器時代の生業において、家畜飼育を伴う農耕の比重が増加したことを類推させる証左である。シカに関しては陳朝期（13-14世紀）になってもかなり捕獲されている事実（Vũ T.L.&Hà V.C.1997）があるが、これは野生ブタとならんで、単にタンパク源として捕獲対象にただけでなく、農耕地に侵入する害獣として捕獲されている結果も暗示している。

Table.10 動物依存体出土表

	ウシ・スイギュウ	サイ	シカ	ブタ	サル	イヌ
Con Co Ngua	58.2%		28.3%	13.4%		
Cai Beo*			少	少		
Hoa Loc	P***	P	多	多	P	P
Thach Lac**	P	多い	最多	P（野・家）	P	
Mai Pha	P		P	P（野：家=38：7）		
Phuong Haong	P		13.8%	41.3%	44.8%	P
Trang Kenh	P	P	P	P（野・家）		P
Dong Dau84	P		P	P（野生多）	P	P
Dong Dau68	フングエン期では野生ブタ、シカが多い。ドンダウ期ではブタ、シカ、スイギュウ多い、家畜ブタ（増加）					
Quy Chu	P	P	P	多		多

*Cai Beoでは、この他イルカ・魚が多量に出土 **Thach Lacでは、この他海水魚が大量に出土
***Pは存在するが出土量確定不可能

F 集団墓の変容

集団墓自体は先行する前期新石器時代の コンコグア遺跡などで屈身葬の土坑墓が確認されているが、後期新石器時代になると複数の遺跡で確認されている。

ホンハイコーティエンはハロン湾の岩陰遺跡で、2005年の調査で集団墓が確認された。6㎡程度の発掘坑から多人数の人骨が重なり合うようにして出土している。同様にマイファアでも、多数の人骨が副葬土器と共に出土している（Bùi V. &Nguyễn C. 1997）。これらの墓葬は、頭蓋骨が破砕されている場合が多く、単純な土坑一次層墓が集中しているものとは考えられないが、両遺跡とも岩陰を利用した集団墓であることには間違いない。

マンバックでは、下層部から伸展葬を中心とする墓群が確認されている。頭位方向がかなり統一され、副葬品の配置にも規則性が見られる規格的なものである。ただ、体の大きさに合わせて墓坑を掘

り込み、副葬品を埋置しているもので、墓葬への必要以上のエネルギー投下を感じさせるものではない。

後期新石器時代後半期の墓葬は、これまでさほど多く確認されていなかったが、筆者が発掘を指導した2002年と2003年のバイメン（ハノイ市）遺跡の調査が、当該期の墓葬問題を明確にし始めた。2002年調査区ではマウンドの川縁でフングエンからドンダウ期にかけての文化層が確認され、2003年調査区では当該期の文化層自体は、後のコーロア城期の土地造成により、削平され残っていなかったが、フングエン期からドンダウ期にかけての集団墓がコーロア城期の文化層下で出土し、方形土坑墓が発掘区全面に分布していることが確認された（調査資料は現在整理中）。2003年の発掘区は約320 m²の発掘面積で、60基前後の墓坑が確認されている。2003年の発掘坑自体は、不整楕円形を呈する微高地状マウンドの短軸を横断するように位置しており、遺跡中央部で墓地が形成されたことが理解できる。おそらく居住層と墓群が重なり合っていた可能性が高い。方形土坑墓には副葬土器が伴うものもあり、土器からフングエン期からドンダウ期に墓群形成が行われたと理解できる。墓坑は、大きいもので2.5m（縦）×2.1m（横）×1.2m（深）程度（深さに関しては文化層が削平されているため、もっと深い可能性あり）の大きさがあり、墓坑の周囲やその直上に小さい円形土坑を掘り、柱などを立てていた可能性が高い。

ヴィンフック省のLũng Hòa（ルンホア:Hoàng X.C.1968）では、長方形土坑底部に一回り小さい同形の土坑をさらに堀込み、人体と副葬品を埋置した土坑墓が多数確認されている。共伴する土器や石戈から墓葬はフングエン期のものと考えられている。墓坑には、3.75m（縦）×2.3m（横）×5.23 m（深）のような大きいもの（7号墓）まで存在する。

ソムゼン（フート省）も小さい丘陵地に立地した遺跡で、丘陵頂上部では文化層が薄く、裾野部では厚くなっている。当遺跡でも土坑墓がある程度数確認されている（Nguyễn K.D. & Tăng Chung私信）。これまで、フングエン期の墓葬報告が少なかったのは、土坑確認を可能とする調査が行われていなかったためで、実は居住遺跡に重なって墓群が形成されていることが明らかになり始めた。マードン・ホアロック段階の墓葬に比べれば、墓坑を初めとして、明らかに墓葬に投下しているエネルギーは大きくなっている。この現象は定住性強化にもとづく墓葬伝統の変化と理解していいだろう。

G 道具の変化

I 土製支脚の出現

土製支脚は炉における煮炊き等の土器の器台と考えられ、ヴェトナムでは現在までその利用が続いている。この遺物の存在は炉での煮炊きが普遍化したことを意味しているが、フングエン期には出現し、以後歴史時代まで継続して利用されている⁽⁵⁾。そして、煮炊きに使う土器の形態が問題となるが、土器は球形あるいは楕円形の器体断面で、口縁部ですぼまりを持つ釜形のものが主体である。この器形は多少の器形変化を見せつつも、その後も一貫して胎土に砂が混じる土器・陶器の主要器種として続き、現在も飯炊き具として残存している。また、土製支脚も形態を変えつつも、歴史時代を経て現在まで使われ続けており、釜形土器と土製支脚での煮炊きは後期新石器時代後半以降の北ベトナムでの伝統的調理方法であったと考えられる。もちろんこの道具セットを、米の炊飯と1対1で結び

つけて考える必要はないが、主要調理対象の一つとして考えておくべきであろう。

II 大型石斧（石鋏）

ホアロック文化の遺跡では部分磨製の有肩大型石斧（Fig.128-1,2）が出土し、また、レンハント：Fig.128-3）、Bãi Phôi Phôi（バイフォイフォイ）では、大型磨製有肩石斧が出土している（Phạm T.N.2000）。前者例は他の小型の石斧類とは違うやや軟質の石材で作られており、切断・切削などの各種木作業には適していない。斧身が若干の反りをみせ、さらには刃部が片刃で、刃部に直交する使用痕（擦痕）も確認されていることから、報告者が判断するように石鋏的な機能を考えてよい。また、後者例は石質が不明であるが、斧身が反っていることから、手斧的な柄付けによる掘削的機能が最も適した利用法であろう。ただし、その対象物が土か木かは慎重を要する。また、こうした大型有肩石斧（石鋏）類はフングエン期の遺跡からは、ほとんど出土例がない。この現象は石鋏が他の素材（木・骨など）のものに取って代わられたか、あるいは鋏自体が利用されなくなったことを意味している。南部の新石器時代では、この置換が骨製品による可能性があるが、北部の場合後代のドンソン期に木製鋏が出土していることを考慮すれば、木製品への置換説が理にかなっている。

III 石刀

マードンでは半月形をした刃器と両側縁に刃部を有す石刀が出土している（Fig.128-4,5）。同様な刃器は、ホアロック文化の遺跡でも平面が方形のものが出土している。これらの刃器は刃角も大きく、鋭利な刃角を必要とする木工には適していない。南部の新石器時代遺跡では類似した石刀類の刃部はポリッシュが観察できる例があり、穂摘み具的機能を推定している（Nishimura et al. in press）。北部の事例においても、穂摘み具的な利用方法を可能性として考えておくべきであろう。また、稲穂の収穫に関しては、貝製穂摘み具の利用や根刈り後、稲穂のたたきつけによる脱粒法（現南部ヴェトナムの収穫法にあり）、稲穂をしごく方法なども想定しておかなければならない。

H 農耕の具体像ならびに定住化の進行

I 水稻農耕と陸稻・雑穀耕作

現研究では水稻耕作が確実に行われていたと明言できるのはドンソン期である。それは夏期に冠水する低湿地帯に遺跡が形成され、そのような環境での定住を可能とするには冬期に栽培可能な冬春稲の導入しか考えられないからである（桜井1987b）。また、文献史料はドンソン期あるいは、さらに下る南北朝並行期においても、生業形態は先端的な水稻耕作のみではなく、狩猟採集や焼き畑もしくは常畑などが存在したことを伝えている（参照：『後漢書』任延伝、『水経注』36巻、温水条）。

当然、紅河平原ではフングエン期以降、ドンダウ、ゴームン、ドンソンという各先史時代区分を通じて、居住域が時代を下るに従い紅河平原の低地部へ伸張する様子から、その居住を可能とする低湿地対応の生業つまり水稻耕作が、生業に組み込まれていたことを、容易に想定させる（西村2003b、Nishimura2005b）。

炭化米は一部、後期新石器時代の遺跡で確認されているし、後続の金属器時代になると確認例も増加するから稲作が生業の一部であったことは間違いない。問題は農耕に水稻耕作や焼畑耕作がどの程度組み込まれていたかであろう。段丘・扇状地複合地帯が活発に利用されるには、水稻耕作と同時に陸稲などの畑作も存在したと考えた方が理解しやすい。時代はさらに下って、鉄器（ドンソン）時代のLàng Vạc（ランヴァック）遺跡は、ゲアン省の段丘・扇状地複合地帯に位置している。この遺跡の土製支脚の胎土からは稲と共にモロコシやハトムギなどの畑作種の雑穀が確認されてる（Hori&Miyamori 2001）。単純な比較ではあるが、ランヴァック周辺の地形は前述のフート省の段丘・扇状地複合地帯によく類似している。

広西の北西部山岳地帯の感駄岩では、米と粟が大量に出土している（広西壮族自治区文物工作隊他 2003）。その一方で、マンバックなどは周囲に石灰岩の岩山以外には、河川と低平な沖積平野しかない環境であり、タイのKhok Phanom Di（コックパノムディ:Higham 2002）と類似した環境にある。稲作が存在するなら、水稻耕作しかありえない。近年の紅河平原下流域における花粉分析研究では、BP3400前後頃からの、イネ科草本類の花粉と二次林に特徴的な*Pinus*（マツ属）が急増していることから、人為的植生攪乱と農耕活動の活発化を推定し、特に、大型のイネ科花粉の増加を水田耕作に結びつけている（Li,Z. et al. 2006）。

後期新石器時代後半期の農耕は、水稻耕作や現在の山岳部に見られるような雑穀と陸稲を合わせた焼畑農耕など、立地に応じた様々な農耕があったと考えてしかるべきだろう。

II 定住化の進行

後期新石器時代前半と後半に関しては、土器のアセンブリッジや石器の組成、技術レベルなどにおいて、さほど大きい違いを読みとることはできない。むしろ、一部の遺物を除いて、前半期に出現したものが、形態や技術精度を若干変えて継続していると理解したほうがよい。もちろん、飼育を含めた動物利用や他の生業面においてもそれは同じではないかと推測される。そのように理解した場合、前半期から後半期にかけての大きな変容は、集落立地パターンの変化と重層（マウンド）遺跡の出現、貝塚遺跡の消滅、あるいは減少にある。ハロン湾諸遺跡の分布パターンの変化、洞穴・岩陰遺跡や海岸遺跡の減少に象徴されるように、この変動は海岸を含む農耕不適地から、農耕適地への立地変化と言い換えてよいであろう。その結果、重層（マウンド）遺跡が頻出するようになったと考えたい。前期新石器時代にすでに出現していた定住集落の要素というものは、後期新石器時代前半期に加増されたことは確実である。ただし、本格的定住社会形成は、マウンド形成、集団土坑墓群の形成、内水面近くの低湿地への進出などを基準にしてフングエン期以降と考える。そして、農耕を一つの生業基盤とした農耕社会の形成がこの段階から始まり、ドンダウ、ゴームン、ドンソンといった金属器時代まで、不断なく遺跡形成が平野部を中心に行われるようになる（西村2003b、Nishimura 2005b）。ただし、山間部に関しては、重層遺跡の報告などもないことから、農耕の具体像でも述べたように、平野部とは定住度、居住構造の異なる社会が形成されていた可能性も十分であろう。焼き畑や畑作を基礎にした、定住度の低い社会も想定しておく必要がある。

III 将来の課題

ところで、問題はこの変化がなぜ起こったかということである。前述したように、すでに後期新石器時代前半期において定住農耕社会を営めるほどの技術力を持っていたにもかかわらず、それを行わずに海岸部などに積極的に集落を展開した理由は何であろうか？農耕に大きく依存するような条件が整っていなかった、あるいは、初期農耕から本格農耕への過渡期に位置していたという説明は安易すぎるくらいがある。海岸依存の生業指向が強かったのは明らかであるが、その理由付けを考える必要がある。または、生業変化にもとづき集落パターンが変化したのか、あるいは集落パターンが変化したから生業が変化したのかと言い換えてもよい。この問題は文化変化をどのように説明するかという考古思想的な問題に関わる。ただし、その場合に周囲状況を考慮しておく必要がある。周知のように、海をはさんで北部ヴェトナムに東接する島嶼部（台湾を含む）東南アジアは新石器時代の始まりが、大陸からの南島語族系集団の植民による結果との仮説が有力である。これは新石器に先行する考古学的遺物軍群と新石器時代遺物群の差があまりにも大きく、他所からの植民文化導入によらなければ説明できないことに大きく依拠している（Bellwood 1989, 1997）。また、島嶼部に現在居住する南島語系住民の穀物等の語彙が共通していることと新石器時代の遺跡から農耕文化的遺物や米が確認できることを状況証拠に、新石器時代の植民は農耕を導入するものであったと考えている。さらに最近明らかになったことが、台湾海峡の澎湖諸島の石斧が海を越え台湾へ運ばれていることである（Rolett et al. 2000）。石材開発とその交易が植民初期に行われていたことが明らかになりつつある。南島語族に関しては、一部中部ヴェトナムを中心とする大陸部東南アジアに居住しており、その起源がサフィン文化を遡り北部ヴェトナムの後期新石器並行期まで遡るという仮説も出されている（Hà V.T. 1991）。仮説の是非はさておき、海岸依存の生業あるいは定住性の低い居住とそれにもなう生業から農耕の活発化、定住性の強化といった変化を、単純唯物論的な、技術革新にともなう進化、段階発展的仮説での説明に落ち着かせず、交易やネットワークの問題、南島語族の植民問題などをも視点に入れて説明していく必要があるだろう。個人的類推としては、マードン・ホアロック段階は、ハロン文化の諸遺跡に代表されるように、遺跡間ネットワークが、海を通じて発達していたと考えている。たとえば、ハロン文化のバイベン遺跡では多量の管鑽法のための石錐が出土しており、その量的多さは交換のための可能性が指摘されているし（Nguyễn K.D. 2005c,d）、溝砥石の多量の出土は骨角器などの集中生産を示しているのかもしれない。今後、上述の視点を留意して分析を行う必要がある。

注釈

(1) 本論ではヴェトナム人考古学者の用いる考古学的文化概念をそのまま使う。これはチャイルドなどが用いた、遺物群による時間と空間を限定する概念だが、ヴェトナムの場合、土器などに関して、決してその検証は十分になされているわけではない。筆者もその概念をそのまま受け入れてはおらず、例えばフングエン、ドンダウなどは時期区分の用語として使えばよいと考えている（西村2003b, Nishimura2006）。ただし、空間的分布を限定する上では理解しやすい用語でもあるので、その目的において、本論は便宜的に使用しているにすぎない。

(2) バイベン遺跡（Nguyễn K.D. 2002）でもいくつかのC14年代値が測定されているが、浜堤での軟質砂質土の文化層であり、後世のさまざまな攪乱要因（植物の根痕など）が影響している可能性がぬぐえない。

(3) 分布図の遺跡位置に関しては、緯度経度情報、筆者の踏査データ、報告書にかなり詳しい地理情報（地図）が掲載されているものに関しては、それなりの精度を保っていると考えてよいが、それら以外に関しては細かい

位置比定において問題も残る。ただし、行論に影響が出るほどの誤差はないと判断する。

(4) デンドイ遺跡はホアロックとフングエン文化のゴーボンに類似するという意見 (Bùi V.1984) が出されている。可能性としてはマンバックのように下層がホアロック・マードン期、上層がフングエン期ということも考えないといけないが、その検証手段を欠いている。たとえ、デンドイがフングエン期に属するものとしても、後期新石器期前半期から後半期にかけて、貝塚遺跡が激減するという傾向に変わりはない。

(5) マードン・ホアロック期には3カ所に配置する土製支脚は明らかに存在しない。しかし、同時期の香港・広東に出土している筒形土製品は、器座 (3脚ではなく1脚支持となる) とされており、一部確認されている (カイベオ遺跡筆者確認資料) が、まだ確認資料が少なく、炉の中で使われたか確認できていない。